

び う

# 微雨・曾畠

下益城郡松橋町

宇土市岩古曾町

国道松橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告

1976

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第19集

び う  
微 雨 · 曾 番

下 益 城 郡 松 橋 町      宇 土 市 岩 古 曽 町

国道松橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告

1976

熊 本 県 教 育 委 員 会

## 序

国道3号線宇土一松橋間における交通緩和と市街地への交通公害の回避のため、建設省九州地方建設局において計画された国道松橋バイパスの建設に伴い、熊本県教育委員会ではその委託をうけて埋蔵文化財の事前調査を実施しました。

学術上大変著名な曾畠貝塚の保護にはとくに留意し、事前に建設省九州地方建設局および関係各位と慎重な協議を重ねました。この曾畠貝塚周辺のルート設定にあたっては、当初建設省から示された計画について、試掘調査を実施した上でルート決定

今回、その曾畠貝塚の試掘調査と微雨遺跡の発掘調査の報告書を刊行することになりましたが、本報告書が学術研究の一助となり、また文化財保護に寄与するものとなれば、私どもの望外の喜びといたすところのものであります。

これもひとえに建設省九州地方建設局および地元教育委員会をはじめとする関係各位の文化財保護に対する積極的なご理解とご協力のたまものと深く感謝いたします。

また、本調査を実施するにあたり多大のご教示・ご協力をいただきました熊本県文化財専門委員斎藤林次、九州農政局糸倉克幹両先生のほか多数の方々に深く感謝いたします。

昭和51年3月31日

熊本県教育委員会

教育長 林 田 正 恒

## 例　　言

1. 本書は国道3号線松橋バイパス（宇土一松橋）建設事業に関連して、昭和49年度に発掘調査を実施した下益城郡松橋町微雨遺跡と宇土市岩古曾町曾畑貝塚の埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 調査は建設省九州地方建設局の委託を受けて熊本県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の実施にあたっては熊本県文化財専門委員齊藤林次氏（地質学）、九州芸術工科大学沢村仁氏（建築学）、九州農政局糀倉克幹氏（地質学）をはじめとした多数の方々の御教示と御協力を得ました。また、宇土市教育委員会と松橋町教育委員会をはじめとした地元諸氏の参加と多大の御協力をいただきました。深く感謝いたします。
4. 遺跡位置図と周辺の遺跡については平山修一、高木恭二両氏のご教示をうけました。また松橋町全図・字図を使用しました。
5. 調査地の実測および写真撮影は江本直が行った。
6. 遺物の整理および実測は熊本県文化財収蔵庫で行い、遺物の写真撮影は白石巖が行った。
7. 本書の執筆および編集には隈昭志、江本直、西町圭子、津川朱美があたった。

## 調査団の編成

調査責任者	田辺哲夫	熊本県教育庁前文化課長
	境信三郎	" 文化課長
調査総務	隈昭志	" 文化課文化財調査係長
調査員 (主任)	江本直	" " 学芸員
	桑原憲彰	" " 技師
	安田宗生	" " 学芸員
	安達武敏	" " 文化財調査員
専門調査員		
微雨遺跡	沢村仁	(九州芸術工科大学教授)
曾畠遺跡	大迫靖雄	(熊本大学教育学部助教授)
	乙益重隆	(国学院大学教授)
	菊池泰二	(九州大学理学部教授・付属天草臨海実験所 所長)
	木村幾多郎	(九州大学医学部文部技官助手)
	斎藤林次	(熊本県文化財専門委員)
	高橋俊正	(熊本大学理学部助教授)
	長谷義隆	( " 助手)
	林行敏	(熊本県立宇土高等学校教諭)
	糸倉克幹	(九州農政局、第四紀研究会)
	森通保	(熊本県立宇土高等学校講師)
地元協力者	宇土市教育委員会	松橋町教育委員会
	富樫卯三郎	
	中山一二	上田繁敏
調査作業員		
(微雨遺跡)	上木ミエ子、相藤ハルエ、中村イチコ、上田信子、宮原千代子、 宮原イシエ、宮原セツコ、西山道子、西浦タカコ、木下秋代、 河野ヨシエ、西山弘子、上村美代子、森永末雄、西山政治	
(曾畠遺跡)	白石巖、山城仁恵、本郷二三子、石橋律子、上村喜美子、 照屋とみえ、徳永雅子、山下千栄子、浜田秀子、笠間イツ子、 小早川真弓、平川恵美子	
調査事務局	浜田勝、前田利郎、栗崎辰之、松本巽 (文化課)	

## 本文目次

	頁
序 章 .....	5
I 調査地の所在地 .....	5
II 調査に至る経過 .....	5
第一章 微雨遺跡 .....	7
I 調査概要 .....	7
II 層位 .....	9
III 遺構、遺物 .....	10
IV まとめ .....	15
第二章 曽畠貝塚 .....	17
I 調査概要 .....	17
II 層位 .....	18
III 遺物 .....	19
IV 曽畠貝塚（昭和41年3月4日報告） .....	22
V 海水準の変化からみた含曾畠式土器層の層序学的研究 .....	24
VI 貝類の分類および分析結果について .....	29
VII 動物遺存体 .....	30
VIII オーガーボーリング器材貝塚調査報告書 .....	32
IX 第IX層出土の木片について .....	35
X まとめ .....	37
第三章 総括 .....	41
I 微雨遺跡 .....	41
II 曽畠貝塚 .....	41
あとがき .....	41

## 挿 図 目 次

	頁
第1図 遺跡位置図	1
第2図 微雨遺跡地形図	2
第3図 松橋町字図（調査地周辺）	3
第4図 曽畠貝塚地形図	4

## 表 目 次

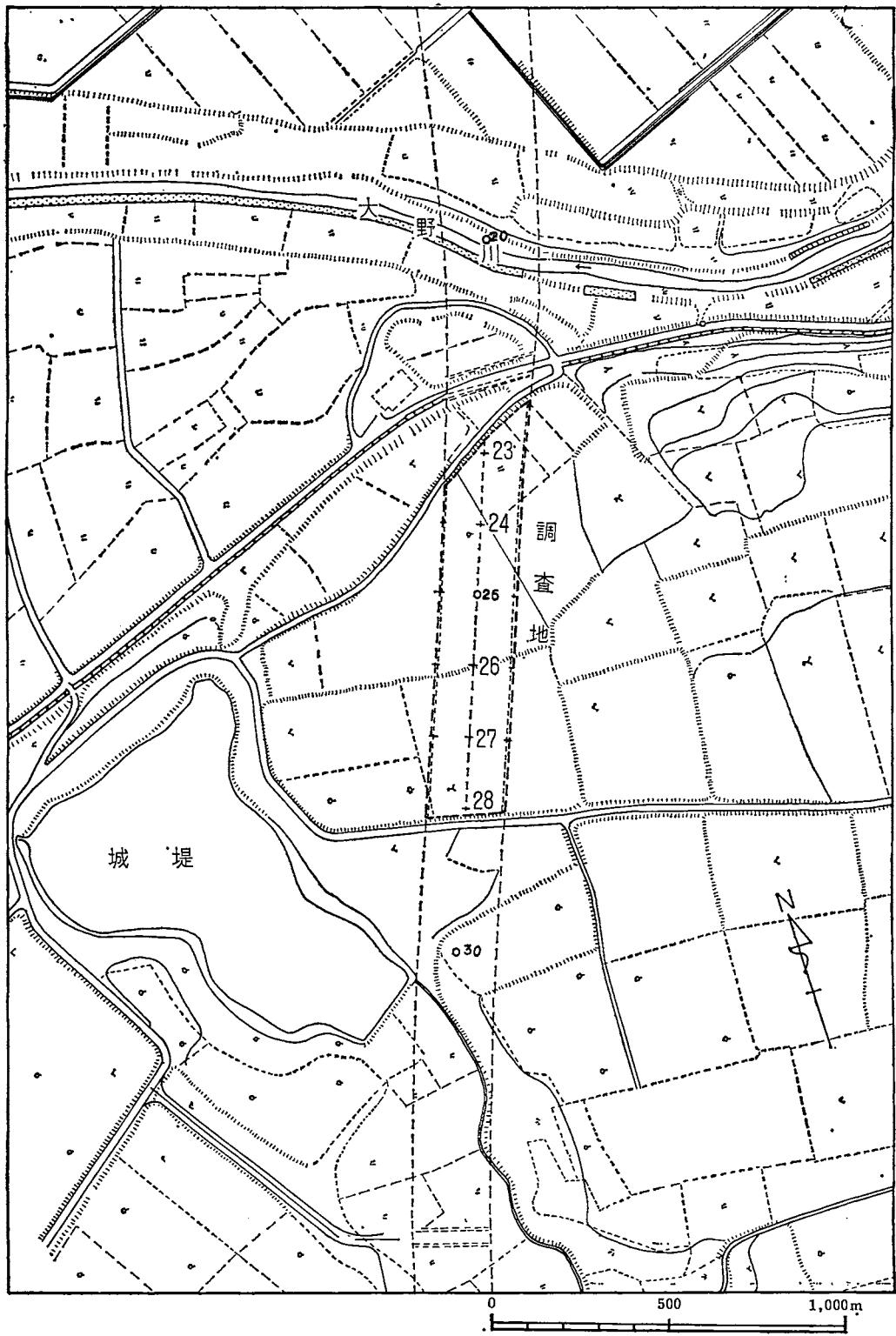
表1 含土器層の層序関係	25
表2 縄文海進と曾畠土器層との関係	27
表3 イノシシ下顎骨計測表	31
表4 土質柱状図	34



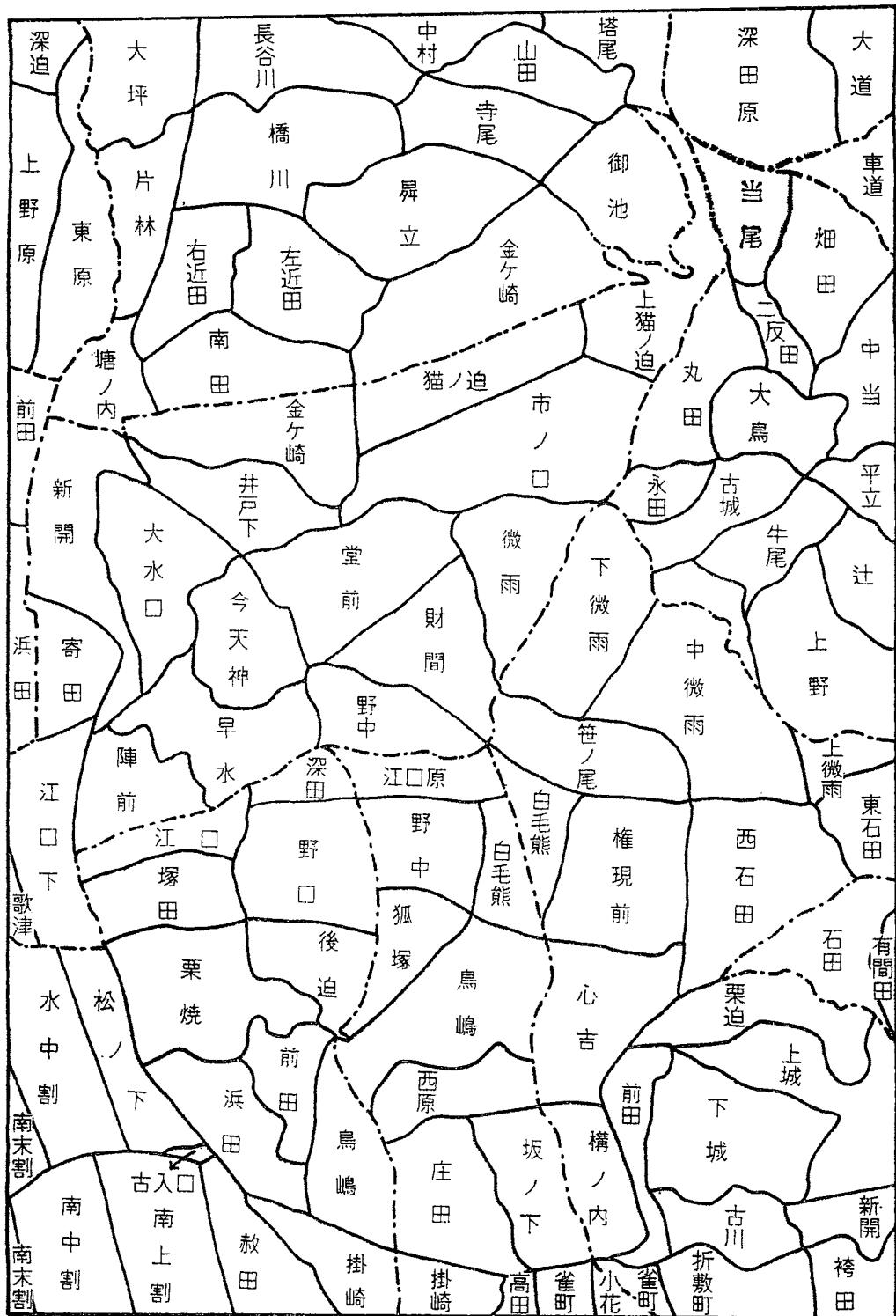
第1図 遺跡位置図



第1図 遺跡位置図



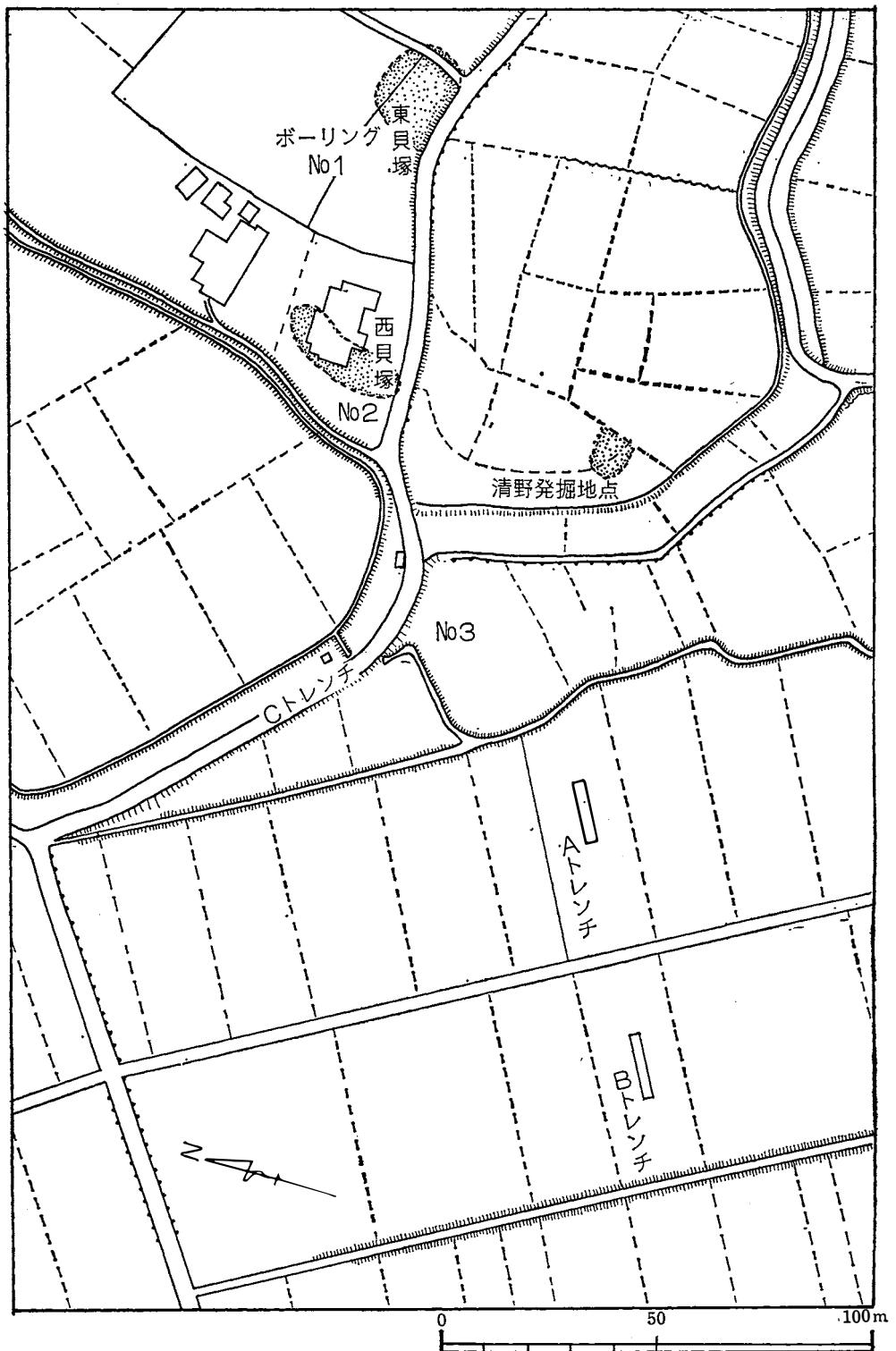
第2図 微雨遺跡地形図



第3図 松橋町字図（調査地周辺）



第3図 松橋町字図（調査地周辺）



第4図 曾畠貝塚地形図

# 序 章

## I 調査地の所在地

今回調査を実施した遺跡の所在地は次のとおりである。

1. 微雨遺跡 下益城郡松橋町大字上久具字微雨・市の前
2. 曽畠遺跡 宇土市岩古曾町字曾畠

## II 調査に至る経過

昭和49年3月、建設省九州地方建設局熊本工事事務所は国道3号線松橋バイパス建設の計画を明らかにし、事前の埋蔵文化財有無の調査を熊本県教育委員会に依頼した。文化課では計画路線内の現地踏査(文化課隈昭志・桑原憲彰実施)と文献資料等による検討を加え、松橋町上久具地区に、近くの豊田城と小字名「微雨」「市ノ前」「城堤」の地名があることからこれらに係る中世遺跡の存在する可能性があり発掘調査の必要があることと、宇土市岩古曾町地区には宇土市指定史跡曾畠貝塚があるので、試掘調査を実施したうえでルートを決定するように要望した。建設省九州地方建設局熊本工事事務所と熊本県教育委員会で数回の協議を重ねた結果、松橋町地区の豊田城周辺遺跡の発掘調査と曾畠貝塚周辺の試掘調査を委託された。

『微雨遺跡』文化財保護法上の手続きを終え熊本県文化課で調査団を編成し昭和49年11月、筆者が九地建熊本工事事務所員の案内をうけて現地を踏査し、調査対象を松橋(宇土一松橋間)路線中心グイのNo.22~47区間すなわち幅約25m、長さ約450m、総面積約11,200m<sup>2</sup>とした。途中の農道を境として北側から豊田城周辺遺跡A~C3地区の調査地に分けた。11月5日から全地区にわたってトレンチ掘りによる試掘調査を実施し、その結果B地区の水田地およびC地区には顕著な遺構・遺物が認められないことから発掘調査の必要はないと判断した。A地区の試掘では、南西部端から溝状遺構を検出、さらに北端中心杭No.23付近から古墳時代の須恵器や歴史時代の土師器片や溝状遺構を検出し、A地区すなわち中心杭No.22~No.28区間は全面発掘調査の必要があると判断した。11月11日プレハブをたて調査器材を運びA地区的全面発掘調査を開始。柔を主とした立木および雑草の伐採のあと北側から全面の表土削ぎを行った。当初、豊田城周辺遺跡とした遺跡名も、A地区が小字名「微雨」と「市の前」にあたることから微雨遺跡と命名した。約80日を要した全面の発掘調査で、次の遺構、遺物が判明した。

古墳時代住居址 土壙 中世時代方形溝 排水溝

1月31日実測、平板測量等を終え遺物や調査器材を撤収し現地調査を終了する。遺物や図面の整理を熊本県文化財収蔵庫で開始し、報告書の作成にとりかかる。

『曾畠遺跡』 ルートの設定に伴い地主の発掘承諾を得て文化財保護法上の手続きをおえ昭和50年2月3日筆者が現地へ行き試掘のトレンチ2か所を設定する。2月4日試掘調査を開始し、2月5日からは地元の作業者も参加。現水田面下約1.5mの掘り下げと一部地層観察のため水田下約3mを掘り下げる。8日間に亘る当初の調査では顕著な遺構、遺物は認められず、土層断面の写真と実測を行い調査を一応終了する予定であった。

しかし、土層観察のため一部約2～3mの深さで掘り下げた堆土の中に自然遺体が含まれていることを発見し、それからの採集作業を行ったが、その際自然遺体と一緒に縄文土器片が混じっている事実に気づき、3月1日から再調査を開始する。

再調査の結果Aトレンチ第VII層（青褐色土礫層）から縄文中期土器・石器・自然遺体（木質部・木の実・木の葉）を検出し、第IX層（泥炭層）からも縄文土器・自然遺体（木質部・木の実・獸骨・貝類）を検出した。BトレンチにおいてもAトレンチとほぼ同じ状況を示すものと判断した。

今回の調査はルートを決定するための試掘調査であり、調査は曾畠貝塚の西側の水田一帯にも遺跡が広がっていることを明確にしたにとどめた。3月17日今回の試掘調査を終了した。出土した遺物および調査器材を撤収し文化財収蔵庫にて報告書作成のための整理および実測を開始した。

（江本 直）

# 第一章 微 雨 遺 跡

## I 調 査 概 要

### (1) 遺跡の位置と環境

微雨遺跡は行政区下益城郡松橋町大字上久具に位置し、国土地理院発行50,000分の1地形図『八代』の北端から5.0cm、東端から9.6cm上にあたる。この地域は宇土半島の南側の基部で、西側を不知火海、東側を宇土市・城南町・松橋町・豊野村・小川町へとかけて小高い山塊が連なっている。松橋町は不知火海と山塊とに挟まれて、その中を大野川・浅川を主とする流水により小規模な沖積平野が形成されている。この松橋町における沖積平野を北端として南側に向い広大な八代平野が広がる。松橋町一帯の水田地の比高は海岸部が海拔約2mで、上久具地域が4~5mを計る。宇土半島から南へ向って小高い山塊が連続しているが、今回の調査地はその山塊の一つ微雨山（現在山頂には松橋東養護園が開設されている）から北西部へ小規模の舌状台地が伸びその末端部にあたる。海拔14~15mを計る。この舌状台地の北側には、周囲を小高い山塊（丘）に囲まれた狭い水田があり、小規模河川大野川が形成した沖積平野といえよう。この大野川の流水量は少なく、付近一帯の水田をまかなうには不充分で、猫ノ迫堤・牛屋堤・城堤・笹生堤など灌漑用溜池が散在している。

### (2) 周辺の遺跡

松橋町のほぼ全域に亘り多くの遺跡が小山塊から舌状に伸びる台地上や、微高地上に散在している。縄文時代の遺跡には仲間貝塚（阿高式土器・石鏃出土）、曲野貝塚（御領式土器）、上久具遺跡（黒川系土器、石鏃）、宮島貝塚（曾畑・轟式土器・石器・獸骨）、松橋大野貝塚（三万田・御領式土器・石器・土偶、人骨・獸骨）、大野台地遺跡（山ノ寺・黒川式土器）上ノ原遺跡（押型文土器・山ノ寺式土器・石鏃、打製石斧、石匙）、古保山A（縄文晚期土器・土師器）、古保山C（縄文押型文・晚期土器）などがある。弥生時代の遺跡には大塚台地遺跡（免田・黒髪式土器・石包丁）、上ノ原遺跡（黒髪式土器・甕棺）がある。古墳時代遺跡は上ノ原遺跡（土師器・須恵器）、松橋貝塚（土師器・須恵器・素環頭刀子）、熊野 権現社遺跡（土師器・須恵器）、上畑遺跡（土師器・須恵器）、竹崎古墳（巨石を用いた横穴式石室）、狐塚古墳（巨石を用いた横穴式石室）、夫婦塚古墳（前方後円墳）、古保山古墳群（池尾A古墳ほか12基）、大塚古墳、山口古墳（前方後円墳）、ガローバル古墳（前方後円墳2基）、宇賀岳古墳（横穴式石室・裝飾古墳）などがある。

歴史時代の遺跡には古保山廃寺（奈良朝の宇土郡寺）、大野遺跡（瓦器・元祐通宝・喜祐通宝・洪武通宝）、川床窯跡（須恵器）、びわだ窯跡（須恵器・土師器・窯壁片）、当尾小学校東窯遺跡（須恵器・土師器・炭化物）、囲遺跡（瓦器・青磁）がある。中世～近世に至る城跡も残されている。豊福城は部落の南側を水田に囲まれた微高地にあり、名和氏と相良氏との攻防で知られる。このほか豊田城、曲野城などがある。

以上の遺跡地から、縄文時代は貝塚が多いことから漁撈に依存する傾向をつかむことができようし、狹少な可耕地に後晩期の小規模の生産集落をかんがえることができよう。弥生時代の前期～中期にかけては好資料をみない。後期は数か所の遺跡が確認されているがその規模は小さいようである。

今回の調査地の近接地には、著名な遺跡が少ない。大野川、浅川がもたらした水田地を生産基盤とするものであるが、大野川右岸に開ける水田地は周囲を山塊に囲まれ、大野川の水量の絶対量が不足し、灌漑用溜池を方々につくり水量を補なっている。台地上の可耕地の生産性はかなり低いものであったと思われ、浅川によって形成された沖積平野も、東側を小山塊、西側を不知火海によってせばめられている。狹少の海岸平野で塩害も考えられ、その生産性はかなり低いものであったと思われる。

注 古保山廃寺「城南町史」P158～160 城南町教育委員会 1960

### (3) 調査地について (図版1)

調査対象地は計画図 No.22～28で長さ（南北）125m×幅（東西）約30mである。すべて畠作地で周囲は果樹（ミカン・桃・クリ・梅）の栽培が多く、さらに桑や蔬菜の栽培が行われている。調査地計画図 No.26より北側は桃、南側は桑の栽培が行われていた。西側崖下には城堤がある。この城堤自体に湧水はなく上流の篠生堤からの落水を集めたものである。北側一帯には水田地が広がり、荻尾山に源をもつ大野川の沖積地である。しかし水量は不充分で溜池に頼っている。小字名は「微雨」と「市ノ前」で中世の遺構の存在を彷彿させる。「微雨」の語源は「別府」であろうし、「市の前」「城堤」は近くの豊田城に係るものと考えられるものである。

調査は縄文時代「上久具遺跡」（埋蔵文化財分布地図 No.367）と弥生～古墳時代集落地、墓地および上記中世～近世にかけての住居址等を想定し試掘調査の実施に移った。

I～III トレンチを設けた。I トレンチは図版1に示す位置に長さ40m×幅1.2m×深さ1.2mを設けNo.24、25付近の第Ⅱ層から土師器片と溝状遺構を検出した。Ⅲ層以下には遺物はない。No.27～28にかけては大溝を検出。第Ⅱトレンチでは土師器片と小規模の溝状および皿状の落ち込みを検出した。第Ⅲトレンチ北側、第Ⅱトレンチと交錯する付近からまとまった状態で土師器片

を検出した。またNo.27調査区付近から縄文後期の土器数片を検出した。

以上の結果からNo.23～26調査区にかけては古墳時代の住居址か墓地、また、溝状遺構に係る中世遺構の出土する可能性が強いと判断。またNo.26～28調査区にかけては、縄文時代後期を中心とする遺構遺物と溝状遺構の正確な性格を知る必要があった。したがって、No.22～28間、長さ（南北）125m×幅（東西）約30mの全面発掘を行うこととした。

## II 層位

調査地の北側にある雁回山は、頁岩、砂岩、礫岩の岩石類と粘土層とで形成される第三紀層からなり、各方向に小高い山をなし断続起伏して走向する。

第三紀以後の生成に係る上部の地層が第四紀で洪積層と沖積層である。今回の調査地は微雨山の北西部へ伸びる舌状台地上に位置するが、大野川の源を発する荻尾山と同じく第三紀層を下部層にして、第四紀層を上層にする地層である。第Ⅲトレンチの層位図は次のとおりである。（図版2）

**第Ⅰ層** 黒色火山灰土層（耕作土層）。いわゆる黒土で沖積火山灰層に含まれる黑色火山灰層である。上部は耕作による攪乱があり、および樹木の植樹、ごぼう等の栽培が行われた個所が認められる。

**第Ⅱ層** 第Ⅰ層の黒色火山灰土層と第Ⅲ層の黄褐色土層とが混じり合った状態を示す土層で黒褐色を呈する土層である。粘質性は低い。

**第Ⅲ層** 第Ⅰ層黒色火山灰層と同じく沖積火山灰層に含まれ、キナコ状の粘質性の低い軟質の土層である。色調は黄褐色を呈し、黄褐色土層と呼称する。

**第Ⅳ層** 硬質暗灰色土層で洪積火山灰層に含まれる。硬いブロック状の土塊でガラス質の粗粒子を含む。

**第Ⅴ層** 黄褐色粘質土層地山と呼ばれる洪積火山灰層で色調は黄褐色を呈し、粘質性の強い土層である。

調査地はほぼ同じ層位状態で覆われている。

旧形は舌状台地の先端が北西部へ傾斜しながら伸び、また舌状台地の北側および南側にもゆるやかな傾斜があり、北側は、段々畑状に地形が変形している。段々畑状に形成されたために南側の高位部分はカットされ、北側の低い部分へ盛土をしフラットな状態に仕上げている。南側は約1mに及ぶカットのため表面は第Ⅴ層の黄褐色粘質土層の露出が認められる。

### III 遺構、遺物

No.22～26に亘る調査区の中でNo.28調査区以北の地域は畠地の整備のためカットされ、また、畠地として長年の耕作や果樹・桑の栽培が行わられたため全体的に包含層は攪乱を受けていた。したがって調査区のほぼ全域に亘って遺物が認められたものの、その量は少なくいずれも細片が多かった。そのような中で遺構・遺物として認められたものは次のものであった。

#### (1) 古墳時代遺構

古墳時代の遺構はNo.25調査区を中心とした地域に認められ、このほかにも遺物はNo.27～28調査区西側の大溝の堆積土の中からも出土した。No.29調査区の以北は畠地整備のため大きくカットされ、また果樹や桑の栽培により包含層が大きな攪乱を受けており、遺構は住居址一基と土壙一基にとどまり、付近から出土する土器片はほとんどが壊されてしまっており、3～4cm内外の細片だけであった。

#### 住居址（図版3）

No.25調査区のほぼ中央部分から検出された。主軸をN—28°—Wの方位にとり、形状はややいびつな方形を呈する。長辺360cm×短辺270cmを計り、小型の住居址である。上部を耕作により大きくカットされており残存する肩から床までの深さは10cm内外である。床面に張り床等の痕跡はないが、かすかに踏み固められた状態を認めることができ、フラットな状態を示す。柱穴は検出できなかった。住居址の中央部および東側に焼土がある。いずれも30cmの広さに認められ付近にカーボンが出土しており炉跡と思われる。土器は細片であるが床面からやや浮いた状態で土師器と叩石状石器が出土し、縄文晩期の薄手の黒色研磨土器片が混入していた。いずれも復原し実測をとることはできないが、土師器は赤褐色を呈し、表面は櫛目調節が多く内面は粗くヘラ調整が行われているものと、うすく櫛目調整を行ったものがある。焼成は充分で堅緻である。内面は粗いヘラ調整を行い土器の胎土は砂粒混じりで粗い。叩石状の石器は自然の河原石を利用したもので、顕著な二次加工は認められないが一部使用痕が認められる。

#### 土 壤（図版4）

住居址の南西部約8mに半月形を呈する土壙を一基検出した。主軸をN—86°—Eにとる皿状の土壙である。上部を相当カットされ底の部分だけが残されたもので、残存する肩からの深さは約20cmである。ローム層に掘り込んだ部分だけが確認でき、黒色攪乱土が混入していた。遺物は認められない。旧形は、ローム層まで掘り込んだとすれば約1mの深さに達する可能性もあり、広さもかなりあり、距離的にもいくぶんはなれることなどから墓地と考えることもできよう。

#### 柱穴群（図版5～8）

No.23・24調査区の西側で南北約16m東西約12mの範囲にわたって柱穴群が認められ、柱穴の

中や周囲から土器の細片が出土した。柱穴はほとんどが円もしくは長楕円である。掘り込みはいずれも浅く20cm内外で規則的な配列はみられない。散在する土器片はいずれも細片で縄文土器が数点みられ、あとはほとんどが土師器・須恵器片である。(図版16~17)

(1)~(3)縄文晩期の遺物でいずれも口縁部である。(4)は底部でやや上げ底を呈し、いわゆる木の葉底である。(8)~(10)はいずれも高坏の坏部片である。色調は赤褐色を呈し、きめの細かい胎土を使用、焼成も良好である。(10)に細い稜線が認められる。(11)~(13)は高坏の脚部である。(11)は裾広がりになる脚部と思われる。色調は赤褐色で細かい胎土を使用し焼成も良好である。内側はヘラ削による調整痕がみられる。(13)は坏部との接合点に近い部分と思われ、横線がある。胎土と焼成から土師器と判断した。(14)は小型丸底壺の胴部の一部である。他の土師器片にくらべていびつな感じを与え内面に手なでのあとが明瞭である。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。(15)は須恵器で色調はうすい灰色を呈する。表面に格子目と内面に弧叩きが施されている。(16)は滑石製の石鍋で表面には煤の付着がある。この細片は石鍋がこわれたのち破片を再使用したらしく、一端を磨き、石包丁のように仕上げている。整形された刃部の中央に使用痕が認められる。

#### 第7号溝東側周辺 (図版9)

第7号溝の周辺で南北約18mの範囲に亘り古墳時代の遺物がまとまった状態で出土した。散在する土器片群を第7号溝が切った状態にあり、土器群と第7号溝とは時期を異にし、第7号溝が時期的に後行するものである。この部分だけが開墾等の破壊からまぬがれ残存したものと思われる。このほかには土器群に伴うと考えられる住居址・柱穴・土墳・溝などの遺構を認めることはできなかった。遺物は、土師器片が主で器形は高坏が多い。壺は破片で見るとうすい赤褐色を呈したものが多く、胎土には砂粒を混入している。調整は内面の底部近くが手なで胴部から口縁の接合部までヘラ削りを行っている。器面は櫛目調整である。焼成は一般的に悪い。図版18(1)は壺で回転測図で口径14.8cm・深さ4.2cmを計る。色調は赤褐色を呈し胎土に滑石を混入している。焼成はあまりよくなく、もろい感じをあたえる。器面に粗い櫛目調整がみられる。(2)は高坏の坏部片である。色調はうすい赤褐色を呈するが砂粒混りの胎土は不良で表面の風化が著しい。器面に櫛目調整のあとが認められる。(3~5)は高坏の脚部片でいずれも赤褐色を呈する。内面をヘラ削りで調整し、器面に櫛目調整が施されている。時期を異にすると思われるが、図版26(2)は偏平な安山岩質の河原石に簡単な打ち欠きを施した石器である。いわゆる礫器で縄文時代のものと思われる。

#### 大溝 (図版15)

No.27~28調査区の西側で最大幅約3.7m、最深部約1mの大溝を検出した。南側の農道から畠地中央部へと向った状態にあり、中央部に向うにしたがい細く、また浅くなっていた。あまりに不規則で古墳の周濠とは考え難い。畠地の中央部に湧水地の痕跡はないので、畠地の雨水

の排水溝もしくは畠地から城ノ堤のある谷間へと通じる道路であったのかかもしれない。堆積土は主に前記の層位図に示す第Ⅰ～Ⅲ層の土が入り混じり短期間のうちに埋まつた状態で、踏み固められた状態は見えない。したがって、ある時期、この溝をうめて畠地を平坦に整地したものと解釈される。遺物はこの堆積土に混じつて古墳時代の土師器と須恵器が出土した。

図版19・20(1・2)は壺の口縁部片でいずれも煤の付着がみられる。色調はいずれも明褐色を呈し、胎土、焼成とも良好で堅緻である。(2)の面内は箇削、器面は櫛目調整が行われている。(3)は高坏の坏部と思われる。胎土焼成が悪く風化が著しい。(4～7)は高坏の脚部でいずれも色調は赤褐色を呈する。(4～6)は胎土・焼成とも不良で、(7)の焼成は良好で堅緻である。(8～10)は須恵器でいずれも細片で器形をもとめることはできない。

#### 溝 遺 構 (図版1)

No.22～24調査区とNo.27～28調査区に多くの溝遺構を検出した。No.22～24調査区では第5号溝が最も大きく南から北へと傾斜する。また、第5号溝には第10・11・14・15号溝が合流し、第2・3・4号溝は切り込んだ状態にある。

#### 方 形 溝 (図版1・10)

第5号溝に切り込んだ第3号溝には同じような規模の第2号溝が直角に交わり、第7・8号溝が平行し、北側の斜面と一諸になって方形の区画を形成している。南北間は不明瞭であるが、東西は約16mを計る。第2号溝は第3号溝へ向って傾斜し、第3号溝は第5号溝と一諸になって北側の斜面へと傾斜している。第7・8号溝は第1号溝との合流点の近くが最も深く一50～60cmを計る。溝の幅は1m～1.5m程度である。方形の区画内は踏み固められた状態を示し、中央部からやや西側によつたところから東側に向つて小規模な第1号溝が走つてゐる。上部をいく分カットされており残存する部分の最も深いところで10数cm足らずである。溝の中および周辺には河原石と一緒に磨製石斧や土師器・須恵器が数点出土した。第3・7・8号溝は方形にめぐる溝であるので古墳時代の方形周溝墓や方墳、また中世の館に付隨する溝などと考えることができる。しかし、方形周溝墓や方墳にしては、主体部が不明確で、溝の規模が小さく、V字やU字形を呈するものはみられず、逆に第3号溝は古墳時代にはみられない有段の形を呈することなど、また古墳時代の明確な遺物が周溝内から出土していないことなどから古墳に伴う溝の可能性は少ない。むしろ方形の溝に囲まれた部分は全体的に踏み固められた状態にあることから何らかの建物があつたものと思われる。すなわち、中央部から東方向へ向う第1号溝は建物に伴う生活用水等の排水溝、また、周囲にめぐる溝は、区画を分かつ機能と雨水の排水溝として捉えることはできないかとするものである。小字名「微雨」が示すように、中世時期に新しく開墾された地域であると想定され、民家からかなり離れた地域にあたり、現地で農作業道具等を保管したり、作物を保管しておくような、いわゆる田屋等の建物があつたのかかもしれない。

## 遺 物

第1号溝 図版21(1～4)はいずれも灰色を呈する須恵器で(5)は土師器で糸切底である、図版26(4)は粗雑なつくりの石斧である。石質は砂岩で良質ではない。敲打による整形痕が認められるが刃部の研磨は雑である。悪い石質に加えて使用が乱雑で破損が著しい。(3)は尖頭状石器で石材はサヌカイトを用いている。両面に簡単な加工を施し、先端を尖がらした石器である。このほか土師器の細片が数点出土している。

### (A) 地 区

図版22(A)(1～3)は灰色の須恵器で(4・5)は土師器である。(4)は明褐色を呈する高台付の壆で胎土、焼成ともよくない。(5)は糸切底である。このほか、土師器の甕や須恵器の細片が出土した。

### (B) 地 区

遺物は非常に少なく土師器の細片が数点出土したにとどまった。

### (C) 地 区

(1～3)は須恵器である。(1)は口縁部で(3)は蔵骨器様の底部である。(4)はスリ鉢で近世のものである。このほか土師器の細片が数点と(4)のスリ鉢と同じく近世の磁器が出土している。

## 第4・5号溝（図版13）

第3～5号溝は切り合いの状態から第4号溝が先行し、遅れて第5号溝が畠地中央部に向って継ぎ足されたものと思われる。第3号溝は第4・5号溝双方に切り込もあり最も新しい。第5号溝はNo.25調査区東側部分から北側の農道まで続きその間28mで幅はNo.25調査区で約2.3m深さは約40～50cmで北側へ向うに従い深くなっている。No.23調査区の農道に近い北側では幅が広くなり最大幅2.7mを計る。

### 第4号溝

図版23(1)は縄文晩期土器で(2)は須恵質土器、(3)は土師質土器でいずれも細片である。このほか、土師器、須恵器の細片がみられた。

### 第5号溝、

図版24(1)(2)は須恵器で、(3)は瓦器で火鉢の破片である。(4)は磁器で、回転測図で口径10.5cmを計る。色調は薄い青色を呈し、やや濃いめの青色で文様がつけられている。(5)も同じく磁器の底部である。

## 第13・14・15・16号溝（図版12）

第13号溝がほぼ南北方向にあり、第14・15号溝が直行した状態にある。第14・15号溝は、この第13号溝との接合点から東の方向へ約6mむかった地点で合流し、さらに、第5号溝に合流する。第14号溝は元来第16号溝とつながり、第15号溝とほぼ平行した状態にあったもので、第13号溝と接する所から新たに第15号溝に合流するように掘り込まれている。図版12第13・14・

15号溝の接合地点で断面の深さを計ると、第13号溝25cm、第14号溝41cm、第15号溝50cmである。また、図版12に示すように、第14・15・16号溝の接合地点での断面では、第16号溝11cm、第14号溝47cm、第15号溝57cmを計る。すなわち、第13号溝の排水は第14号溝もしくは第15号溝に流れ込み、第16号溝の排水は第14号溝に流れる。これらの第14・15号溝に集まつた排水は、第15号溝だけに集められ、さらに第5号溝に合流することがわかる。各溝の長さ、最大幅、最大深は下記のとおりである。

	長さ	最大幅	最大深
第13号溝	18.5cm	95cm	-33cm
第14号溝	15.3cm	60cm	-75cm
第15号溝	19 cm	80cm	-65cm
第16号溝	11.1cm	60cm	-34cm

遺物は土師器の細片が数点認められ、×印地点に焼土が少し認められた。溝と直接的な関連があるとは考えられない。

### (3) その他の遺構

#### 第6・9・12・17号溝

これまで述べてきた溝のほかにも、小規模の溝を検出することができた。

第6号溝は方形溝遺構の内側にあり、第5・8号溝と平行した状態にあり、北側に向ってさらに伸びると思われる。顕著な遺物を検出することはできなかった。調査を実施した範囲での溝の長さは、約3m、幅52cm、深さ6cm程度である。

#### 第9号溝

第8号溝の東側約4m地点に第8号溝と平行した状態にある。調査を実施した範囲での溝の長さは約6.8cmで、最大幅は57cmである。中央部分が最も深く57cmを計る。溝の中から遺物は出土しなかった。

#### 第12号溝

方形溝遺構を形成する第2号溝と第7号溝との接合部付近にあり、第2号溝をきった状態にある。長さは5.6m、幅約40cm、深さ約20cmである。

#### 第17号溝

No.24東側調査区の第5号溝と試掘トレンチの間にあり、規模は小さく、長さ28m、最大幅61cm、深さ28cmを計る。

### (4) その他の遺物

#### 方形溝遺構東部地区

図版23(1・2)は土師器である。(1)は甌形土器の口縁部で、口唇部の外側が細く突出する特徴がある。(2)は口縁部との接合部分から胴部にかけての破片である。器面は櫛目調整、内面

は箝削りによる調整が施されている。(3)は須恵器片で、内面に水引きのあとが残る。このほか付近から(1)(2)の土の土師器と時期を同じくする細片や、中世の糸切底の破片が認められた。

#### 第14号溝周辺

図版25(7)は灰白色を呈する瓦質のすり鉢である。中世のものと思われる。

#### No.27調査区

図版25(1)は縄文後期土器である。鉢の口縁で、口唇部に縄文の施文がある。(2)・(3)は瓦質のすり鉢片で、(4)・(5)も瓦質土器である。細片であるので、器形は推定しがたい。(6)は陶器の底部である。

#### 表採資料

図版25(9)は、縄文晩期土器の口縁部で (8)は中世の火鉢である。

## IV まとめ

今回の発掘調査によって把握できたことについて、時代ごとにまとめてみたい。

#### 縄文時代

頗著な遺構を認めることはできなかつた。遺物の数も少なく、土器の細片と粗雑な石器が出士したにとどまつた。

黒色磨研土器の出土は概して少なく、色調は褐色を呈し、胎土はいく分粗く焼成もありよくない。口縁に沈線を施した甕、深鉢、浅鉢の器形を求めることがきよう。平底を呈する「木の葉底」や、口縁にすり消縄文や沈線の施文が認められることなどから、後期後葉から晩期の所産と考えられる。一般に広大な面積地に多量の遺物を出土するのが後晩期の特徴であり、遺物の少ない今回の調査地は、遺跡の主要部分からはずれた部分にあたると云えよう。

#### 弥生時代

遺構、遺物を認めることはできなかつた。

#### 古墳時代

遺構としては、住居址1基とこれに伴うと考えられる土壙および柱穴群を検出し、さらに、付近に土師器、須恵器の散在をみた。畠地の整地や耕作等による遺跡の破壊も大きいと考えられるが、遺物の量も少なく、住居址が群在していたとは考え難い状況にあつた。周囲に肥沃な耕作地をもたず、生産性基盤の弱い立地状況が原因するものと思われる。検出した住居址と、周囲から出土した土器の時期は、古式土師器を主とする時期にあたる。ただし、壺の口縁に複

台口縁にあたるもののが見あたらず、高坏の脚部は裾開きになり、坏部および脚部の屈曲部が明確でないことなどから推して、古式土師器の中でも新しい時期すなわち須恵器との共伴を見る時期に相当しょう。第7号溝東側からまとまった状態で出土した土器群は、周囲に明確な遺構が見あたらなかつたので、何に伴うものか不明である。時期的には住居址およびその周囲に散在する土器よりも新しく、土器の組成は須恵器を主とする時期にあたる。遺跡の拡大化は認め難いが、古墳時代を通して遺跡の存続があったことは認められる。

### 中世

小規模ながら、三方を溝に、北側を自然の傾斜で囲まれた方形遺構は、内側が平坦かつ踏み固められた状態であった。溝や周囲からは、中世の土師器や瓦質のスリ鉢、また舶載品とも思われる染付などが認められた。さらに、方形遺構のほぼ中央部から東側に向って第1号溝が掘られており、おそらく生活用水の排水に使用されたとも思える。すなわち、方形遺構の内側には、小規模な建造物が設けられていた可能性がある。

### 排水溝

方形溝のほか数多くの溝が認められたが、おもに中央の第5号溝につながるものと考えられ、この第5号溝が北側へ向って自然に傾斜することから排水溝とみることができよう。時期的には方形溝が第5号溝を切った状態にあり、その時期は少なくとも方形溝遺構よりも古いと考えられる。ただし、この第5号溝に流れ込む他の溝の時期は、出土遺物も少ないので不<sup>明確</sup>である。また、No.27～28調査区西側で検出した大溝は、生活地に密着した遺構とは考え難く、台地上にもたらされた雨水が谷へと落ちる際に自然に形成された可能性が強い。この溝の堆積土の中には、古墳時代の土師器や近世のスリ鉢片などがあり、近世における畠地の折に埋められたものと考えられる。

(江本)

## 第二章 曾 畑 貝 塚

### I 調 査 概 要

#### (1) 遺跡の位置と環境

曾畠貝塚は、行政区宇土市岩古曾町曾畠にある。国土地理院発行50,000分の1、「熊本」の東経 $130^{\circ}36'$ 、線から東へ $34.5\text{cm}$ ・北緯 $32^{\circ}40'$ 線から $2.5\text{cm}$ 上にあたる。宇土半島の基部で熊本平野の南限をなす標高 $314\text{m}$ の雁回山から北西部方向へ舌状に伸びた台地の末端部に立地する。  
注1

台地下の西側には潤川が形成した沖積平野が広がっている。ちなみに貝塚の標高は海拔約 $7\sim 8\text{m}$ で、西側に広がっている水田地は海拔約 $3.7\sim 5.1\text{m}$ である。貝塚の南側には標高 $60.7\text{m}$ をはかる花園山があり、雁回山南麓とこの花園山に囲まれた一帯は小規模の谷合いをなし、沖積平野を形成している。

周辺には古保里遺跡（縄文時代御領式土器を主体とし、貝塚がある）・善導寺（縄文晩期～歴史時代）・山内遺跡（縄文早期～歴史時代、押型文土器を主体とする）・上松山箱式石棺出土遺跡などがあり、向野田古墳へとつながる。花園山の東および南側にかけては古墳が多く散在している。立岡池の東側には、三日鬼の窟古墳・夫婦塚古墳・樅崎古墳がある。立岡池の南側には、立岡遺跡（押型文土器を出土）をはじめとして晚免古墳・ウバ塚古墳・潤野古墳・西潤野古墳がある。

著名な西岡台遺跡や轟貝塚は西方向に直線にして、それぞれ $3.8\text{km}$ ・ $4.2\text{km}$ の位置にあたる。

#### (2) トレンチの設定

今回の試掘調査は水田下まで貝塚が広がっているのかどうかを調査することを目的としたものであった。第4図に示すように、西貝塚の南西部約 $100\text{m}$ 地点にAトレンチを、さらにAトレンチの西側約 $50\text{m}$ 地点にBトレンチを設けた。また、西貝塚とほぼ同じレベル上に立地し、西側約 $60\text{m}$ 地点にあたる部分にCトレンチを設けた。

A・Bトレンチは長さ $15\text{m}$ 、幅 $1.5\text{m}$ とした。Aトレンチは約 $1.2\text{m}$ 掘り下げ、東側約 $1\text{m}$ のグリッドは $3.45\text{m}$ 掘り下げた。Bトレンチは約 $1.35\text{m}$ ・Cトレンチは約 $1\text{m}$ 掘り下げた。西貝塚地点の標高は海拔 $7.78\text{m}$ で、Aトレンチの水田地表面は $4.87\text{m}$ 、Bトレンチの水田地表面は $4.44\text{m}$ で、西貝塚との比高はそれぞれ $2.91\text{m}$ 、 $3.34\text{m}$ をはかる。

**注1**、雁回山は中世末の白亜紀（後期）の火成岩で形成され、泥岩層と礫岩層が見られる。黒褐色の泥岩層は砂岩や流紋岩質凝灰岩を含んでいる。泥岩層の上に主に黄褐色をした礫岩層があり、砂岩の薄層をはさんでいる。礫は砂岩・花崗岩・变成岩・蛇紋岩などで、1m近くに達する巨礫や、1～数mに及ぶ赤色泥岩を含んでいる。とくに、花園山周辺は赤色泥岩が顕著に認められる。

**注2**、周辺の遺跡については下記の文献に詳しい。

卯野木盈二 「宇土半島の歴史」 宇土半島自然と 文化宇土半島研究会 1975

宇土市史跡分布図 宇土市教育委員会 1975

**注3** 平山修一 「熊本県宇土市松山町山内遺跡の遺物」 九州始源文化研究会会報2 1972

## II 層 位

### A トレンチ東側断面 (図版27～1)

I層	耕作土層	
II層	赤褐色粘質土層	ローム状の堆積土
III層	濃茶粘質土層	ローム状の堆積土
IV層	赤褐色粘質土層	V層と接する部分に弥生式土器と思われる細片が認められる。
V層	黄褐色質土層	ローム状の堆積土
VI層	青白粘質土層	ロームの堆積土
VII層	黄褐色砂質土層	ローム状の堆積土に砂質およびまるみをもつ小石が多くまじる。
VIII層	青褐色砂礫層	湧水が多くある。砂および小石が多い。
IX層	泥炭層	黒褐色の砂が主で、小石がまじる、小石は角せん石が多い。
X層	砂礫層	IX層とはほぼ同じ状態を示す。

### B トレンチ北側断面 (図版27～2)

I層	耕作土層	
II層	黒褐色土層	Aトレンチ第III層に比定
III層	赤褐色粘質土層	Aトレンチ第IV層に比定
IV層	黄褐色粘質土層	AトレンチVII層に比定
V層	淡灰褐色砂質土層	
VI層	砂礫層	上部赤褐色 下部淡青褐色 Aトレンチ第VIII層に比定

### C トレンチ 東側断面 (図版28)

I層	耕 作 土	黒色攪乱土層 貝を含む
II層	暗褐色粘質土層	小石・小礫を含む
III層	暗褐色粘質土層	ローム状堆積土。
IV層	青褐色粘質土層	小石・小礫を含む。

### III 遺 物

#### A トレンチ (図版24~31)

##### 第I~III層

遺物は認められなかった。

##### 第IV層

第IV層と第V層とが接する部分に土器片が一点認められた。土器片は細片で色調は赤褐色を呈する。表面はローリングを受けざらざらした状態で焼成および胎土から判断して弥生式土器片と思われる。

##### 第V~VII層

遺物は認められなかった。

#### 第VII層 (図版29~30)

縄文式土器と自然遺物、木片・木の実・木の葉が出土した。縄文式土器はローリングがあり、表面の磨滅が認められる。木片・木の実などは散在した状態である。図版29(1~3)は曾畠式土器の胴部片で、(1)、(2)は平行沈線が施され(3)は横行と斜行する沈線が施されている。いずれも薄手のもので、色調は(1)が黒褐色で、(2)、(3)は明褐色を呈する。(4~9)は後期前葉の土器である。(4)は深鉢の直行する口縁部で波状を呈する。凹線による施文がある。器面は明褐色を呈し、胎土は粗く砂粒が混入されている。焼成は良好であるがローリングによる磨滅が著しい。(5)は深鉢の口縁部で口唇部直下に口辺に平行して傾斜した刺突文が一巡している。器面は黒褐色を呈し、胎土・焼成ともに不良である。(6)は深鉢の口縁部である。施文は見られず、粗い器面調整である。胎土は粗く焼成も良くない。ローリングによる磨滅が見られる。(7)は胴部片である。器面に薄い貝殻条痕文が見られ胎土には砂粒の混入がある。焼成は良好である。色調は外面が暗褐色、内面が黒色である。ローリングによる磨滅が見られる。(8)は薄手のもの

で、沈線状の施行がある。胎土に砂粒の混入は少ない。焼成も良好とはいえない。色調は褐色を呈し、ローリングによる磨滅が著しい。(9)も薄手の胴部片である。外面に貝殻条痕文状文様がある。胎土に滑石の混入はなく、焼成も良くない。色調は外面が褐色を呈し、内面は黒色である。ローリングによる磨滅がある。

#### 第Ⅸ層 (図版30—1～図版32—12)

遺構を検出することはできなかったが、縄文式土器と獸骨・貝類・木片・木の実の自然遺物および網代の一部が出土した。第Ⅷ層の土器片にくらべてローリングは少ない。獸骨と貝類は下層部分に近接し、ブロックの状態で出土した。木片・木の実は上層から下層にいたるまで出土した。木片は最も大きいもので長さ55cm、幅13cm、厚さ3cmをはかる。流木と思われるものが多いが、人工的な削痕の見られるものもある。出土した土器はいずれも曾畠式土器である。図版30(1)は口縁がほぼ直行する深鉢で、復原すると口径は15.4cmをはかる。器壁は口縁部が厚く、胴部にかけて次第に薄くなる。中間部分の器壁の厚さは7mm程度で薄手である。口唇部には刻み目文が施され口縁部の口辺から約2cmに亘って羽状文が施されている。羽状文の下部には横行もしくはやや斜行した沈線が施されている。胎土には砂粒が混じり、焼成は良好である。器面の色調は黒褐色を呈し、外面には多量の煤が付着し、煮炊きに用いられたものと思われる。(2)は口縁部がやや外反し、器壁の厚さ7mmをはかる薄手の深鉢である。施文が内・外両面に見られる。外面は三種の文様を認めることができる。第一文様帶は口辺部直下から四列の連点文が横に並ぶ。連点文の下には五本の沈線が横行し、第三文様帶は、斜行した平行沈線文である。いずれも丁寧な施文である。口唇部にも連点文があり、刻み目状を呈する。内面は連点文と三本の沈線文が施文されている。内面は外面にくらべて施文がしにくかったものと思われ、沈線はみだれしている。沈線から胴部にかけては同じ施文具を用いたと思われるひっかき状の調整痕が認められる。胎土には砂粒が混じり焼成が良好で器面は精緻である。色調は黒褐色を呈し、器面には煤の付着が著しい。(3)は胴部片で横と斜行する沈線を組み合せた文様で、やや施文が雑である。胎土・焼成とも(1)・(2)に比べてやや不良で、色調は外面が黒色で内面は褐色を呈する。(4)・(5)は同一個体と思われる。(4)は口縁が直行する深鉢の口縁部である。口辺部のすぐ下に右開きの羽状文があり、横行する沈線が続く。羽状文・沈線とも(1)の文様に比べて雑な旋文である。(5)は8本の平行沈線文が認められる。薄手の深鉢の胴部にあたる破片と思われる。(4)・(5)の胎土には砂粒が混じり焼成は普通である。色調は、いずれも灰白褐色を呈する。(6)は胴部片で、二本の平行する沈線が認められる。施文は雑である。砂粒混りの胎土で、焼成はあまりよくない。外面に煤の付着がある。(7)～(11)は胴部片で、平行する沈線文が施されている。(7)・(8)には煤の付着がある。(9)の施文は非常に粗雑である。網代(P.L.38)の一部7.6cm×6.5cmが認められた。竹製と思われ、幅約4mmのものを組み合せてつくりあげている。曾畠式土器と共に

伴する遺物として貴重な資料である。

#### 第X層

遺物は認められなかった。

#### Bトレンチ（図版27～2）

##### 第I～II層

遺構、遺物は認められなかった。

##### 第III～IV層

第III層から第IV層へ切り込んだ状態で、幅約1.2m・深さ約25cmを計る溝状の落ち込みがみられ、底部に少量のカーボンを確認することができた。この溝状の遺構が何であるのかはさだかでなかったが、この溝状遺構を含め第III層から第V層にかけては地層の乱れがあり、第III～V層をベースとする文化層が存在する可能性は充分である。

##### 第VI層および第VII層以下（図版32）

第VI層がAトレンチの第VIII層に比定できる。Bトレンチでは、第VI層およびその下層を一部（長さ約15m×幅約1.5m×深さ約1.5m）機械掘りをしたが、その時の排土の中に縄文式土器と自然遺物が見られることを確認し、Aトレンチと同じ様相を示すことを確認した。縄文式土器は合計9点でいずれも細片であるが、Aトレンチの第VIII層出土土器に比べてローリングは少ない。

(1)は器壁の厚さ約7mmを計る薄手の土器の胴部片である。外面に沈線が二本認められ、内面には竈状のもので調整を施している。砂粒混りの胎土で焼成とも不良である。(3)の色調は、(1)、(2)にくらべてやや赤味をおびた黒褐色を呈する。このほかの6点の土器は5～6cm以下の胴部の細片である。いずれも無文で、器壁の厚さは6～8mmを計る。砂粒混りの胎土で、焼成とも不良で器面はざらざらした状態を示す。色調は殆どが黒褐色で、1点だけ明褐色を呈する。

以上、出土した9点の土器は縄文時代後期のものと思われる。

#### Cトレンチ（図版28）

北側断面図に示すように第I層から掘り込んだ落ち込みがみられ、落ち込みの中に貝類が認められた。第I層の耕作土層中にも貝類が認められ、第II層暗褐色粘質土層以下は自然層と判断をした。純貝層とはい難いが、貝類が散在するということで、少なくとも遺物の出土する可能性は認められる。

ただし、第I層の耕作土層には客土の可能性もあり、西貝塚が直接的に伸びて来ているとの断定はできなかった。

（江本）

## IV 曽 畑 貝 塚 (昭和41年3月4日報告)

熊本女子大学教授  
熊本県文化財専門委員 乙 益 重 隆 (現国学院大学教授)

所在地 熊本県宇土市岩古曾町字曾畠

### ○遺跡の性格現状特色

本遺跡は鹿児島本線宇土駅の東南方約2.5キロ、雁回山（標高314m）の西南麓につながる台地の西端にある縄文式の貝塚で、前期に比定される曾畠式土器を出土する模式遺跡として知られる。

貝塚は花園山（標高60.7m）と曾畠部落に、はさまれた低い平坦な台地上にあり、西側は沖積平野に、南側は小さな谷に限られる。

本遺跡は既に明治20年代若林勝邦氏、大正時代はじめには中山平次郎氏が踏査し、次いで大正12年清野謙次氏が、昭和12年頃には小林久雄氏の発掘調査も行なわれた。特に昭和34年江坂輝弥、乙益重隆、賀川光夫氏らの発掘成果に依ると、此の貝塚は南側の谷に面して東西二つの貝塚がある。（第4図参照）

東貝塚は縄文後期に比定される鐘ヶ崎式土器や、坪井清足氏の仮称した岩古曾式土器を主とし、アワビ貝製垂飾品や磨製石器を出土した。西貝塚は約30cmの耕土下に貝殻偽縄文や渦巻文を主とする鐘ヶ崎式土器の層があり、其の下は混土破さい貝層が深さ約25cmをもって広がる。その下に曾畠式土器だけを包含する、ハイガイとカキの深さ約35cmを有する純貝層があり、完形の鉢形土器1ヶ及びほぼ完形の深鉢形土器6ヶが出土した。

最下層、即ち貝層下土層では山形押型文土器と、ミミズバレ細隆線及び条痕文を併用する早期の土器片が出土している。

他にも南側の水田中に曾畠式土器を出土する貝塚があったが、昭和37年頃の地下げ工事で湮滅した。これらの調査成果は近く刊行される予定である。

### ○土地概況

本貝塚の主体は台地の南側と西側を限る崖線に沿って構成され、現在畠地と宅地に占められている。恐らく貝塚の一部は水田地帯にも及ぶもの様である。東貝塚は貝殻の分布状態から

	東 西	南 北	深 さ	
東 貝 塚	約 25 m	約 25 m	約 1.5 m	但し両貝塚は 土師の遺跡で つながっている。
西 貝 塚	約 15 m	約 25 m	約 2.30 m	

みて、約600平方米に亘り、西貝塚は約300平方米に及ぶ。その他にも水田畦畔や道路下には部分的な貝層の堆積が認められ、特に本貝塚の重要地点と見られる西貝塚の直上には、昭和39年から40年にかけて、民家が建ち宅地となった。その為畠地として旧状を保つ区域は約20平方米にすぎない。

尚東貝塚の東側及び北側には土師と須恵器の破片が散布している。恐らく現在熊本市立熊本博物館に所蔵する、奈良時代様式の獸脚は恐らくこの一帯から採取されたのであろう。

## ○周辺の土地開発状況

本遺跡の上には目下のところ新らしい施設や土地深耕、その他著しい現状変更の計画はない。亦その周辺にも特別の計画は聞かない。而し遺跡の外周を限る市道は曾畠と佐野部落に通じる重要な交通路になっている為、住宅地として開発される可能性がある。

特に道路の幅員が約2mしかない為、将来恐らく拡張されるであろう。其の時には貝層の完全に残る崖線が削られる恐れがある。

## ○著書論文

1. 若林勝邦「九州に於ける石器時代遺跡遺物の梗概」考古学雑誌第1巻 第10号（明治20年）
2. 中山平次郎「肥後国宇土郡花園村岩古曾字曾畠貝塚の土器」考古学雑誌第8巻第5号（大正6年）
3. 清野謙次「肥後国宇土郡花園村岩古曾字曾畠——附貝輪の用途——」  
歴史地理第43巻第2号（大正13年）
4. 清野謙次「日本原人の研究」（大正14年）
5. 小林久雄「肥後縄文土器編年の概要」考古学評論第1巻第2号（昭和10年）
6. 三森定男「先史時代の西部日本」  
人類学先史学講座第1巻（昭和13年）
7. 小林久雄「九州の縄文土器」  
人類学先史学講座第11巻（昭和14年）
8. 杉村彰一「曾畠式土器に関する一考察」熊本史学第23号（昭和37年）
9. 乙益重隆「縄文文化の発展と地域性—九州の西北部—」日本の考古学第2巻（昭和40年）

## V 海水準の変化からみた含曾畠式土器層の層序学的研究

熊本県文化財専門委員 斎 藤 林 次

### 緒 言

筆者は去る昭和50年2月、熊本県文化課による曾畠貝塚付近の調査に参加した。その際、含曾畠式土器出土層には3つの異なる層準から出土することが確かめられた。その後、引き続き5本の試錐が実施され、地下地質断面から含土器層相互の層位関係が明かになった。

杉村（1962）、江坂（1967）によれば、曾畠式土器と称するものは諸型に細分されている。筆者は曾畠の例にみられるように同一地点でありながら既に時代を異にして、3層準に出土し、曾畠式土器と称するものに range があることがわかる。

本稿では含曾畠式土器出土層の新旧時代の判定を地質学的視野から過去の海水準の変化を基準にして、その編年を試みることにした。この海水準の変化は過去の世界的規模で行われ日本においても充分基準として採用する価値があるからである。

### I 曾畠貝塚付近の含土器層

曾畠貝塚は宇土市岩古曾町にある。貝塚は宇土市の東方約3km、雁回山と花園山に囲まれた小丘地にある（第1図参照）。No.1、No.2試錐にNo.3、No.4、No.5試錐は西側隣接地に、掘割A-BはNo.3とNo.4試錐間で実施された。

曾畠貝塚、掘割、試錐の綜合地質断面図（図版33）及試錐柱状対比図（図版33）を別に掲げる。

曾畠式土器は1) 古曾畠土器層（泥炭層）、2) 曾畠貝塚層、3) 御手洗土器層の3層準から出土する。古曾畠土器層を阿蘇IV期凝灰岩との間、曾畠貝塚層と阿蘇VI期凝灰岩との間、古曾畠土器層と御手洗土器層との間にはいづれも不整合が存在している。

#### 1. 含土器層の層序関係

江坂輝弥（1958）の発掘によれば、曾畠貝塚では曾畠式土器は轟式土器よりも、上層から発見されている。御手洗土器層中の曾畠式土器は水磨された小片で、この土器が曾畠貝塚又は古曾畠土器層から由来（derive）したもので、御手洗土器と同時代のものではない。上掲の地質断面図からわかるように含土器層の層序関係は新しい層から古い層に順にあげると次の第1表のようである。

#### 2. 古曾畠土器層の時代

古曾畠土器層から出土した貝類、獸骨については第二章VI-VIIのとおりである。

第1表

層名	出土土器
(3) 御手洗土器層	曾畠、御手洗A、出水
~~~~~不整合~~~~~	
(2) 曾畠貝塚層 上部 曾畠土器層 下部 蟲土器層	曾畠、蟲
~~~~~不整合~~~~~	
(1) 古曾畠土器層 曾畠土器層	曾畠

以上出土した生物遺体はいづれも現生種で、貝類は有明海産のものと同種である。C<sup>14</sup>による古曾畠土器層の時代は（日本アイソトープ協会分析）

マガキ=5540±95 B.P.

ハイガイ=5490±80 //

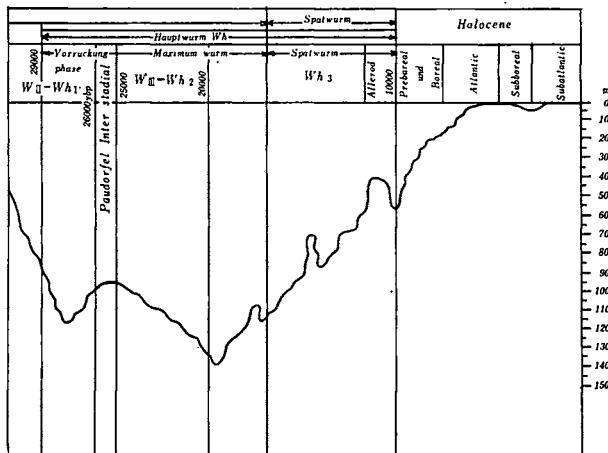
であった。古曾畠土器層は縄文前期に当る。

### 3. 古曾畠土器層の標高

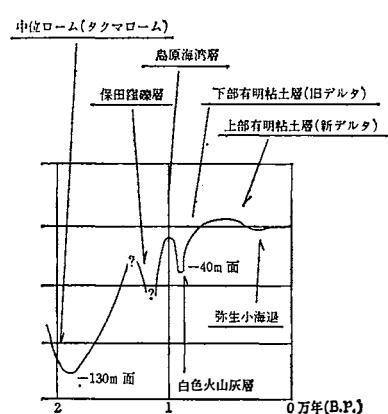
Aトレーナーの地表面は4.8mで、古曾畠土器層で曾畠式土器と共に伴する貝殻は地表下2.8mにあり、従って、曾畠土器の出土位置は標高約2mとなる。

## II、海水準変化と曾畠土器出土層との関係

有明海研究グループによれば、有明、不知火海域における海水準変化は下の第2図にまとめている。第1図をみるとヨーロッパの海水準に相対応していることがわかる。



第1図 ヨーロッパにおける海水準変化



第2図 有明・不知火海域における海水準変化

有明海ではウルム末期に島原海進があり、 $-10\sim-15m$ まで上昇、その後 $-40m$ まで海退している。この $-40m$ から、再び海進に移り、（縄文海進）この時の堆積物は有明粘土層である。この有明粘土層の一部に対比されるのが縄文時代の含土器・貝塚層である。縄文海進に伴う海水準の変化は考古学的資料からも推測されている。

このように海水準変化と含土器・貝塚層の層準が密接な関係にあることに着目し、曾畠土器の編年を試みた。

この目的の為に採用した資料は下の通りである。

唐津港海底遺跡	1965、有明海研究グループ
江 湖 貝 塚	1975、坂田邦洋
尾 田 貝 塚	1974、坂田邦洋
曾 畠 貝 塚	第Ⅱ章参照

### 1. 海水準からみた曾畠土器層の新旧関係

**唐津港海底遺跡**：この遺跡は満潮面から $4m$ 干潮面から $3m$ の海底の砂をサンドポンプで採取した際、海底下 $2m$ のところから曾畠式土器の破片と、カキ・ハマグリ・サルボウなどの貝類のほかイノシシ (*Sus*) の頸骨がある。遺物は保存状態から、この場所がかつて陸上にあったことを物語っている。当時の海水準は恐らく $-5m$ 以下にあったものと考えられている。

**江湖貝塚**：遺物包含層（貝層）は海平面下 $-0.90\sim-1.50m$ 間にあり。貝層中から発見された土器はすべて曾畠式で、共伴遺物としては石器・貝製品・骨角器がある。 $C_{14}$ による江湖貝塚の年代は

$$\text{マガキ} = 5310 \pm 40 \text{年B.P.}$$

であった。

**尾田貝塚**：坂田による発掘地は熊本県玉名郡天水町大字尾田字本屋敷で神社の境内（標高 $7m$ 弱）である。曾畠式土器包含は第7層を主体とし、その上位にある第6層では急激に曾畠式土器包含は減少している。第7層の下面是標高 $5.7m$ である。

第7層（尾田I式）の年代は

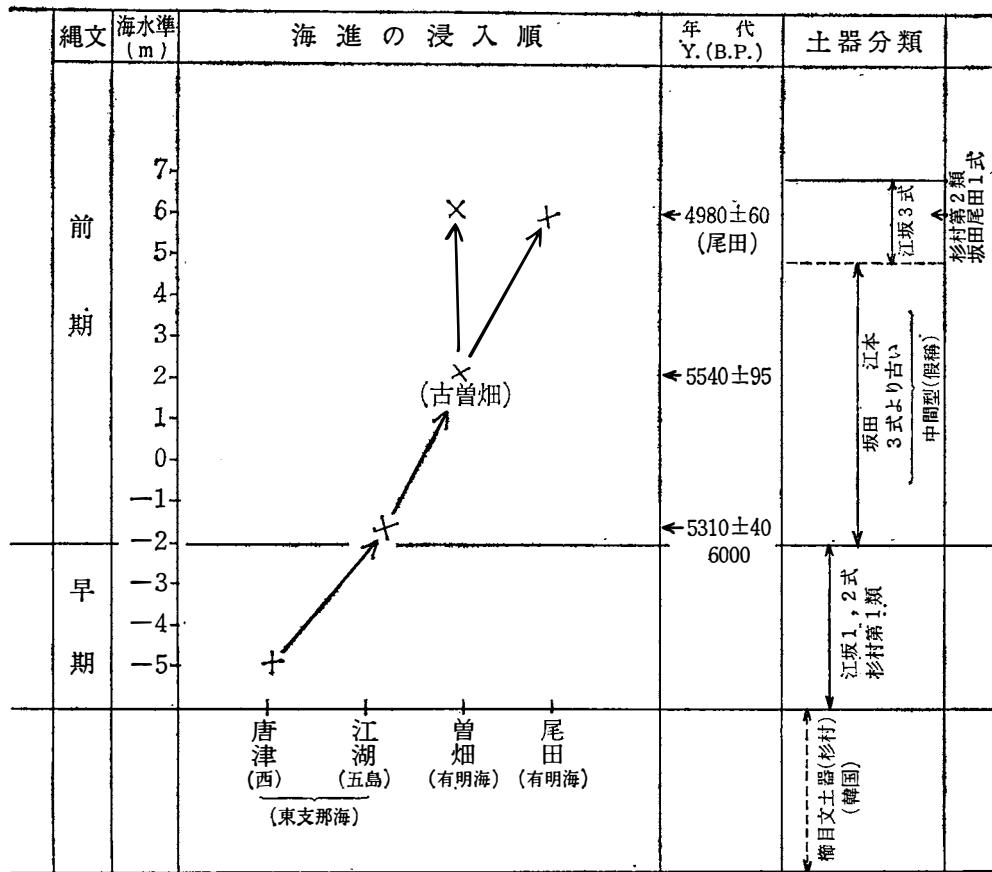
$$\text{マガキ} = 4,980 \pm 60 \text{年B.P.}$$

であった。

**曾畠貝塚**：古曾畠土器層の標高約 $2m$ 、 $C^{14}$ による年代は $5540 \pm 95$ 年B.P. 曾畠貝塚層の下底は標高 $6.1m$ である。

以上の各個処における曾畠土器の出土層は第2表で示される。

第2表 繩文海進と曾畠土器層との関係



上の表から次のような事が導かれる。

- 1) 海進は東支那海の沿岸地帯から順次海岸平野や内湾に侵入した。
- 2) 含曾畠土器層は唐津→江湖→曾畠（古曾畠土器）→曾畠貝塚→尾田貝塚の順に新しい土層が堆積している。

## 2. 曾畠式土器の編年

杉村（1962）は曾畠式土器を形式上3期に大別している。第1類は西唐津の土器、第2類は曾畠貝塚の曾畠式土器、第3類は鹿児島県大口市山野日勝山の土器（日勝山式）に分けた（乙益、1965、の記述による）。西唐津の土器は文様構成に整然とした規律があり、とくに細線が深く刻みこんだ羽状文や綾杉文のなかには、朝鮮半島に分布する柳目文土器と殆んど変りないものがある。又この唐津港海在出土土器は江坂（1967）によって1、2式に、曾畠貝塚の土器を3式に分類している。坂田（1973）によれば、江湖貝塚の曾畠土器は文様も整然とつけられ、また口縁が肥厚したり、外反したりしたものがないので、曾畠3式よりも古く編年できると述

べている。曾畠の古曾畠土器層からの土器は西唐津と曾畠との中間型であるという（江本の口述による）。坂田（1974）は第7層出土の土器（尾田1式）について、文様は整然と施文されたものは少く、大部分は沈線の幅が広くて浅い、しかも文様構成がかなり乱れていると述べている。恐らく江坂の曾畠3式に当るものであろう。（第3表参照）

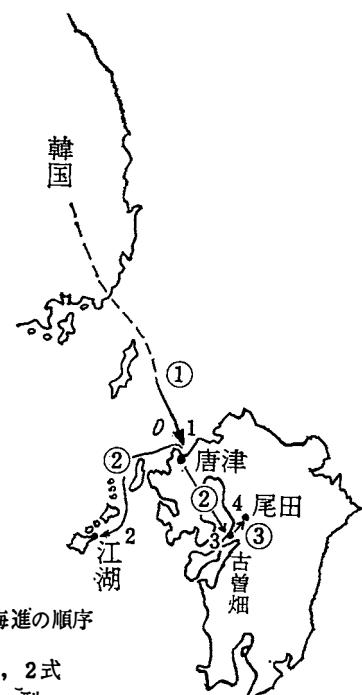
### 3. 曾畠式土器の変移経路と縄文海浸との関係

以上第2章で述べたところを総括して第3図を作製した。

## III 結論

曾畠式土器は縄文海浸が1.5m以下の頃、初めて西唐津に出現した。（曾畠1、2式）。更に海浸が-1.0~-1.5mの頃は離島の江湖に曾畠1、2と3との中間型として現われ、この中間型は曾畠付近の+2.0mの上昇まで続いている。この中間型の終る頃には曾畠付近でみられるように、海浸は海岸平野に侵入した。曾畠貝塚にみられる曾畠3式の土器は海岸平野の当時の海辺に沿い尾田貝塚にみられるよう広く分布するようになった。

擱筆するに当たり、曾畠式土器に関する文献を提与して下さった熊本大学白木原教授、曾畠貝塚付近の調査に御協力して下さった前熊本県文化課長田辺哲夫氏、同文化課員江本直氏、並びに調査の機会を与えて下さった熊本県教育庁に深謝する。



1~4 海進の順序

- ① 曾畠1, 2式
- ② 中間型
- ③ 曾畠3式

第3図 曾畠式土器の変移経路と縄文海進との関係

## 文獻

有明海研究グループ（1965）：有明不知火海域の第四系

江坂輝弥（1958）：曾畠貝塚の発掘調査、松本雅明（1961）の論文による。

〃 （1967）：縄文土器九州編 考古学ジャーナル、12、14—16

松本雅明（1961）：縄文土器の編年 考古学雑誌47、3、164—189

乙益重隆（1965）：縄文文化の発展と地域性、九州西北部、日本の考古学Ⅱ、250—267、

坂田邦洋（1973）：曾畠式土器に関する研究、江湖貝塚、1—31

〃 （1974）：同、尾田貝塚、1—8

杉村彰一（1962）：曾畠土器に関する一考察 熊本史学23、

田辺哲夫（1964）：尾田貝塚 日本考古学年報15、

## VI 貝類の分類および分析結果について

九州大学理学部 菊 池 泰 二

曾畠貝塚 熊本県宇土市岩古曾町

縄文時代前期

層位第IX層泥炭層水田下 2.8m 海抜 (1.97~2.73m) (PL36)

### サンプル1 Aトレンチ第IX層 泥炭層 昭和50.3.14

卷貝	<i>Neverita (Glossaulax) reiniana</i> (Dunker)	ハナツメタ	4	浅海砂泥底
	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	オカミミガイ	1	河口芦原 潮間帶上
二枚貝	<i>Tegillarca granosa</i> (Linne)	ハイガイ	11	内湾 潮間帶～浅海砂泥底
	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg) f. skikame	マガキ (シカメ型)	49	潮間転石付着
	<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i> (Reeve)	カガミガイ	2	潮間帶砂

### サンプル2 Aトレンチ泥炭層 昭和50年3.15

卷貝	<i>Neverita (Glossaulax) reiniana</i> (Dunker)	ハナツメタ	19	内湾砂底～泥底
	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	オカミミガイ	2	河口芦原潮間帶上部など
	<i>Lunella atanoroc</i> (Gmelin)	スガイ	4	潮間帶岩礁または転石地
	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke)	ウミニナ	2	潮間帶砂泥地
二枚貝	<i>Tegillarca granosa</i> (Linne)	ハイガイ	26	内 低潮 ~20m
	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg) f. skikame	マガキ (シカメ型)	41	潮間帶転石地
	<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i> (Reeve)	カガミガイ	1	潮間帶砂泥地
	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)	オキシジミ	3	潮間帶砂泥地やや低塩分 の河口干潟にふつう
	<i>Tapes (Amygdala) Philippinarum</i> (Adams et Reeve)	アザリ	1	潮間帶砂泥地

### サンプル3 Aトレンチ第IX層泥層 昭和50年3月16日

卷貝	<i>Neverita (Glossaulax) reiniana</i> (Dunker)	ハナツメタ	5	内湾砂泥底～泥底
	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	オカミミガイ	3	河口芦原潮間帶上部など
	<i>Lunella coronata</i> (Gmelin)	スガイ	1	潮間帶岩礁また
	<i>Rapana thomasianna crosse</i>	アカニシ	1	河口芦原にすむ

二枚貝 <i>Tegillarca granosa</i> (Linne)	ハイガイ	14	内湾潮間帯～浅海砂泥底 泥底
<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg) f. shikame	マガキ (シカメ型)	43	潮間帶転石付着
<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i> (Reeve)	カガミガイ	1	潮間帶砂泥地、砂地
<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)	オキシジミ	1	潮間帶砂泥地や低塩分 の河口干潟にふつう
<i>Plecotrema octantlatus</i> (Jonds)	クリイロコミミガイ	1	泥っぽい干潟にすむ。
<i>Cerithidea rhizophorarum</i> A. Adams	フトヘナタリ	1	
<i>Meretrix Iusoria</i> (Röding)	ハマグリ	1	

いずれも八代海奥の遠浅の海岸に普通の種である。マガキにはいくつかの形態的に異ったタイプがあるが、出土したものはもっとも小型で干潟の転石などに付くシカメ型と呼ばれるもので、今も有明海などで普通にみられるが、養殖に使われる系統や北方のナガガキ型に対し成熟してはるかに小型である。また、上記の貝類のうちオカミミガイ、クリイロコミミガイは食用に供するには小型でありどこでも多産せぬこと、海岸芦原に半地上生活することから、貝塚形成後混入の可能性が大きいと判断される。

## VII 動物遺存体

九州大学医学部 木 村 幾多郎

筆者の手元に寄せられた獸骨片は5点で、4点はイノシシ (*Sus scrofa leucomystax*) で、残りの1点は、風化のはげしい骨体部片で確定しがたいが、ニホンシカ (*Cervus nippon-nippon*) であると思われる。

### A トレンチ 第IX層泥炭層（下層） (PL37)

No.1. 左側下顎骨で、犬歯歯槽部より前を欠く。骨体部は、犬歯からM<sub>2</sub>にかけての骨体部下縁が欠けている。犬歯歯槽部よりすれば雄獸である。残存歯はM<sub>1</sub>M<sub>2</sub>M<sub>3</sub>で、咬耗はM<sub>1</sub>の象牙質がほぼ全面露出、M<sub>2</sub>は象牙質が点々と露出、M<sub>3</sub>はエナメル質のみの磨耗である。手元にある現生猪♂（4～5才）の歯の咬耗と類似するが、骨体ははるかに本標本が大きい。下顎切痕は広く、閥節突起上面觀は三角形をなす。下顎枝は大きく広い。解剖学教室標本（♂約10才体長130cm、体高60cm）の計測値と比べて大きい。縄文時代に捕獲されたイノシシの中には大形のものが多かったようである。

## A トレンチ 第VII層砂レキ層

- No.2. 左側下顎骨の関節突起部の破片である。標本1.と、ほぼ同じ大きさである。
- No.3. 右側上腕骨で、骨体中央部から遠位部の破片で釣突窓から上腕骨滑車を欠く。栄養孔下外側下方にかけて巾1.9cmにわたってキズがつく。骨体より肉を取る時のキズであろうか。前記解剖学教室標本（上腕骨全長178.1mm）より太い。
- No.4. 右側大腿骨で、大腿骨頭・大転子を欠き、小転子から骨体頂までの破片。筋肉付着粗面の発達悪くほとんど確認できない。
- No.5. シカ（?）左上腕骨骨体部片で、風化がはげしく、ぼろぼろになっており判定しがたい。栄養孔が残り、骨体中央よりやや遠位の破片である。骨体部の断面・側縁のカーブから、シカと推定した。

以上5点の各々について述べたが、標本No.1.については計測表を付す。

標本番号 計測項目	曾 畑 No.1	九大医・解剖 ♂ 10才	♂ 4~5才
P <sub>2</sub> — M <sub>3</sub> 歯列長	110.2	107.0	92.5
P <sub>2</sub> — P <sub>4</sub> 歯列長	38.5	35.1	31.5
M <sub>1</sub> — M <sub>3</sub> 歯列長	70.4	72.3	61.1
下 顎 枝 幅	79.9	71.1	64.4
関節突起 — 筋突起長	30.8	28.2	27.2
M <sub>1</sub> 骨 体 高	45.3 + α	47.1	38.0
骨 体 厚	28.8	28.6	23.0
M <sub>3</sub> 骨 体 高	41.2 + α	47.0	36.8
骨 体 厚	26.0	34.1	24.0
M <sub>2</sub> 骨 体 高	46.1	44.9	37.1
骨 体 厚	27.6	27.1	25.1

表3 イノシシ下顎骨(L) 計測表 単位mm

## VII オーガーボーリング器材貝塚調査報告書 昭和50年6月

サンヨーコンサルタント株式会社福岡支店

### 1. 調査概要

- (1) 件名 オーガーボーリング器材貝塚調査  
(2) 調査期間 昭和50年3月3日～3月6日延四日間（但し現場）  
(3) 調査位置 宇土市大字岩古層町曾畠  
(4) 調査数量  $4\text{m} \times 5\text{ヶ所} = 20\text{m}$

調査番号	ポストホールオーガー(m)	パイブロ(m)	累計深度(m)
No. 1	2.00	2.00	4.00
No. 2	3.00	1.00	4.00
No. 3	3.00	1.00	4.00
No. 4	2.60	1.40	4.00
No. 5	3.00	1.00	4.00
計	13.60	6.40	20.00

- (5) 使用器械 ポストホールオーガー(75mmφ)一式他に簡易試錐機(パイブル)を使用  
(6) 担当者 調査技師 塚崎道雄  
調査員 岩永省三

### 2. 地形ならびに地質概況

本調査地区は鹿児島本線宇土駅の東方約1.5kmの岩古層町曾畠にある。この周辺は緑川により開拓された熊本平野と中生代からなる山地の接する位置にあり、山麓には洪積台地が分布している。基盤は前記の中生代白亜紀の堆積層からなり、その上に洪積世の託麻面といわれる低位段丘堆積物が不整合にのっている。この堆積物は西の平地部では沖積層の下にもぐるものと推定される。本調査地区はこの沖積平野と洪積台地の一部にまたがった範囲にある。

### 3. 調査結果

- (1) B No. 1 掘進長4.00m 地下水位-2.10m

地表から0.3mまで貝塚層でその貝殻片が地表の畠地に散乱している。貝殻は黒い火山灰質の粘土に充填されており、原住民が廃棄したものではないと推定される。また貝の種類はカキの仲間が多いようで、当時付近が海であったことが推察される。その下は0.7mまで暗紫色の粘土が、また2.10mまでは礫混り粘土が続く。この中の礫は上部が細礫で、下部の方は3～5cmの礫が多数含まれている。その下は火山灰質の砂質粘土が1.6m厚存在し、さらにその下には数cmの軽石を含む砂質土があり、さらにその下には数cmの軽石を含む砂質土があり、その上限で上部の沖積層と下部の洪積層に区分した。

(2) B No. 2 掘進長4.00m 地下水位—2.20m

B No. 1 と同じ貝塚層が、深度215mまで存在する。又同層には 2.0m付近に、動物の骨片らしいものが発見された。貝塚層の下は砂質粘土、礫混り粘土が続く。  
礫は小豆大で基盤からの中生層の岩石片が混っている。

(3) B No. 3 掘進長4.00m 地下水位—0.40m

B No. 3 は道路から10mほど離れた水田中で地表より1.25mまでは水田の粘土や火山灰質の砂質粘土が存在する。その下は厚さ2.15mの礫混りシルトがあるが、孔壁がくずれやすく掘削が困難だった。最下部にはB No. 1 と同じ軽石混りの砂質土が存在し、この層以下を洪積層と判断した。

(4) B No. 4 掘進長4.00m 地下水位—1.10m

B No. 3 より西へ約200m地点にある。地表より0.2mの所に土器のかけらが発見された。地表から 1.5mまでは粘土やシルト層が主体で、その下は一部にシルトを挟んだ礫混り砂層が存在する。礫は円礫が混っており、当時の河川氾濫物の名残りと思われる。

(5) B No. 5 掘進長4.00m 地下水位—0.65m

B No. 4 地点より川を隔てて 100m西へ寄った地点にある。地表近くは植物根を含んだ粘土層が1.00mまであり、その下は礫混り層が4.00mまで続く。礫の周囲の砂やシルトは、何れも火山灰質である。尚、B No. 4 の地層に比べると、全体的に黒っぽい土色を示すが、互いに同時異相のものと判断される。

## 4 まとめ

本調査地区は沖積層とその下の洪積層からなるが、その境を軽石を含む砂質土層の上限とした。

貝塚は沖積層の最上部にあり、B No. 1、B No. 2 の 2ヶ所のボーリングで確認したが、当時の斜面が、凹地を埋めるように分布している。

これらの貝殻片は、何れも粘土で充填されており、古いので少くとも現住民の捨てたものではないと考える。

また貝殻は、カキの仲間が主体であることから、当時この付近は海岸線であったことが推定される。

No. 2 のボーリングに発見された貝塚層の中の動物の骨片は、その種類が何か不明であるが、恐らく貝殻と一緒に捨てられたものと推定される。

尚、B No. 4 のボーリングで土器片が発見されたが、これが貝塚と直接関連あるものか、或いは上流から流れて二次埋没したものか今回の調査だけでは不明である。

土 質 柱 状 図										
工 事 件 名		オーガーボーリング器機貝塚調査								
調 査 地 名		宇土市岩古層町曾畠								
総 挖 進 長		4 m 00			使 用 試 錐 機		バ イ ブ ロ		最 終 孔 径	φ 55 %
試番 錐 孔号	工 事 期 間	地 盤 高 (m)	地 下 水 位 (m)	標 尺 (m)	地標 下 水 位 (高 (m))	深 度 (m)	層 厚 (m)	柱 状 図	土 質	色 調
No. 1  昭和50年6月5日	8.9 1.0 1.0 1.0 1.0	2.1 2.0 2.0 3.0 4.0	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1	0.30 0.70 2.10 3.70 4.00	0.30 0.40 1.40 1.60 0.30	○ ○ ○ 占土 ○ ○ 一 ××/×/××	貝塚 粘土 レキ混り粘土 砂質粘土 軽石混り砂質土	黒灰 暗茶 茶褐 黄褐 暗灰	観察事項  小レキ混り  火山灰質  火山灰質
No. 2  昭和50年6月6日	7.7 1.5 1.5 1.5 1.5	2.2 2.0 2.0 3.0 4.0	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1	1.00 1.60 2.15 2.75 4.00	1.00 0.60 0.55 0.60 1.25	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	貝塚 貝塚 貝塚 砂質粘土 レキ混り粘土	黒灰 黒灰 黒灰 褐灰 茶	貝多し 貝多し 貝多し、骨のかけら  火山灰
No. 3  昭和50年6月6日	5.3 3.8 3.8 0.0 0.0	0.4 0.4 0.4 3.0 4.0	1 2 3 4 1	1 1 1 1 1	0.20 1.25 3.20 4.00 0.50	0.20 1.05 2.15 0.80 0.50	粘土 砂質粘土 碟混りシルト 軽石混り砂質土 粘土	茶 茶褐 灰 青灰 褐色	火山灰  レキ、火山灰質  火山灰質	
No. 4  昭和50年6月4日	4.5 4.8 4.8 0.0 0.0	1.1 1.0 1.0 3.0 4.0	1 2 3 4 1	1 1 1 1 1	0.50 1.50 2.60 2.90 4.00	0.50 0.50 1.10 0.30 1.10	粘土 粘土 シルト 碟混り砂 シルト 碟混り砂	褐色 黄褐 暗灰 暗茶 茶 暗茶	0.20の所に土器 火山灰質 火山灰質 小レキ 円レキ(2~5cm)	
No. 5  昭和50年6月3日	4.4 4.1 4.1 4.0	0.6 5.0 5.0 4.0	1 2 3 4	1 1 1 1	1.00 2.50 3.00 4.00	1.00 1.50 0.50 1.00	粘土 レキ、砂混りシルト 碟混り砂 碟混り砂	茶 暗灰 暗灰 黒灰	植物根を混入する表土(0.20) 小レキ 火山灰質 小レキ(5~10mm) シルト質砂多い、火山灰質	

表4 土質柱状図

## IX 第IX層出土の木片について

熊本大学教育学部 大迫 靖雄

本試料は宇土市岩古曾町曾畑（海拔約5m）の水田下泥岩層（海拔1.97m～2.73m）から出土した木片のうち、四片を鑑定の対称として整理上No. 1～No. 4とする。

本試料は縄文前期に埋設したとみられるため、その老化ははげしく、ほとんどの試料の外観は黒色化しているのは勿論、木材の硬度も劣り、試料によっては、さわるだけできわめて容易に破壊する状態にあった。このような状態なので、多くの細胞はすでに破壊されている。したがって巨視的な観察は容易でない。そこでパラフィン包埋して、ミクロトーム切片を作成し、微視的観察によって鑑定をおこなった。

### 試料 No. 1 (PL39)

本試料は、半径290mmの小径木で、髓を含む丸太の約1/4の木片である。板目面に巨視的にかなり大きな放射組織がみられるが、材は老化により軟化し、黒色化しているので木口面の状態からは巨視的な組織の判別は不可能である。そこでパラフィン包埋の後ミクロトームによる薄片を作成したが老化が激しく、永久プレパラート作成は不可能であった。そのようなわけでミクロトーム切削後ただちに検眼を行わざるをえなかった。その結果木口面(1-1)で春材部に複数列の広い道管がみられ環孔材であることが判別した。また管孔外にわずかに小道管が火炎状もしくは放射状に配列しているのがみられる。また広放射組織が観察される。板目面(1-2)においては広放射組織と単列放射組織の存在が確認された。さらに広放射組織は複合型を示している。

他の組織はほとんど判別できなかつたが以上の微視的および巨視的な結果から本試料はブナ科(*Fagaceae*)コナラ亜属(*Lepidobalanus* Endl.)に属する樹種でミズナラ(*Quercus aliena* Blume)もしくはコナラ(*Quercus serrata* Thunb.)と鑑定される。

### 試料 No. 2 (PL39)

本試料は切削加工が施されていたといわれるかなり大きな材で巨視的には柾目面でかなり細微な放射組織が数多くみられる。しかしながら老化がはげしく、かなりもろくなっているため、No. 1と同様他の組織は明白でなくほとんどその特徴は確認できなかつた。したがって本試料もパラフィン包埋し、ミクロトーム切片を作成したが永久プレパラートの作成は不可能であった。しかし微視的な観察によって、木口面(2-1)で道管がかなりはっきりみられる。この結果道管は細微で半径方向に複合したものがみられる。そして木口面で道管は均等に分布している散孔材である。また各道管とも周囲柔細胞が発達し、柔組織は鞘をなしている。この他木

口面上で道管もしくはそれよりやや小さな道管状の空隙で周囲柔細胞の存在しない組織が点在している。この組織は板目面（2—2）においては柔細胞が膨れあがったような細胞としてみられるほか放射組織の直立細胞が膨れあがっているのがみられた。この細胞は油細胞である。また放射組織は1～3列で多くは2列の異性放射組織をもち、道管の穿孔は単穿孔である。以上の結果から本試料はクスノキ (*Cinnamomum Camphora* (Linn Sieb.) と鑑定される。

#### 試料 No. 3 (PL40)

本試料は他の試料に比較してかなり硬度があり、老化の程度は少ないが試料の型は小型である。しかも目廻状の割れによって分離している。巨視的観察から針葉樹で木口面で年輪界がようやく判別できる。老化が他の試料と比較して少なく硬度があるといつてもそのままの状態では材は変色しているため組織の観察は不可能であった。これも他と同様にミクロトームの切削によるプレパラート作成の必要があったが、処理なしでは切片の作成は困難なのでパラフィン包埋をおこなった。その結果本試料は樹脂道は存在しない（3—1）。放射仮道管は存在しない（3—2）。樹脂細胞は存在するが数は少ない（3—1）。仮道管に螺旋肥厚はない。（3—2、3）年輪界はやや不明瞭で春材から夏材への移行はゆるやかである（3—1）。分野壁孔はヒノキ型でほとんど2個である（3—2）。以上の結果から本試料はヒノキ科 (*Chamaecyparis*) の樹種であると鑑定できる。

#### 試料 No. 4 (PL40)

本試料は完全に炭化し黒色化している。したがって巨視的にはほとんど特徴を見出せなかつた。パラフィン包埋した試料からミクロトームによるプレパラートを作成した。木口面（4—1）から広葉樹で、広い道管が放射状に1～2列程度でかなり整然と分布している放射孔材である。また各道管はほとんど孤立管孔を示している。さらに板目面（4—2）の測定から放射組織は複合型の広放射組織と単列放射組織とからなっている。本試料は炭化が著しく、永久プレパラート作成が不可能なので高倍率による測定は不可能であったが柔細胞、木繊維等の状態も考え合わせ本試料はブナ科 (*Fagaceae*) アカガシ亜属 (*Cyclobalanopsis* Prantl) に属する樹種であると鑑定される。

## X まとめ

### (I)

曾畠貝塚は大正12年の清野謙次氏の発掘調査をはじめとして、小林久雄・江坂輝弥・乙益重隆・賀川光夫氏らによる発掘調査が行われている。とくに昭和34年の江坂輝弥、乙益重隆、賀川光夫氏らの調査の結果、西貝塚では鐘カ崎式土器を包含する層があり、その下に曾畠式土器を包含する層と、最下層に山型押型文土器とミミズバレ細隆線文及び条痕文を併用する早期土器が出土する事実が確認されている。(P22参照)

貝塚の範囲は東・西貝塚の台地南縁部と清野謙次氏の発掘地点および西側の水田の一部にも貝類が出土することが確認されている。

現在西貝塚から西側へ向う道路沿いの畠地に貝類が認められ、清野謙次氏発掘地点西側の段落ちになった水田にもマウンド状の貝塚があったと伝えられ、わずかながら周辺から貝類を認めることができる。

清野謙次氏発掘地点西側の段落ちになった水田面は、海拔約5mで東・西貝塚付近が7~8mを計る。すなわち、表面上観察できる貝塚は海拔約5m~8m上に位置する。

### (II)

試掘調査は従来確認された貝塚の範囲が西側の水田地（海拔4・44m以下）へどれだけ伸びているかを調べるために、A・Bトレンチを設けた。

調査の結果、A・B両トレンチから遺物を検出することができ、台地西側の海拔4.44m以下の水田地一帯に貝塚が大きく広がることが明らかになった。

最近西北九州や有明海沿岸で、海拔5m以下の海岸部や海底から曾畠式土器を出土する事実が増えつつある。県内で水田下に遺物が認められる縄文時代の遺跡には、著名な下益城郡城南町の阿高貝塚、黒橋貝塚が知られ、宇土市馬場遺跡でも水田下から曾畠式土器が出土する事実が明らかにされている。今回の水田下における遺跡の確認はそれらにつぐものであり、今後に水田下から遺跡の発見される可能性を強めたといえよう。A・Bトレンチは長さ15m、幅約1.5mで、Aトレンチの東端に設けた約1.5m四方のグリッドは地表下約3.48mまで掘り下げ、遺物の包含状態を知ることができた。

このAトレンチ東端のグリッドの調査結果をもとにすると遺物の包含層は大きく三期に分けることができる。

すなわち第1文化層・第IV層（赤褐色粘質土層）、第2文化層・第VII層（青褐色砂礫層）、第3文化層・第IX層（泥炭層）の三期（三層）である。

Aトレンチにおいて、各層間の攪乱は少なく、第1文化層と第2文化層との区分は第1文化層（第IV層）が赤褐色粘質土層で、第2文化層（第VII層）は青褐色砂礫層であり、土質が明ら

かに異なることから区分は容易であった。また第2文化層（第VII層）と第3文化層（第IX層）との区分も、第IX層が泥炭質層であることから両者の区分は容易であった。

### （III）

#### 第1文化層（IV層・赤褐色粘質土層）

地表下約60cmを計る東側断面に弥生式土器の細片を検出した。このほかでは、オーガーボリング調査、No.4地点の地表下20cmで土器細片の出土をみた。Aトレンチから出土した土器は細片で多くを語れないが、ローリングを受け、出土数も少ない。付近から流れ込んだ可能性が強い。

第IV層から耕作土に至る赤褐色粘質土を主とした自然堆積土は約60cmあり、水田地における弥生時代もしくは弥生時代以降における大規模な堆積作用を推察することができる、

### （IV）

#### 第2文化層（第VII層・青褐色砂礫層）

海拔2.73m～3.89mで116cmの厚さがある。砂礫を主とした堆積層で水分を多く含む。水分を多く含むので遺物の遺存状態は良好で、土器片のほか人工的加工の見られる木片や木の実などの自然遺存体を検出することができた。出土した土器はローリングを受けており表面に磨滅を見るものが多く、砂礫の移動・流動が考えられる。土器は縄文時代前期の曾畠式土器と後期前葉に比定される御手洗A式および凹線を施した出水式土器に類似するものが出土した。第IX層出土の曾畠式土器にはローリングがほとんど見られないが、第VII層出土のものにはローリングが顕著に見られることから混入した可能性が強く、第2文化層は、御手洗A式をはじめとした縄文後期前葉を主とした文化層であるといえよう。貝類および昭和34年度江坂、乙益、賀川氏らの発掘調査で認められた鐘ヶ崎式土器の出土は今回の調査で確認することはできなかつたが、今後の調査では、第2文化層が116cmの厚い包含層であることからさらに時期的に細分できるものと思える。また、ローリングを受けた土器が多く、砂礫の移動・流動が考えられることから遺物が流動し堆積した可能性が強く、貝類が今のところ出土していないこともあり第2文化層が生活址遺構そのものであるのかどうかは疑問である。

### （V）

#### 第3文化層（第IX層・泥炭質層）

海拔1.97～2.73mに当り78cmの厚さがある。第VII層と同じく水分を多く含む泥炭質層で遺物の包蔵状態は良好である。縄文前期の曾畠式土器を包蔵する文化層で共伴遺物は人工的な加工痕が認められる木片や木の実、貝類、獸骨の自然遺存体と網代の出土をみた。

出土した土器はローリングを受けたものが少なく、多量の煤がそこなわれることなく付着したものがあり、物理的作用にもろい網代が遺存していた事実などから、第3文化層は大規模な土質の流動、移動が行われた可能性は少なく、当時の表面の起伏に応じた一次堆積の文化層と

考えることができよう。

曾畠式土器は合計12点出土した。器形は深鉢が殆んどで、口縁は直行するものとやや外反するものとが認められる。器壁の厚さは7mm程度で薄手の土器である。胎土に滑石を混入したものは認められず、砂粒の混入がある。焼成は充分で色調は褐色と黒褐色を呈する。一般に丁寧な文様が施され、沈線、羽状文、連点文の組み合せにより幾何学文様を構成している。確認しうる範囲では、外面は口縁から胴部と、内側では口縁の一部、口唇部にきざみ目を施文している。底部の資料をみないので、胴部から底部にかけての施文が不明瞭であるが、各地の類例資料からみて、底部まで施文されている可能性が強い。

曾畠式土器としての時期的細分については出土した資料が少ないので明確な判断を行うには至らないが、文様構成の中で連点文、横行および斜行する沈線文、羽伏文を主調をすることが注<sup>1</sup>わかり、横沈線文の中には少し乱れを生じていることなどの特徴があり、今後の時期的細分作業上の好資料となりうる。

貝類は巻貝（ハナツメタ・オカミミガイ・スガイ）二枚貝（ハイガイ・マガモ・カガミガイ・オキシジミ・アサリ）などが認められ、内湾の泥砂性干潟に生息するものが多く、いわゆる「泥砂性漁撈」の生業を考えさせる。

貝類とともにイノシシ・シカの獸骨が出土し、貝類の出土から漁撈の生業が考えられ、獸骨の出土はさらに動物の捕獲が行われ、漁撈・狩猟の生活が想定される。

網代は竹製と思われ、カゴとして用いられたものであろう。現代の竹カゴと変わりないつくりで縄文前期の生活具として注目したい。

#### (VII)

第3文化層は出土した土器の中にローリングを受けたものが少なく、多量の煤がそこなわれることなく付着したものがあり、物理的作用にもろい網代が遺存している事実などから大規模な土質の流動・移動が行なわれた可能性は少なく、当時の起伏に応じた一次堆積の文化層であると考えたが、遺物が他の地点から自然的作用により運ばれて堆積したものか、生活址そのものに堆積が進んでいったのであるかの疑問が残る。

この疑問に対して今回の試掘調査で明らかになったことをまとめれば、

- ① 土器がローリングをうけておらず、流された可能性が少ないと。
- ② 生活に密着した生活具網代が出土したこと。
- ③ 人工的加工痕のある木片が出土していること。
- ④ 貝類と獸骨が一諸に出土したこと。

以上の事柄を列記することができ、西北九州を中心として海底や低レベル地帯から曾畠式土器が出土し、生活址と考えられる遺跡が確認されていることなどから、曾畠貝塚を含め試掘溝一帯が海浜に面した生活址であると判断したい。

## (XII)

昭和37年の発掘調査で、曾畠式土器の包含層の下、すなわち、最下層から山形押型文土器とミミズバレ細隆線文及び条痕文を併用する早期土器が出土することが確認されているが、今回の調査では、早期土器の出土はみなかった。

注1 日本アイソト－協会に依頼した木片と貝類のC-14測定の結果は下記のとおりであった。

N-2405	①第VII層	木 片	6,500±110	(6320±110)
N-2406	②第IX層	木 片	6,360± 75	(6180± 70)
N-2407	③第IX層	マ ガ キ	5,540± 95	(5380± 90)
N-2408	④第IX層	ハイガイ	5,490± 80	(5340± 75)

年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsB.P.）として示されています。

### 参考文献

- |       |                     |               |      |      |
|-------|---------------------|---------------|------|------|
| 杉村 彰一 | 「曾畠式土器に関する一考察」      | 熊本大学23号       | 1962 |      |
| 〃     | 「曾畠式土器論考」           | 九州考古学24       | 1965 |      |
| 坂田 邦洋 | 曾畠式土器に関する研究、江湖貝塚    | 縄文文化研究会       | 1973 |      |
| 〃     | 〃                   | :尾田貝塚         | 〃    | 1974 |
| 〃     | 〃                   | :曾畠式土器の器形     | 〃    | 1975 |
| 乙益 重隆 | 「縄文文化の発展と地域性—九州西北部」 | 日本の考古学        | 1965 |      |
| 江坂 輝弥 | 「縄文土器—九州篇6」         | 考古学ジャーナルNo.15 | 1967 |      |
| 麻生 優  | 「岩下洞穴の発掘記録」         | 中央公論美術出版      | 1968 |      |

## 第三章 総括

建設省九州地方建設局熊本工事事務所では、国道バイパスの計画にあたり、昭和48年12月3日以来玉名バイパス、熊本北バイパス、松橋バイパスの文化財について県教育委員会と協議され、それによって具体的な調査等の実施にあたられている。この三つのバイパス予定地内には、32カ所の埋蔵文化財包蔵地の存在が確認され、当面工事着工にあたって、昭和49年度本報告でとり扱った豊田城周辺遺跡（微雨遺跡）および曾畠貝塚について、県教育委員会に調査依頼があった。

### I 微雨遺跡（下益城郡松橋町大字上久具）

微雨遺跡は宇土半島の南側の基部、大野川左岸の中流域にあたる狭小な沖積低地に臨む、舌状台地の末端部に立地する。

当初、遺跡の名称はすぐ東方に存在する豊田城に関連づけて、豊田城周辺遺跡と呼称したが字名にちなんで微雨（びう）と改めた。地名および地形から「微雨」は「別符」つまり別勅符で賜わった田地あるいは国符によって認められた土地といわれる名称に関連あるものではないかとの推測もあった。

調査の結果は、直接それを実証できる遺構、遺物を検出することはできなかったが、古墳時代および中世の遺構、遺物のほか、縄文時代の遺物を検出した。

古墳時代の遺構としては、5世紀の住居址1基とこれに伴うとみられる土壙および柱穴群である。

中世の遺構は、方形遺構と17本の溝遺構である。方形遺構は北側が自然の傾斜で限られ、他の三方を溝で囲んだもので、方形の区画内はかなり踏み固められているので、何らかの建物があったのではないかと推察される。微雨（別符）にちなんだ遺構を当てるとすれば、おそらくこの方形遺構がもっとも可能性大といえよう。

### II 曽畠貝塚（宇土市岩曽町字曾畠）

従来から知られている曾畠貝塚の主体部は、熊本平野の南縁のほぼ中央部にある雁回山と花園山に囲まれた小丘陵上にある。

今回の調査目的は、その曾畠貝塚西南の水田中にトレンチを設定して、貝塚の範囲を把握するとともに、将来、国道バイパス工事が計画されるについての資料を得るためにものであった。水田中に設定したトレンチは長さ15m、幅1.5mとし、各層序の把握を中心に調査した。その結果は第Ⅳ層（赤褐色粘質土層）の最下部からローリングの著しい弥生式土器片、第Ⅷ層

(青褐色砂礫層) および第Ⅸ層(泥炭層)から曾畠式土器片等が検出された。

専門調査員の大迫靖雄・菊池泰二・木村幾多郎・斎藤林次氏および調査者江本直の調査所見をまとめると、以下のような趣旨になると思う。

第Ⅳ層(第Ⅰ文化層)から上層の耕作土にいたる各層(厚さ約60cm)は、少なくとも弥生時代以降における堆積作用によるもので、遺物についてもローリングが著しい。

第Ⅷ層(第Ⅱ文化層)は海拔2.73~3.89mにあたり、水分を多く含む砂礫を主とした堆積層である。土器片のほか、加工痕の認められる木片や木の実などの自然遺存体を検出した。土器は曾畠式・御手洗A式および出水式土器であるが、いずれもローリングが著しい。下層の第Ⅹ層との間に不整合面が認められるので、第Ⅹ層の堆積後、御手洗A式をはじめとする縄文後期前葉のころ、ある程度の浸食をうけ、ローリングをうけながら第Ⅷ層の堆積が行われたものと推察される。

第Ⅸ層(第Ⅲ文化層)は海拔1.92~2.73mの、第Ⅷ層と同様水分を多く含む泥炭で、遺物包含層である。曾畠式を包含する文化層で、加工痕のある木片や網代・木の実・貝類・獸骨等の自然遺存体を検出した。曾畠式土器はローリングが少なく、好資料といえる。胎土に滑石混入は認められず、沈線・羽状文・連点文の組み合せによる幾何学文様で、おそらく外面は口縁から胴部、底部にまで施文した曾畠式の第Ⅰ期(杉村彰一、曾畠式土器論考、九州考古学24、1965)に比定できるものであろう。木片については保存状態が良好でなく、資料としては不充分であるが、一応、ミズナラもしくはコナラ・クスノキが確認されたほか、ヒノキ属およびブナ科コナラ属アカガシ亜属の存在が考えられる。貝類は遠浅の海岸に普通の種である巻貝、二枚貝であることが鑑定され、曾畠式土器の時期におけるこの地域の自然環境が推察できる資料で、浅海の砂泥地の状態で、この曾畠貝塚が形成されたものといえる。

第Ⅹ層検出の遺物で注目すべきものは網代である。保存状態があまりよくないので実測できなかつたが、写真(PL37)に示すとおり、幅約4mmに加工した竹でもって組み合せたカゴ(あるいはザル)状のものと思われ、この時期の加工技術を知るうえで貴重な資料といえる。

そのほか、第Ⅷ層および第Ⅸ層から検出したものとして、イノシシ・ニホンシカ(?)の獸骨片があり、前者の1つはかなり大型のものであるとされる。

試掘調査から出土した木片および貝類のC-14の測定結果については、第二章Xの注に示したとおりである。必ずしも眞の年代とはいえないが、第Ⅹ層の年代が、およそ5,300~6,200年B.Pであるといいう一応の基準といえよう。

曾畠貝塚の西側水田における本試掘調査は、国道バイパスの計画にあたっての事前の遺跡確認調査であった。その結果は、貝塚本体から約100m離れた地点まで、曾畠貝塚と関連の深い地域の広がりを認めることができた。したがって、工事着手にあたって、水田下の発掘調査が必要である。

(限)

## あとがき

建設省九州地方建設局の多大のご厚意のもと微雨遺跡と曾畠貝塚の調査および報告書の作成を行うことができました。

曾畠貝塚の報告につきましては大迫靖雄、乙益重隆、菊池恭二、木村幾多郎、斎藤林次先生から各分野の玉稿をいただき曾畠貝塚の性格をより明確にすることができました。心より感謝いたします。

今回の報告をもとに曾畠貝塚付近のルートが設定されるでありますし、事前調査が実施される場合の参考となれば幸いです。

昭和51年3月31日 隅 岩志、江本 直

## 図版及び写真

## 図版目次

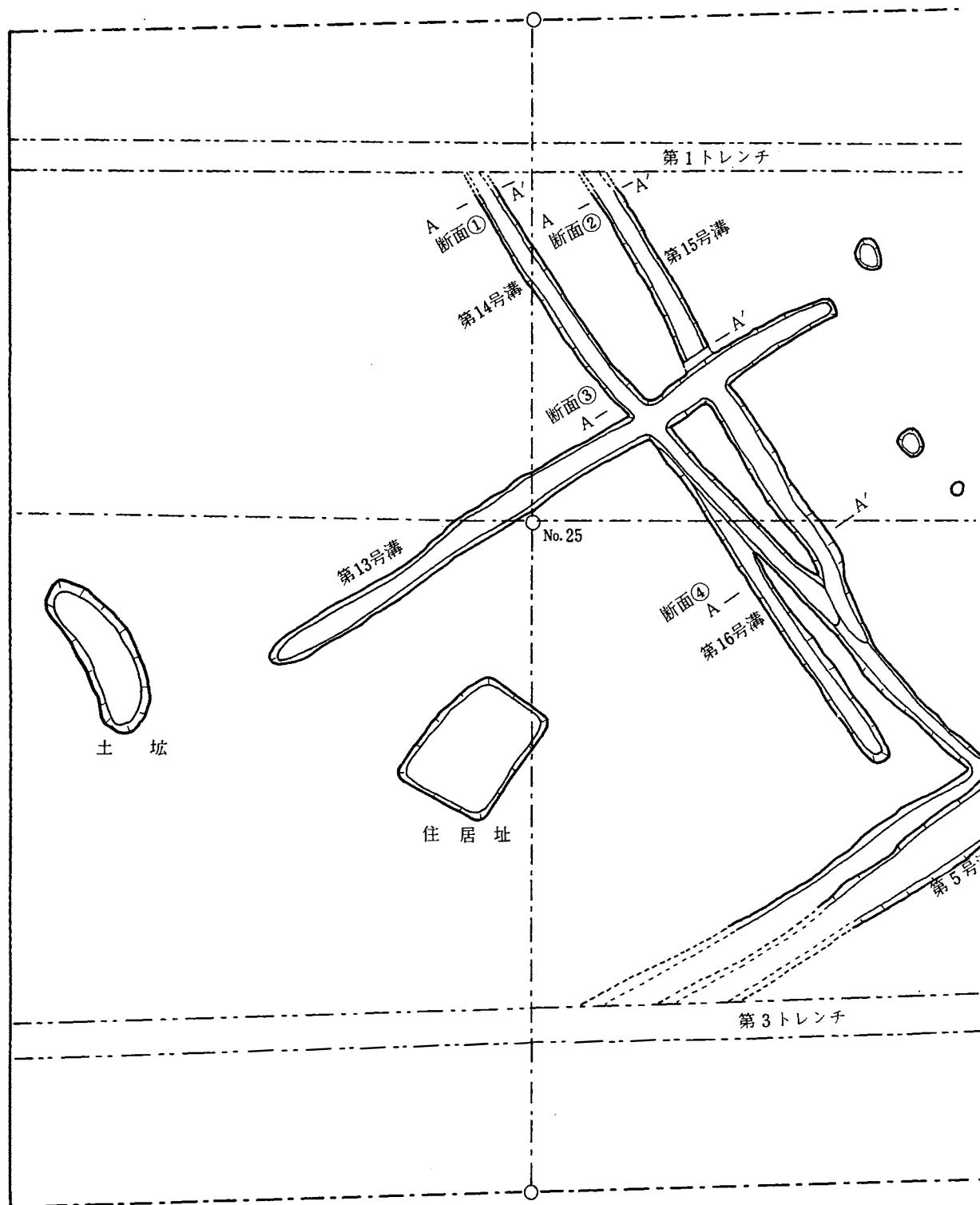
図版 1.	調査区遺構図	おりこみ…	47
図版 2.	層位図		49
図版 3.	住居址実測図		50
図版 4.	土壤		51
図版 5.	柱穴実測図（全体図）		52
図版 6.	柱穴実測図（No.1～No.11）		53
図版 7.	柱穴実測図（No.12～No.23）		54
図版 8.	柱穴実測図（No.24～No.34）		55
図版 9.	第7号溝東側区域実測図		56
図版10.	第1号溝実測図	おりこみ…	57
図版11.	溝断面①②⑤⑥実測図		59
図版12.	溝断面③④実測図		60
図版13.	溝断面⑦⑧実測図		61
図版14.	溝断面⑨⑩実測図		62
図版15.	大溝断面実測図		63
図版16.	柱穴周辺出土遺物実測図		64
図版17.	柱穴周辺出土遺物実測図		65
図版18.	第7号溝東部出土遺物実測図		66
図版19.	大溝出土遺物実測図		67
図版20.	大溝出土遺物実測図		68
図版21.	第1号溝出土遺物実測図		69
図版22.	A C地区出土遺物実測図		70
図版23.	第4号溝・方形遺構東部地区出土遺物実測図		71
図版24.	第5号溝出土遺物実測図		72
図版25.	No.27調査区・第14号溝周辺・表採遺物実測図		73
図版26.	石器実測図		74
図版27.	Aトレンチ層位図・Bトレンチ層位図		75
図版28.	Cトレンチ層位図		77
図版29.	Aトレンチ出土遺物実測図(1)		78
図版30.	Aトレンチ出土遺物実測図(2)		79
図版31.	Aトレンチ出土遺物実測図(3)		80

図版32.	B レンチ出土遺物実測図	81
図版33.	地質断面図	82
図版34.	土質・断面図	83

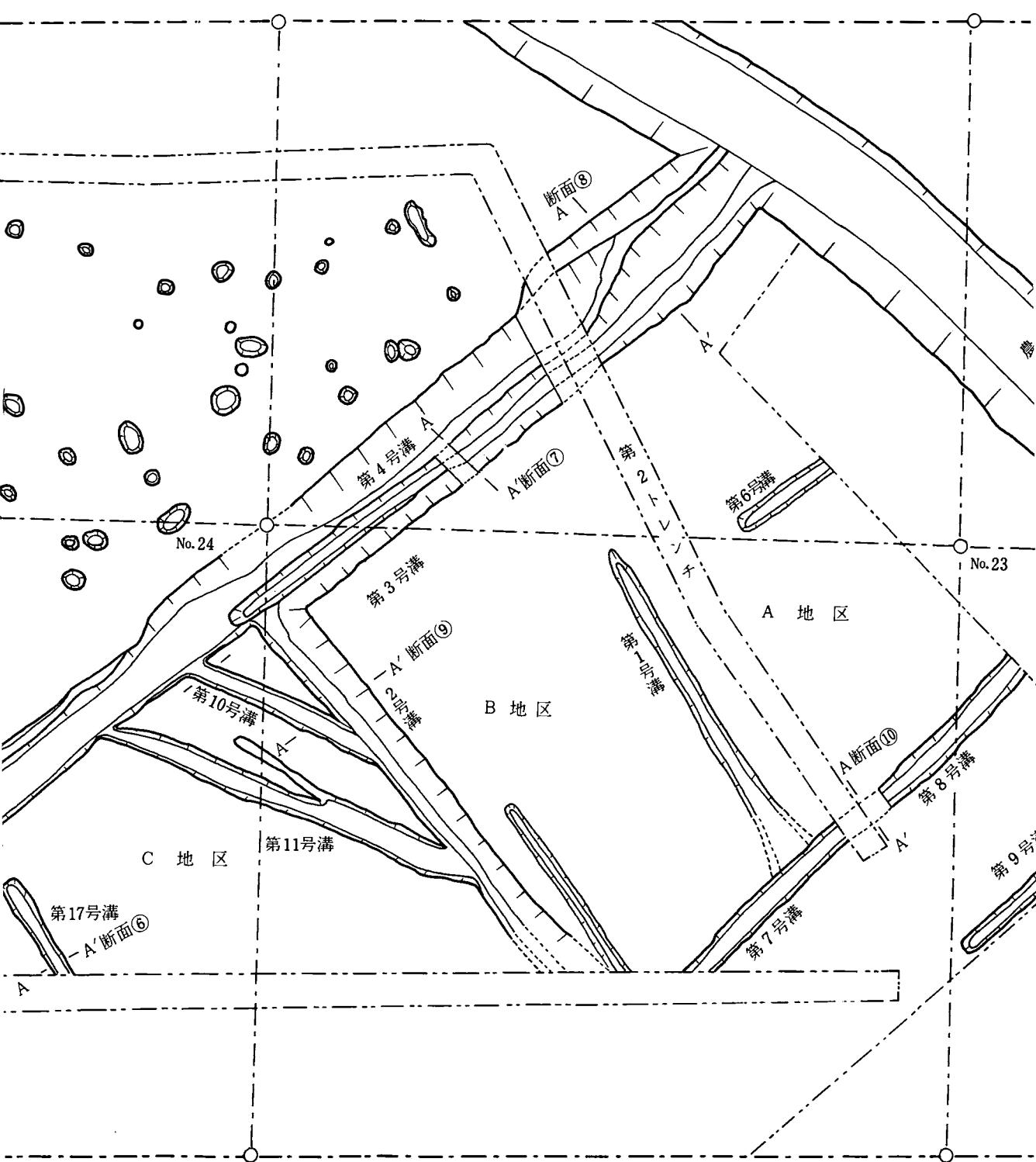
## P L 目 次

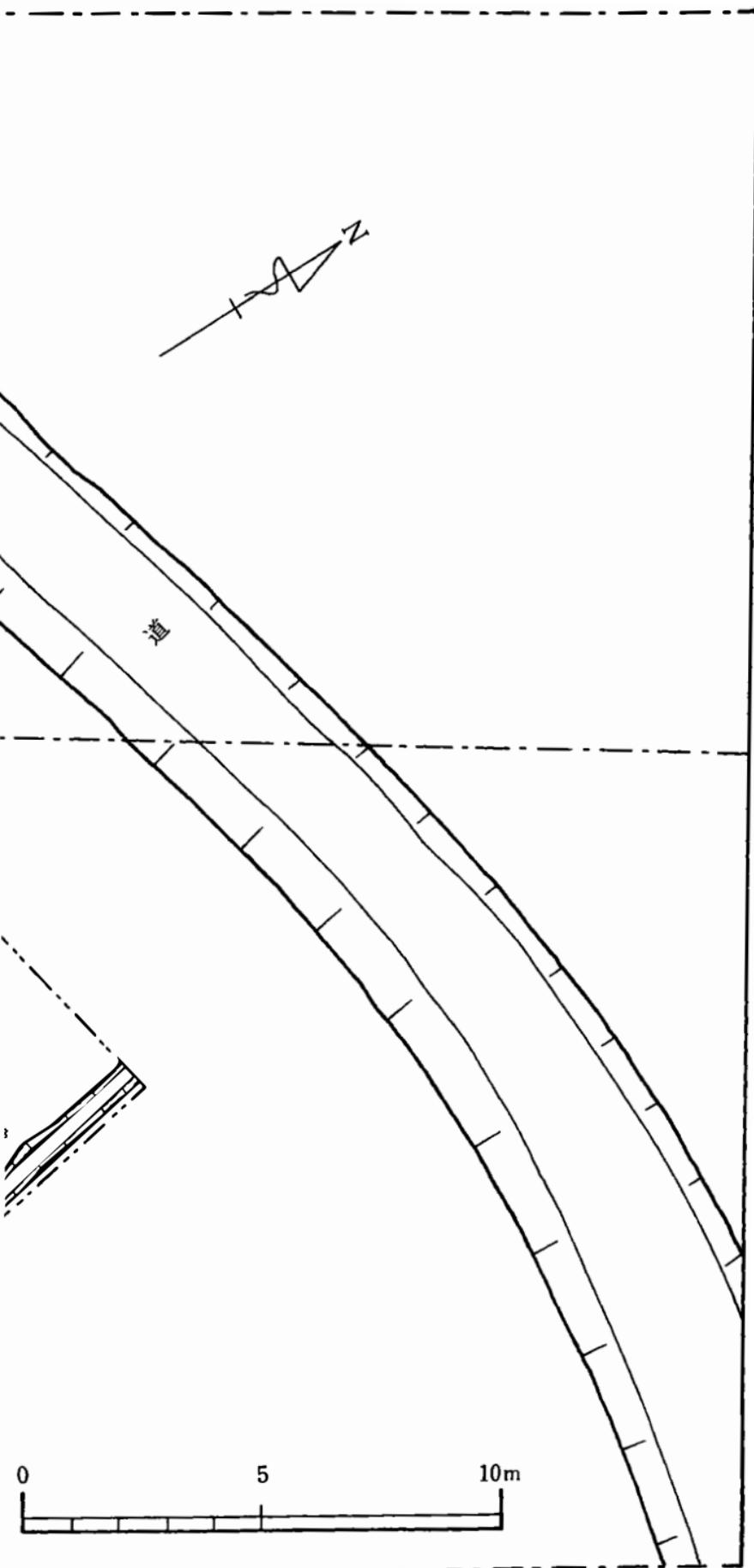
P L 1.	調査地全景・層位	85
P L 2.	住居址・土壤	77
P L 3.	柱穴群掘り込み前の清掃状態・柱穴群	89
P L 4.	No. 23. 24調査地・第2～5号溝と柱穴群	91
P L 5.	方形遺構・方形遺構内	93
P L 6.	方形遺構	95
P L 7.	第1号溝・第1.7.8号溝	97
P L 8.	第7.8号溝・第7号東部土器出土状況	99
P L 9.	第7号溝東部土器出土状況・第3.4.5号溝と方形遺構(東)・柱穴群(西)	101
P L 10.	第5号溝・第3.4.5号溝	103
P L 11.	第10.11号溝・第13～15溝	105
P L 12.	第13号溝・第16号溝を中心	107
P L 13.	大溝断面状態・大溝清掃状況	109
P L 14.	大溝	111
P L 15.	柱穴周辺出土遺物	113
P L 16.	柱穴周周辺出土遺物・第7号東部出土遺物	115
P L 17.	第7号溝東部出土遺物・大溝出土遺物	117
P L 18.	大溝出土遺物	119
P L 19.	第1号溝出土遺物	121
P L 20.	第1号溝出土遺物・A B地区出土遺物	123
P L 21.	A. B 地区出土遺物・第4号溝出土遺物	125
P L 22.	第4号溝出土遺物・第5号溝出土遺物	127
P L 23.	第5号溝出土遺物・No.27調査区出土遺物	129
P L 24.	第14号溝周辺出土遺物・表採資料	131
P L 25.	A レンチ調査状況	133
P L 26.	A レンチ	135
P L 27.	A レンチ東側断面・A レンチ東側断面弥生式土器片出土状況(第V層)	137
P L 28.	A レンチ北側断面・A レンチ北側断面(拡大)	139

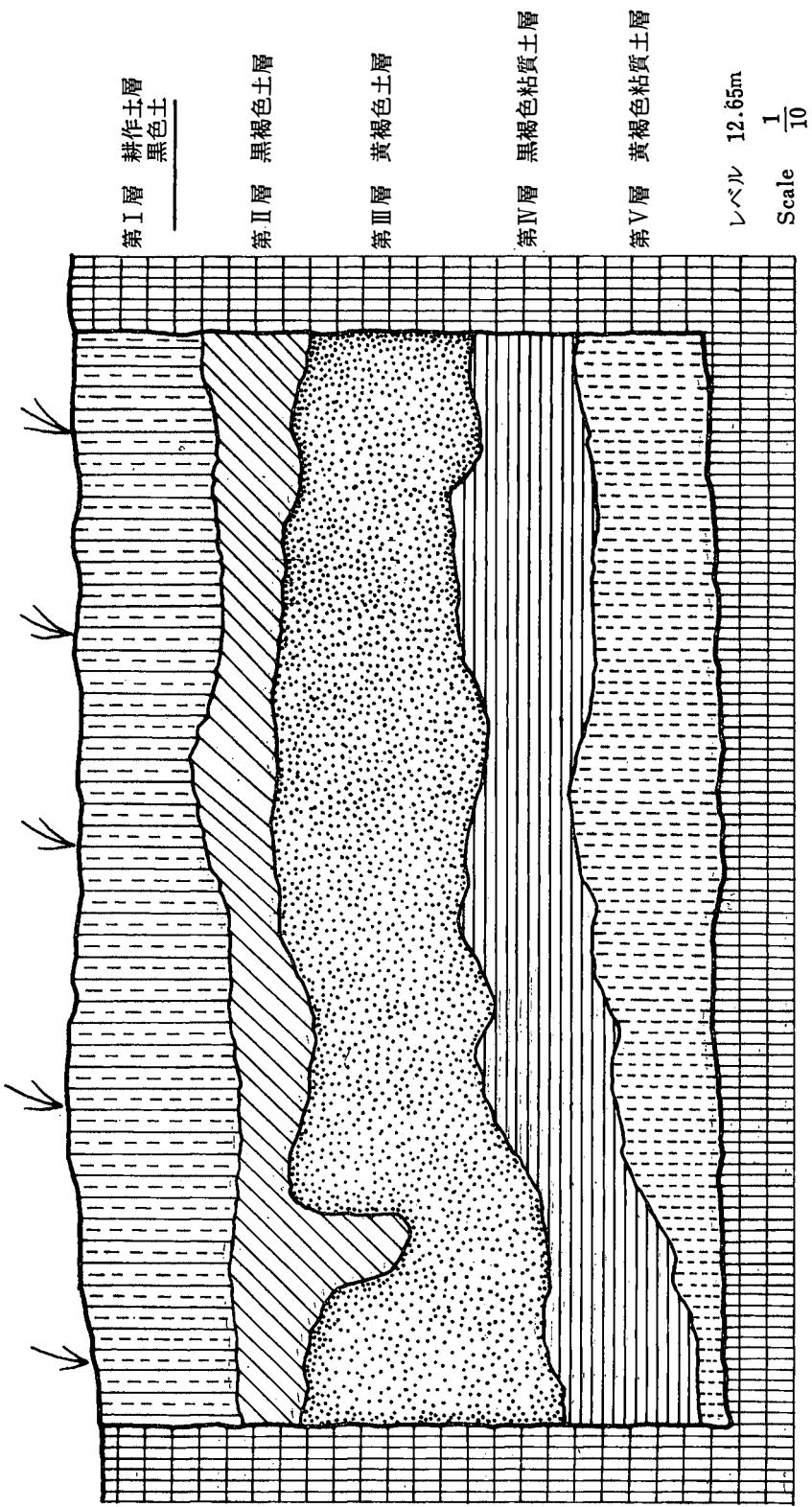
P L29.	B レンチ北側断面・B レンチ東側断面	141
P L30.	C レンチ東側断面・C レンチ北側断面	143
P L31.	A レンチ東側断面・A レンチ第Ⅷ層貝類出土状況	145
P L32.	A レンチ第Ⅸ層土器出土状況・A レンチ第Ⅸ層木片出土状況	147
P L33.	A レンチ第Ⅷ層出土遺物	149
P L34.	A レンチ第Ⅸ層出土遺物	151
P L35.	A レンチ第Ⅸ層出土遺物	153
P L36.	A レンチ第Ⅸ層出土木の実・貝類	155
P L37.	A レンチ第Ⅸ層出土獸骨・網代	157
P L38.	A レンチ第Ⅸ層出土木片	159
P L39.	A レンチ第Ⅸ層出土木片	161
P L40.	A レンチ第Ⅸ層出土木片	163



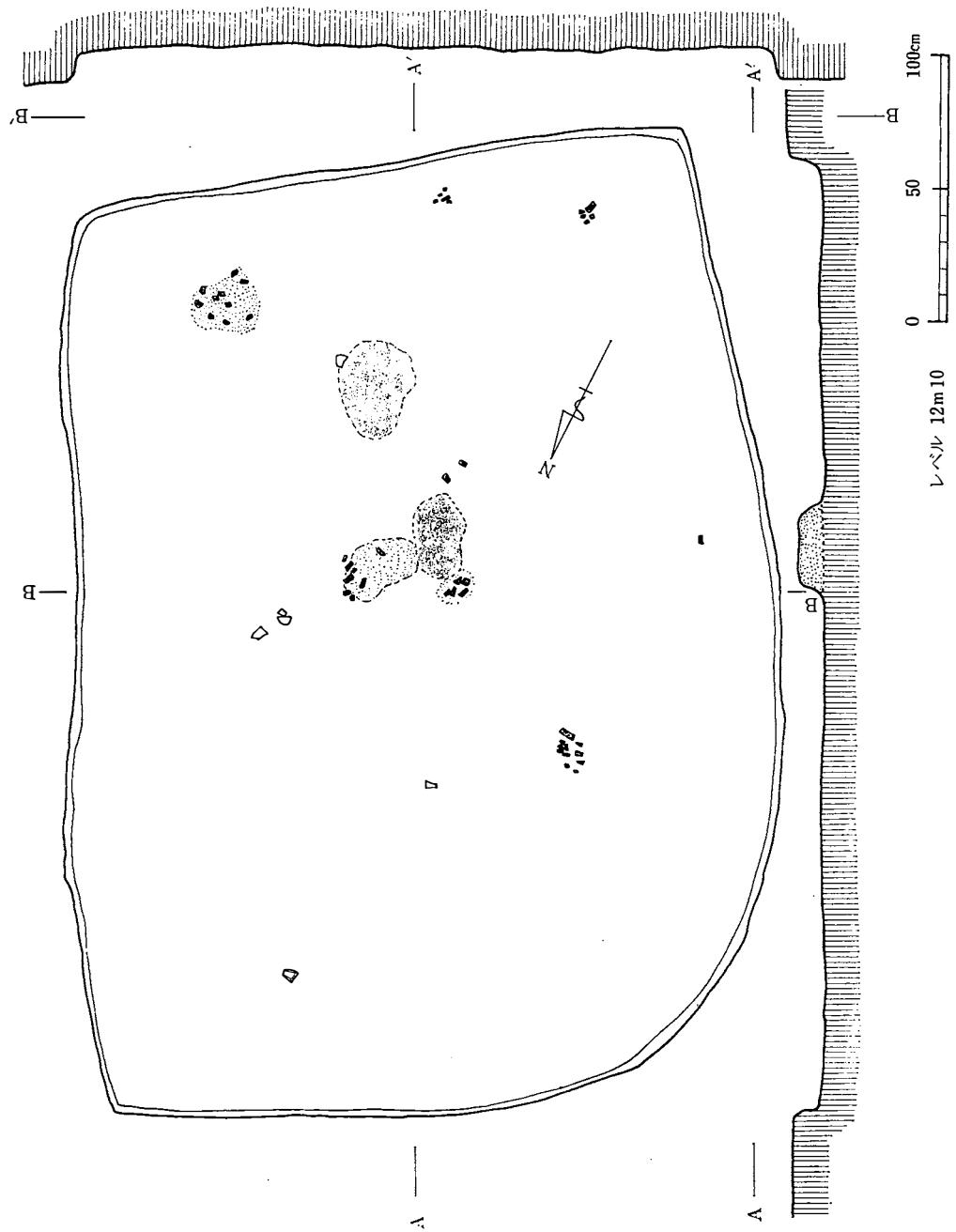
図版1 調査区画・遺構図



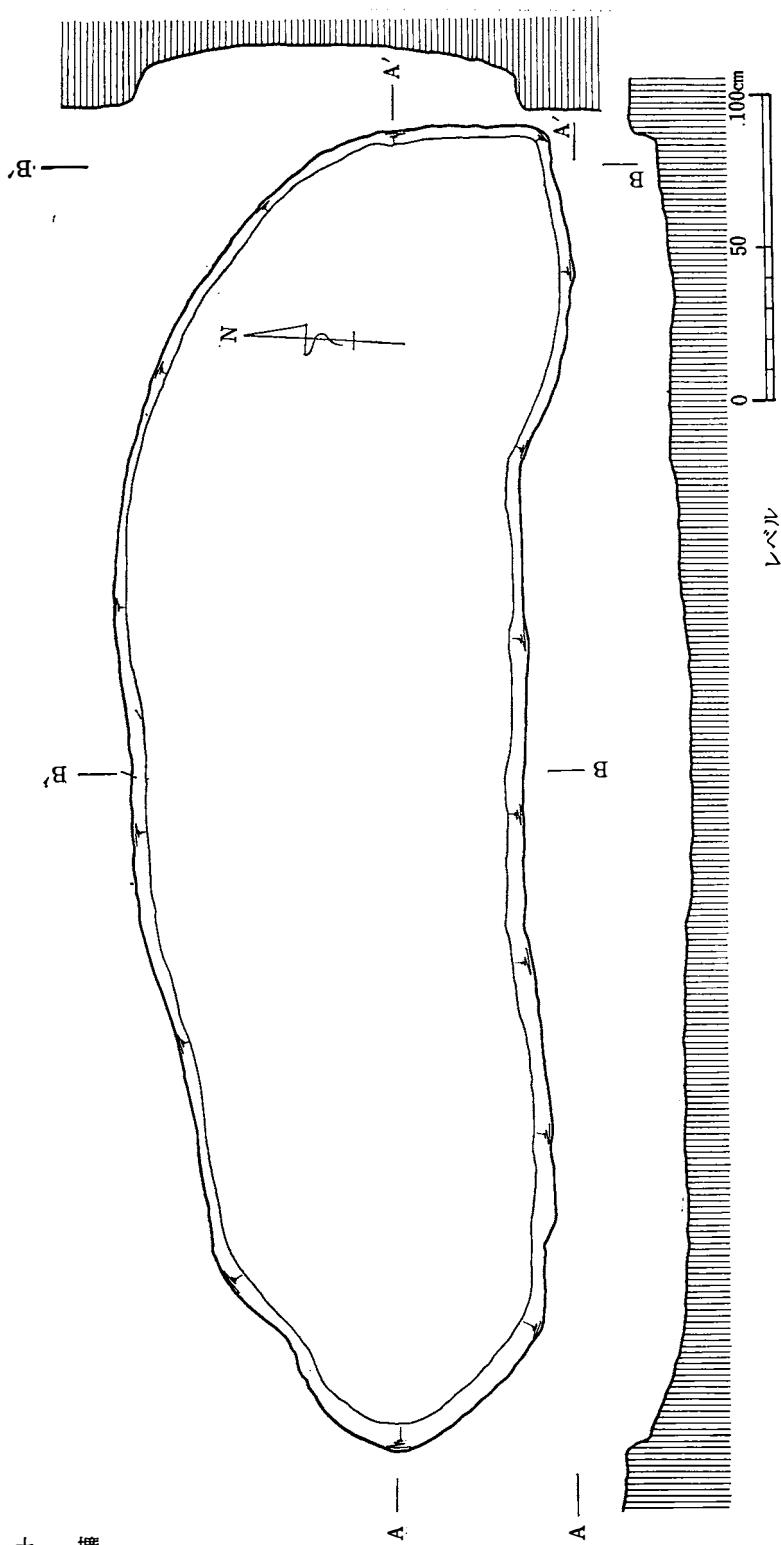




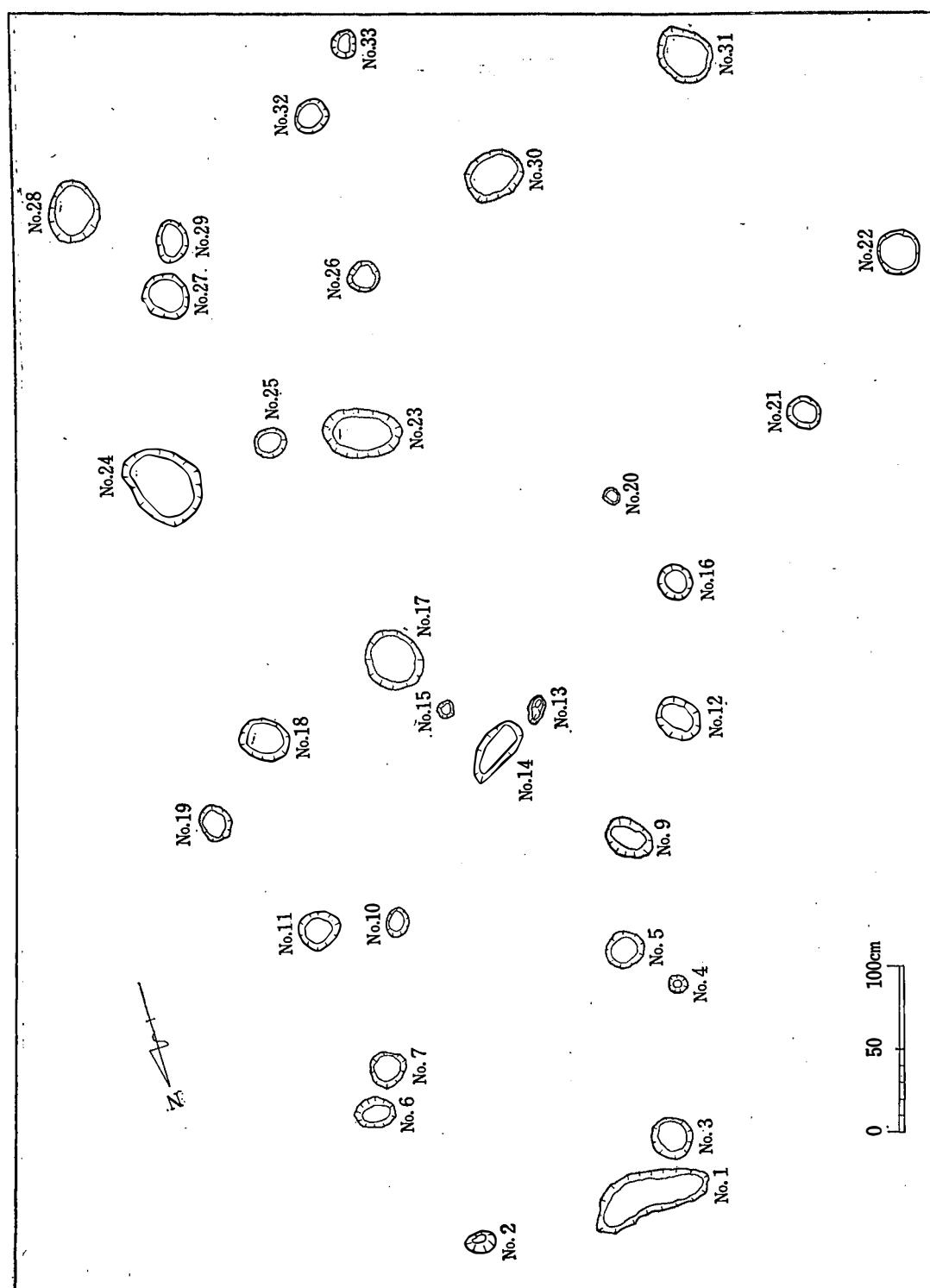
図版2 層位図



図版3 住居址実測図

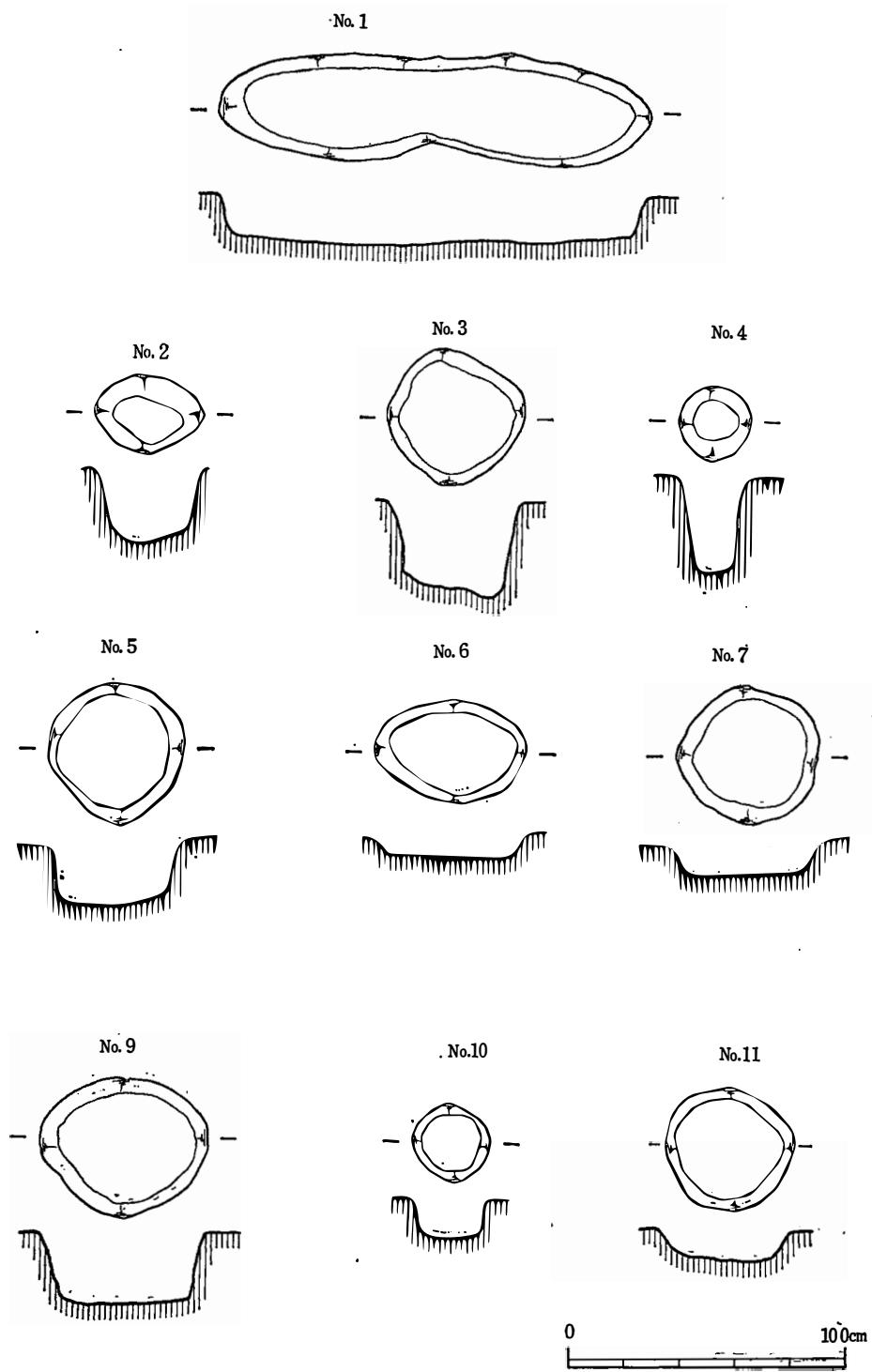


図版4 土 壤

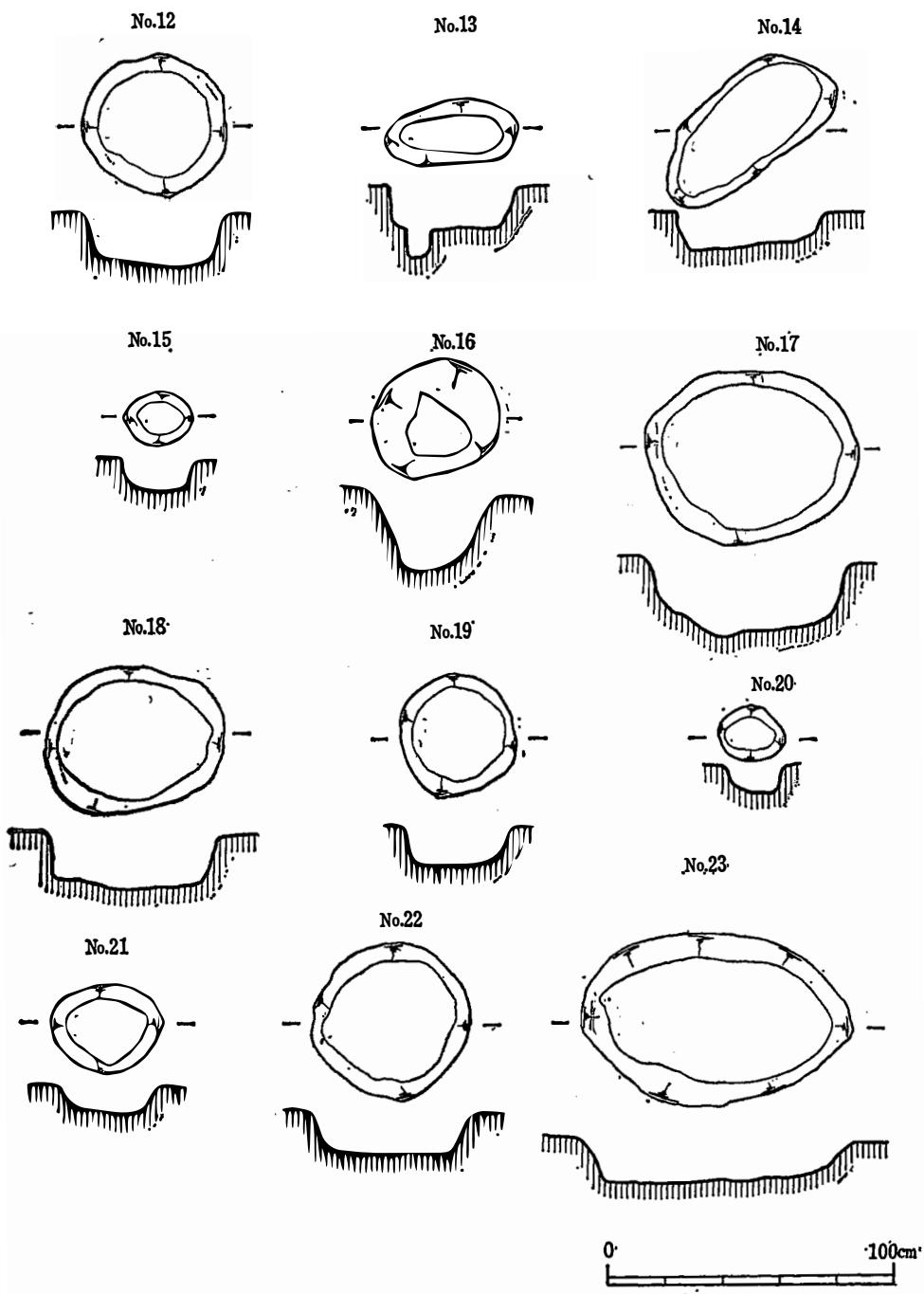


図版5 柱穴実測図（全体図）

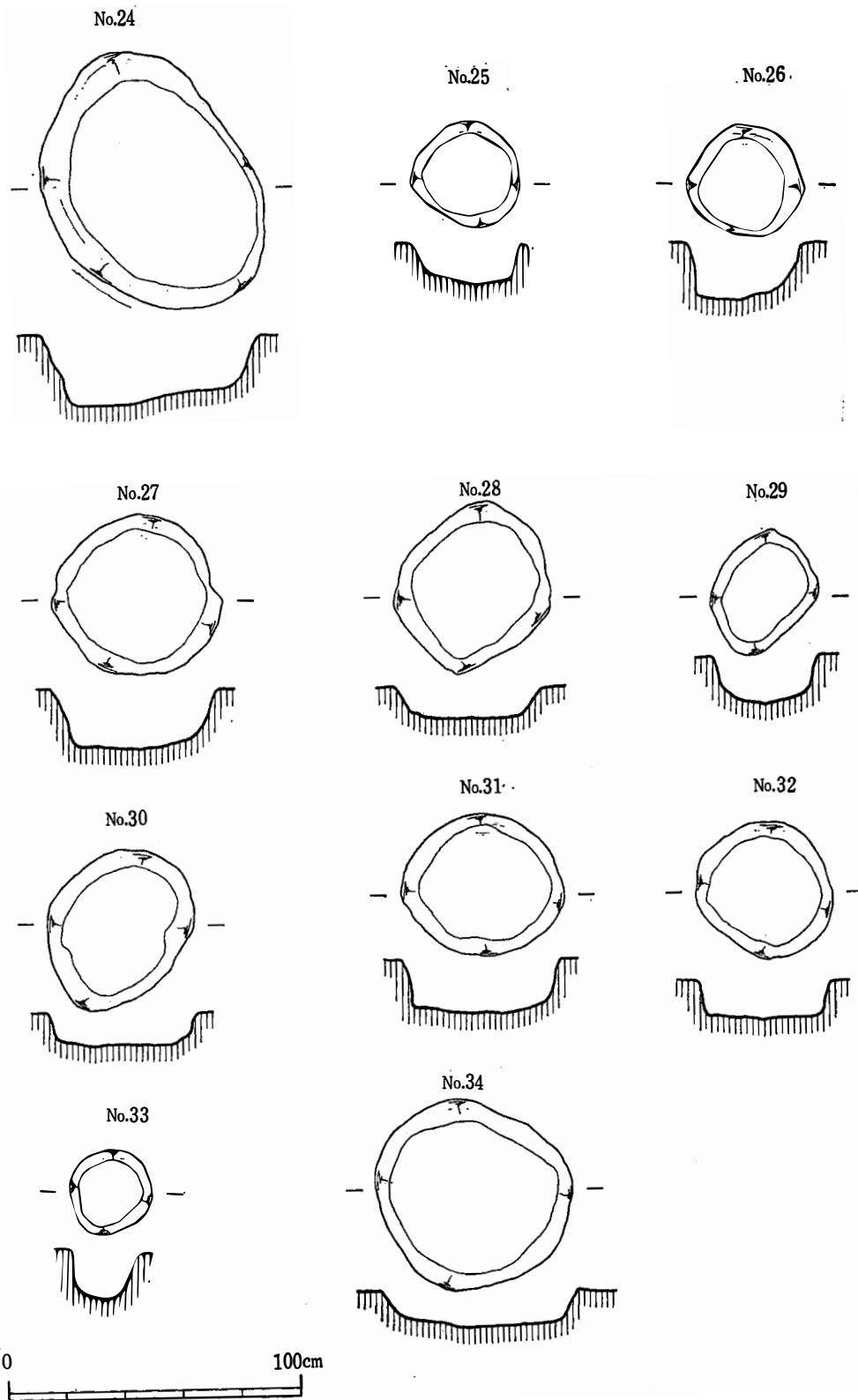
注：No. 8は欠番



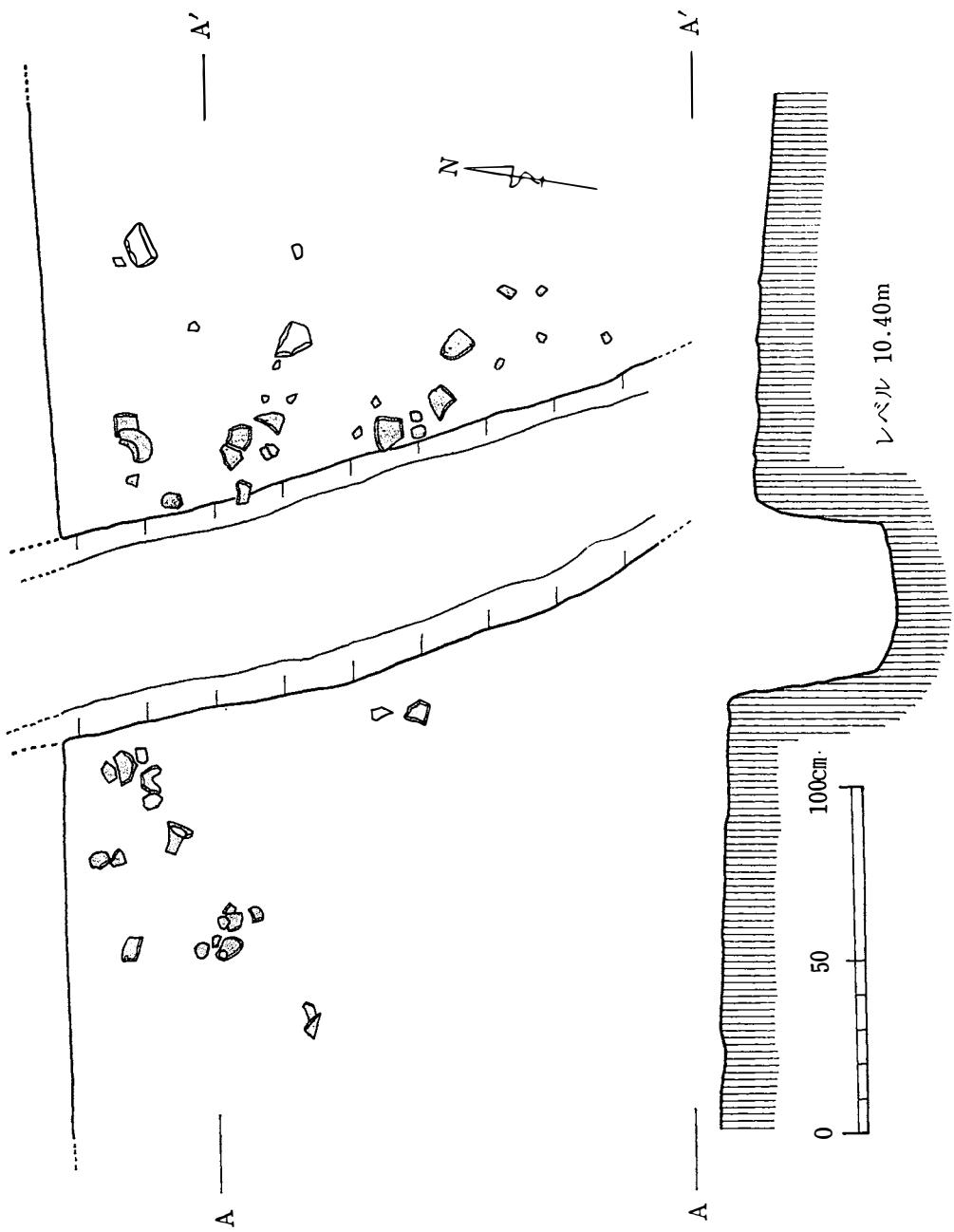
図版6 柱穴実測図 (No. 1 ~ No. 11)



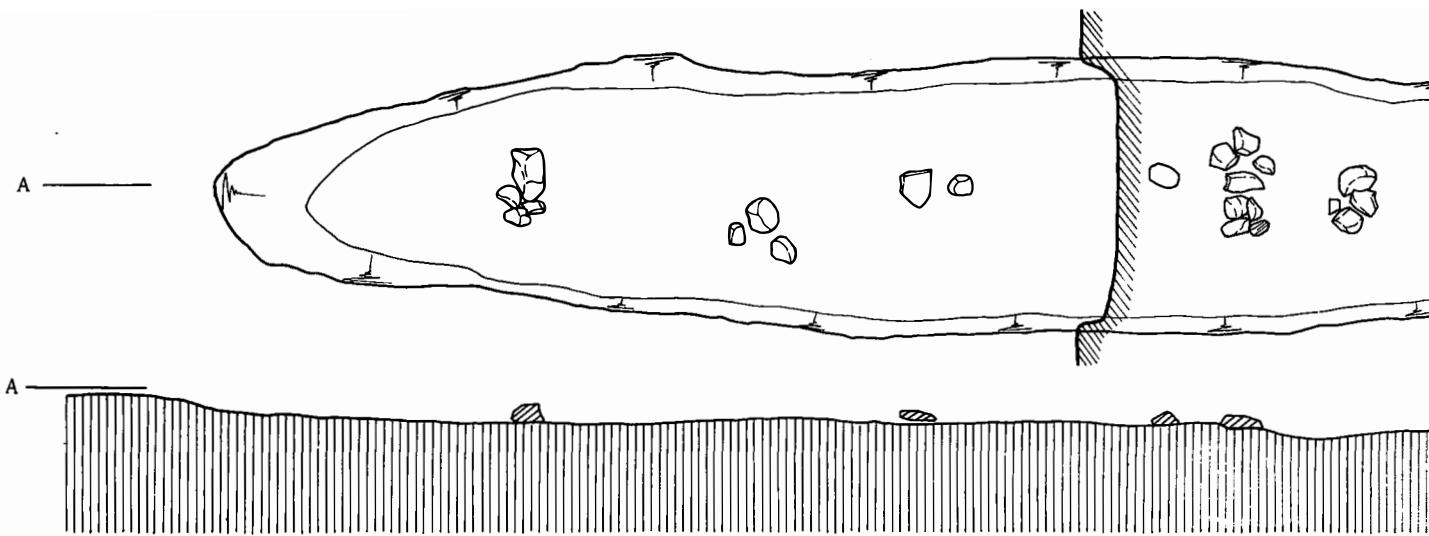
図版7 柱穴実測図 (No.12~No.23)



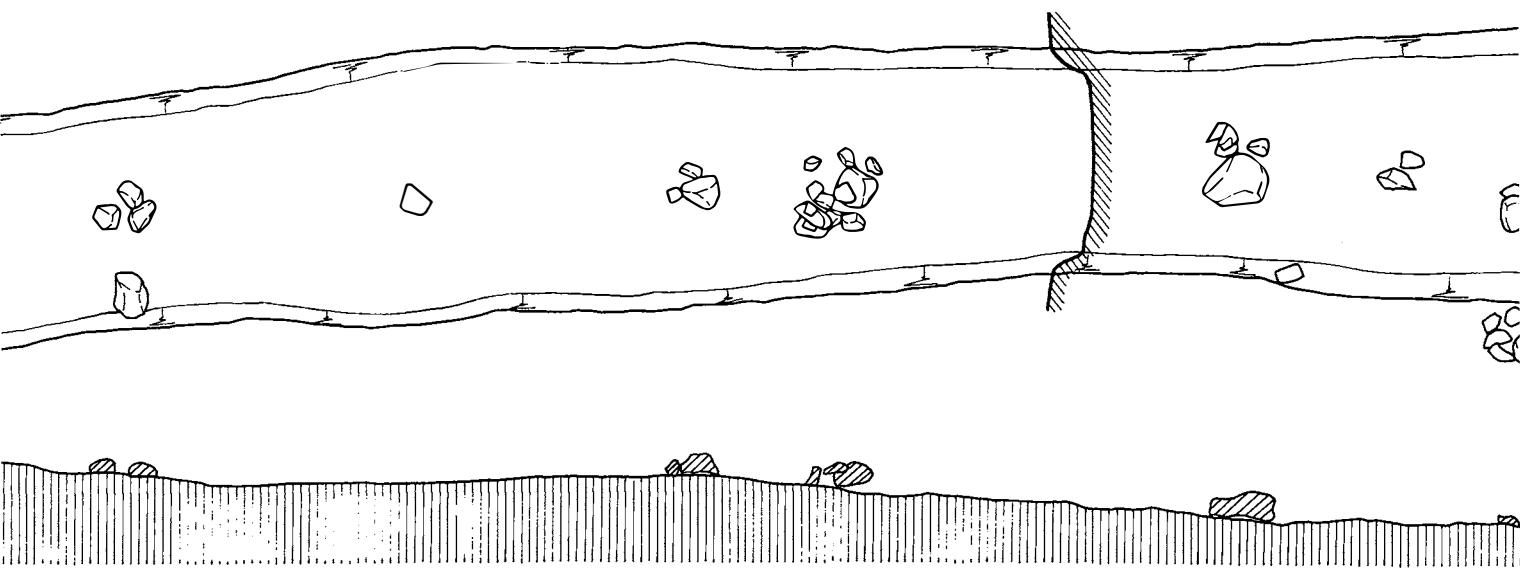
図版8 柱穴実測図 (No.24~No.34)

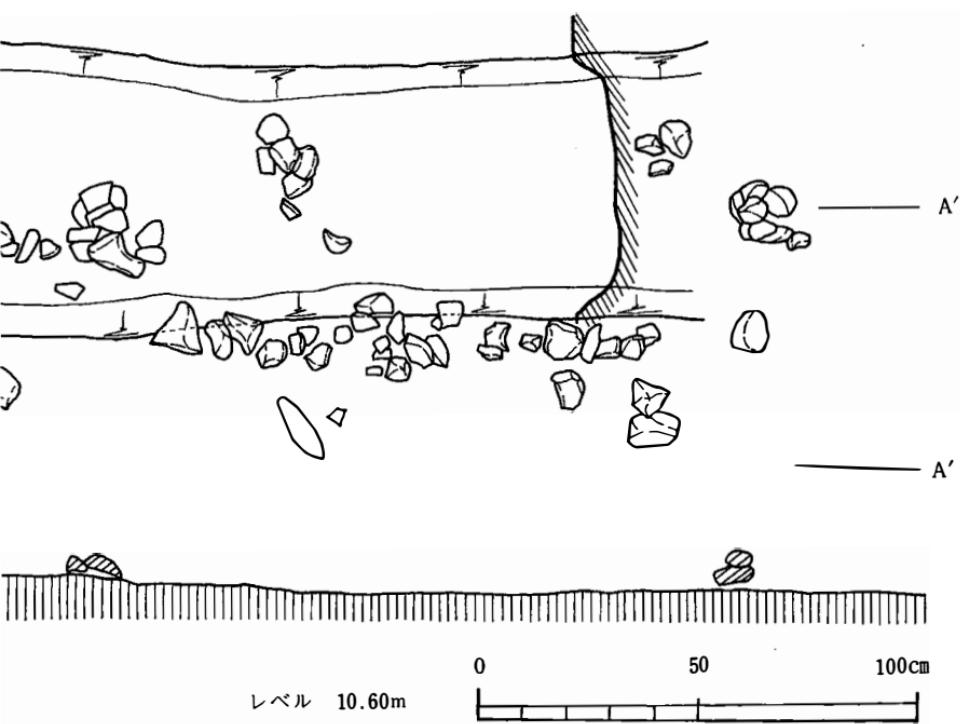


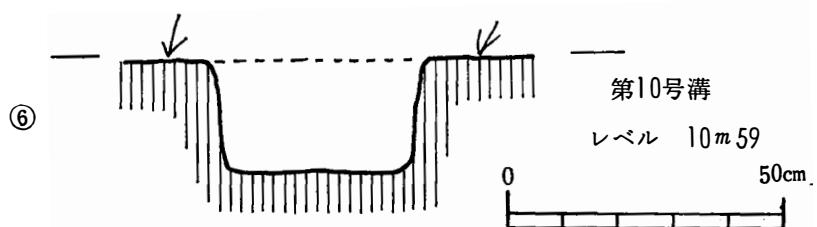
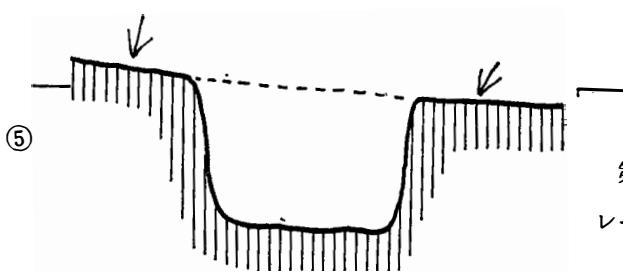
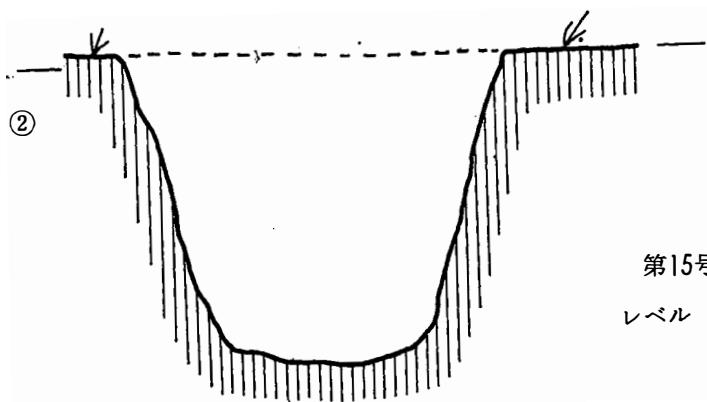
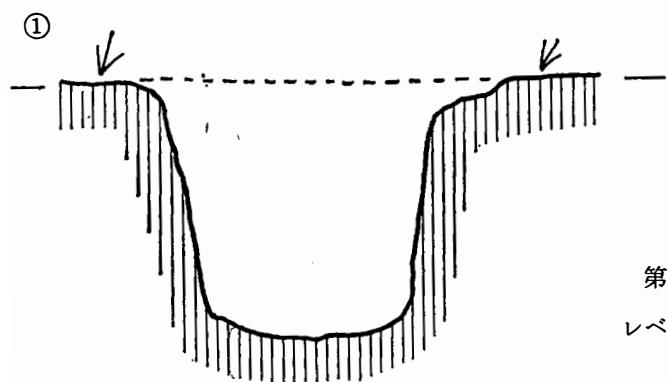
図版9 第7号溝東側区域実測図



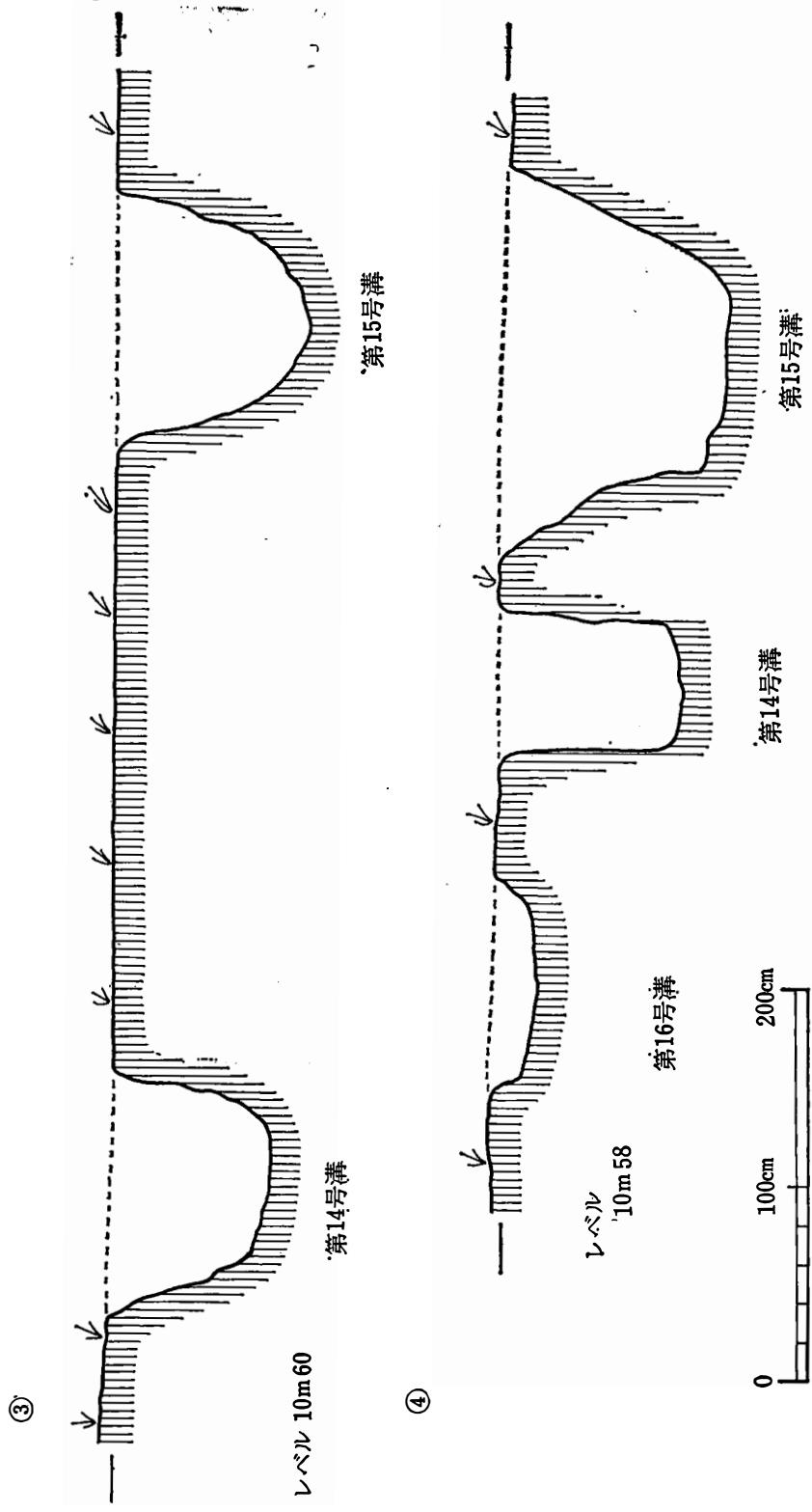
図版10 第1号溝実測図





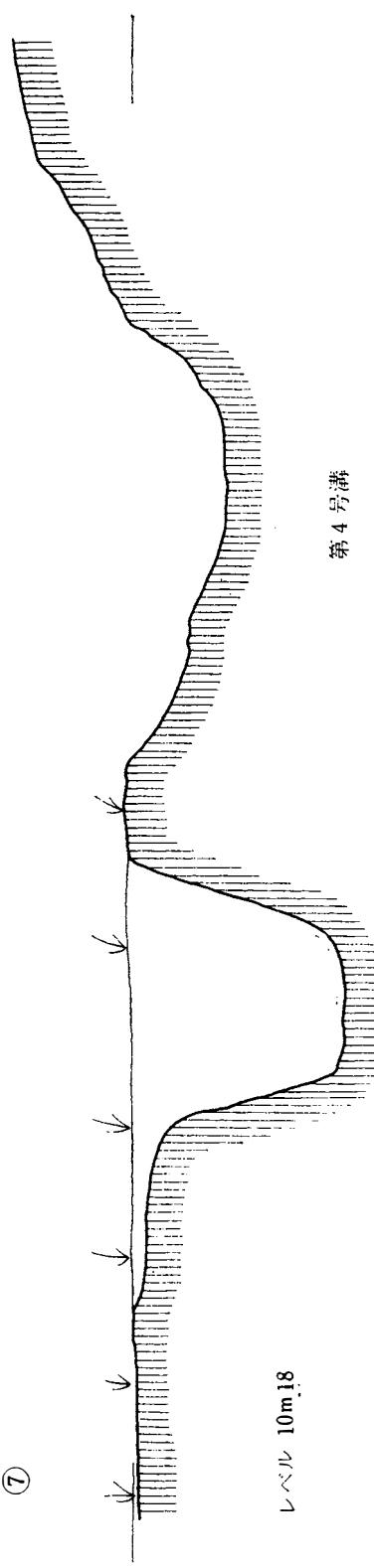


図版11 溝断面①、②、⑤、⑥実測図



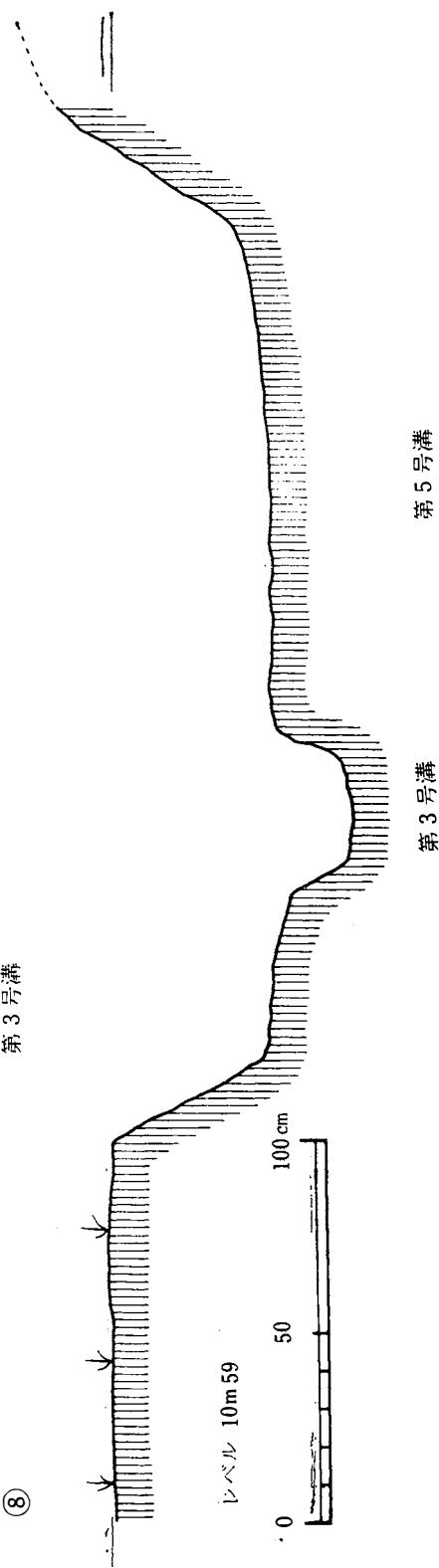
図版12 溝断面③、④実測図

⑦



第 3 号溝

⑧



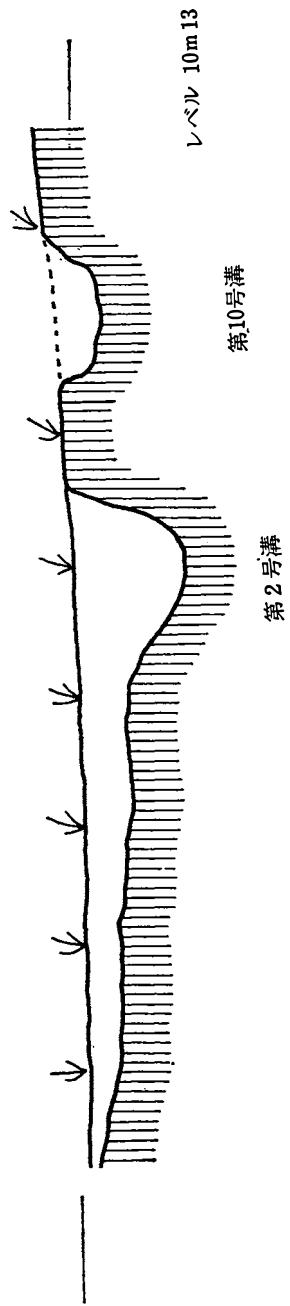
第 3 号溝

第 4 号溝

第 5 号溝

図版13 溝断面⑦、⑧実測図

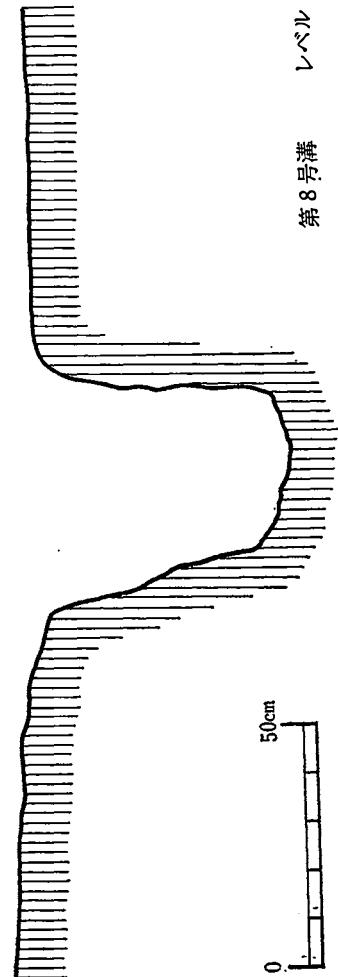
⑨



レベル 10m 13

第10号溝

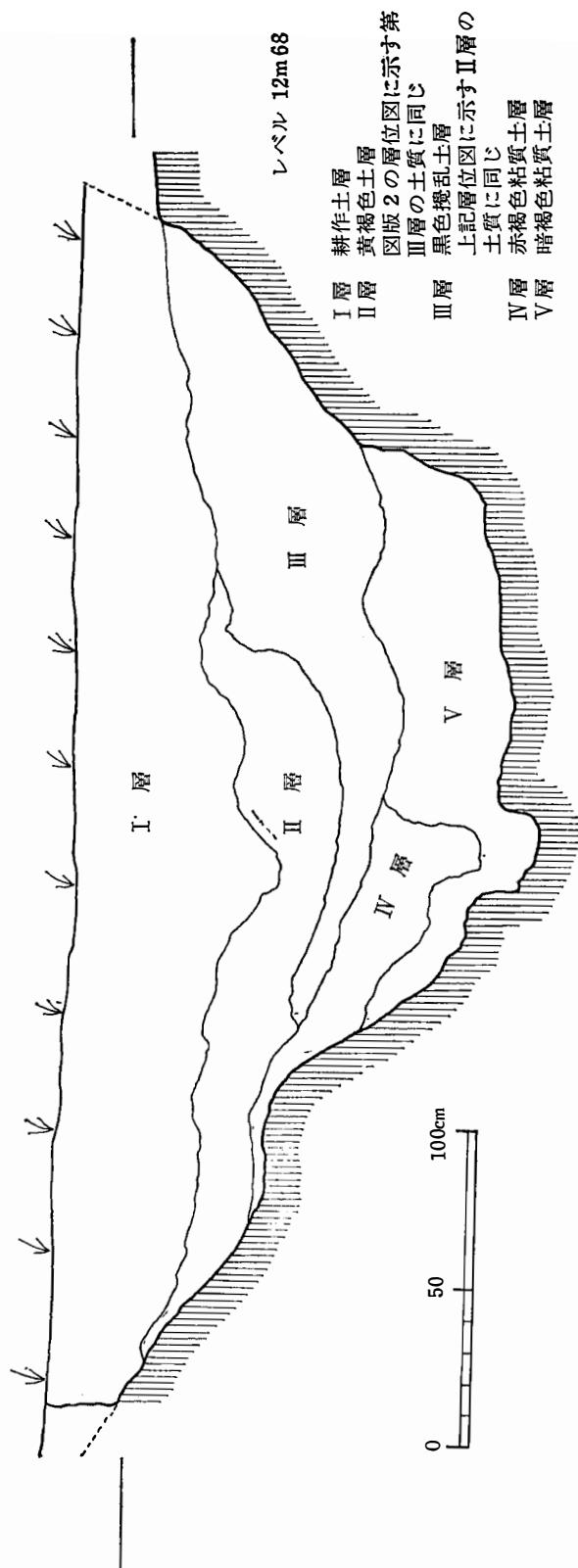
⑩



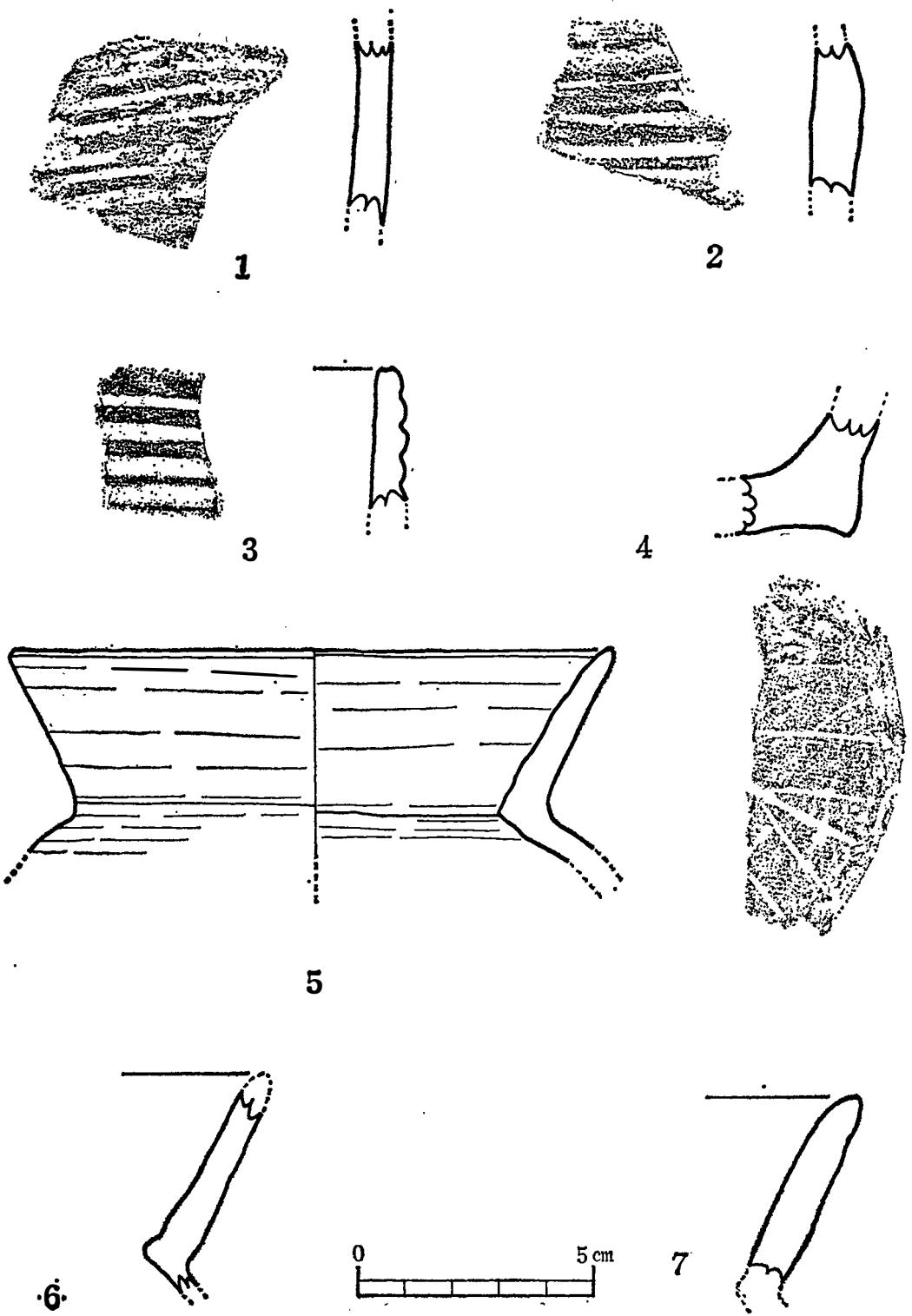
レベル 10m 74.

第8号溝

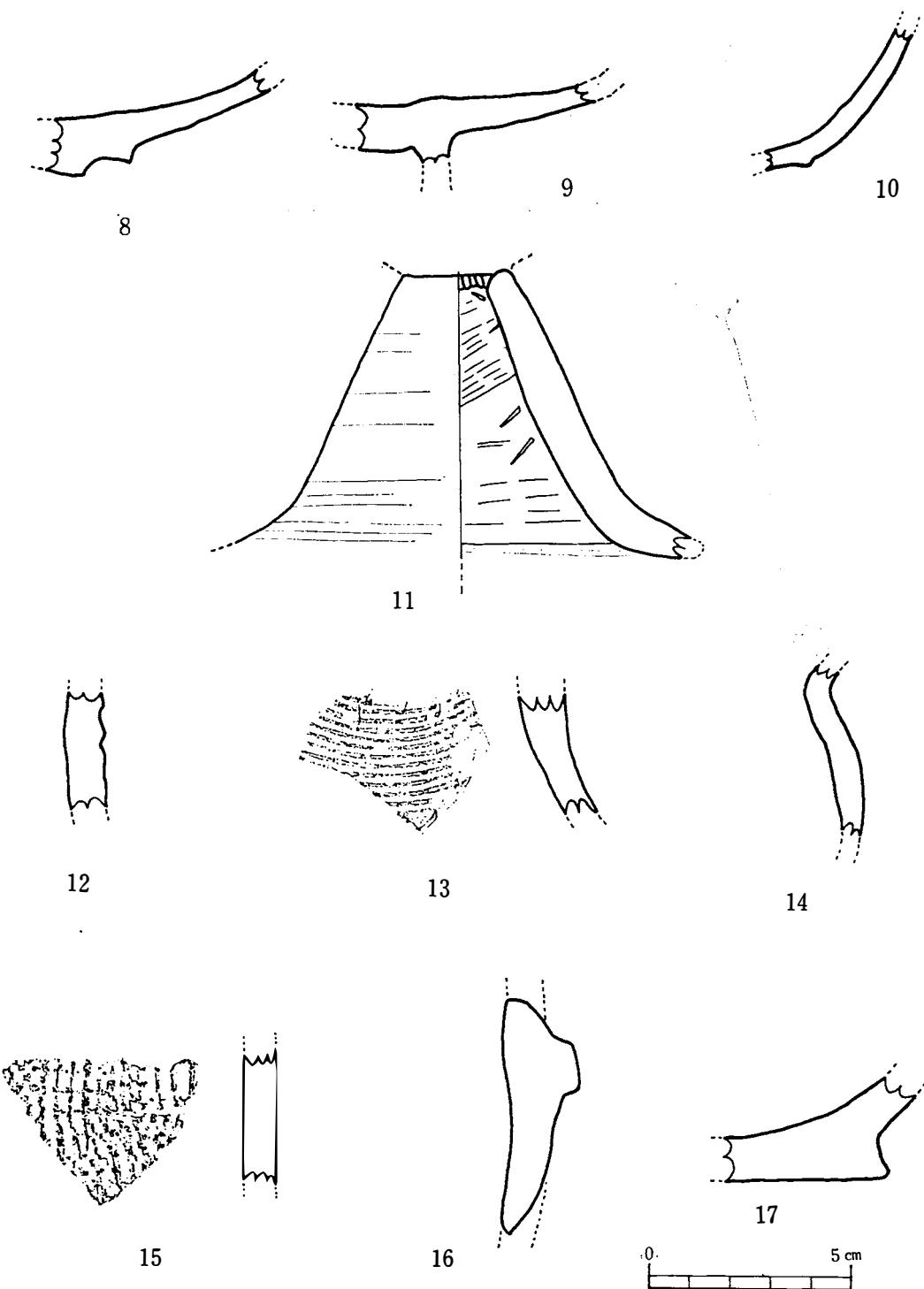
図版14 溝断面⑨、⑩実測図



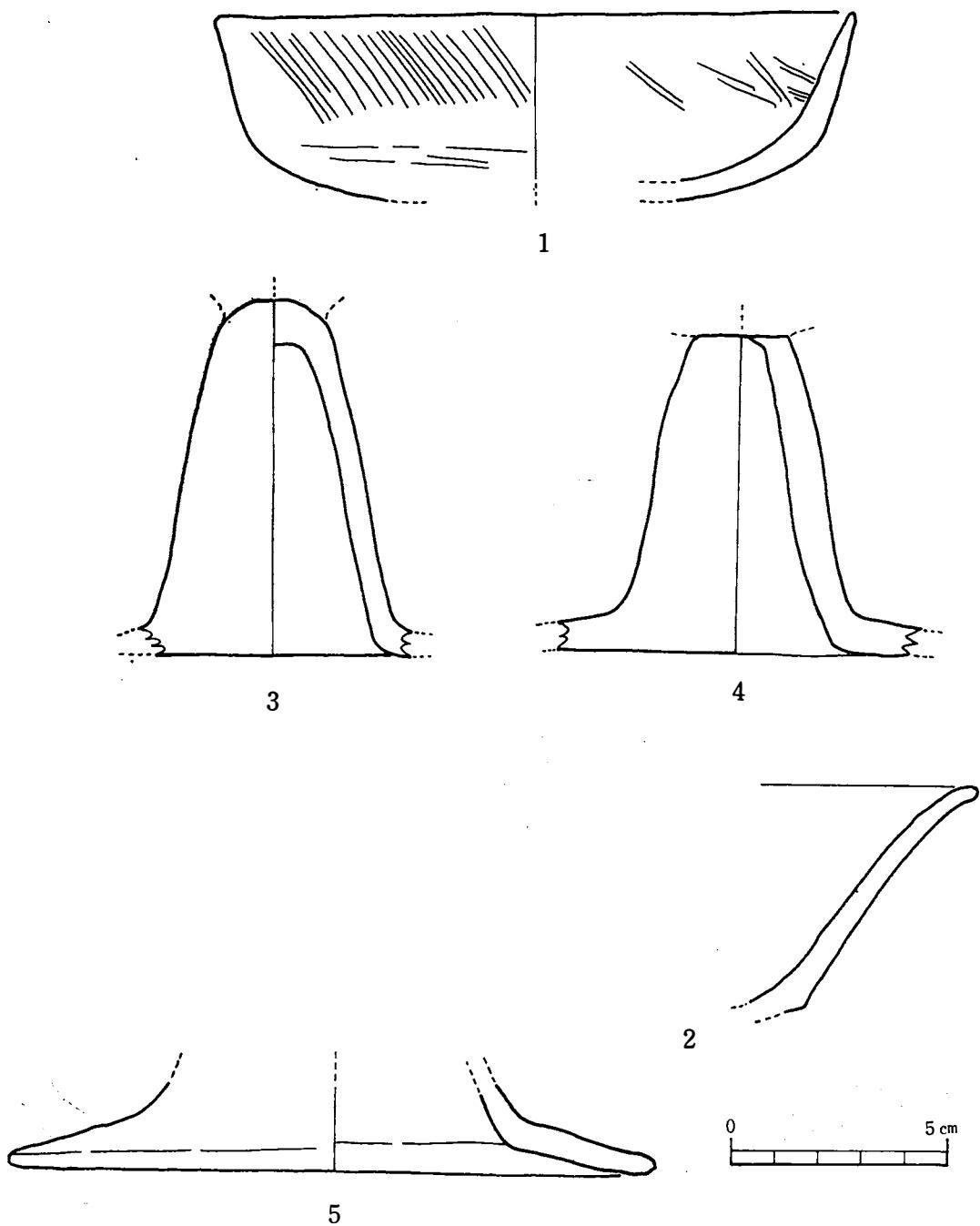
図版15 大溝断面実測図



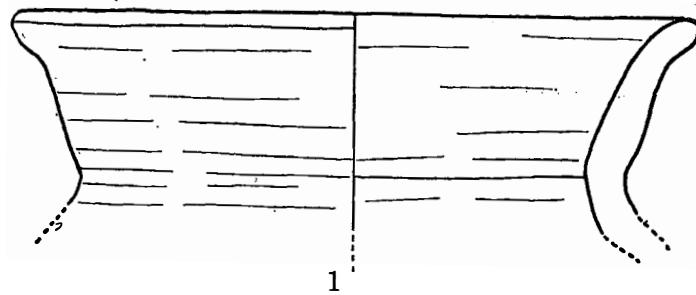
図版16 柱穴周辺出土遺物実測図



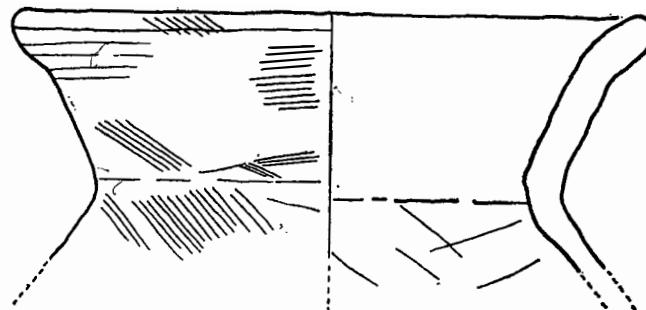
図版17 柱穴周辺出土遺物実測図



図版18 第7号溝東部出土遺物実測図



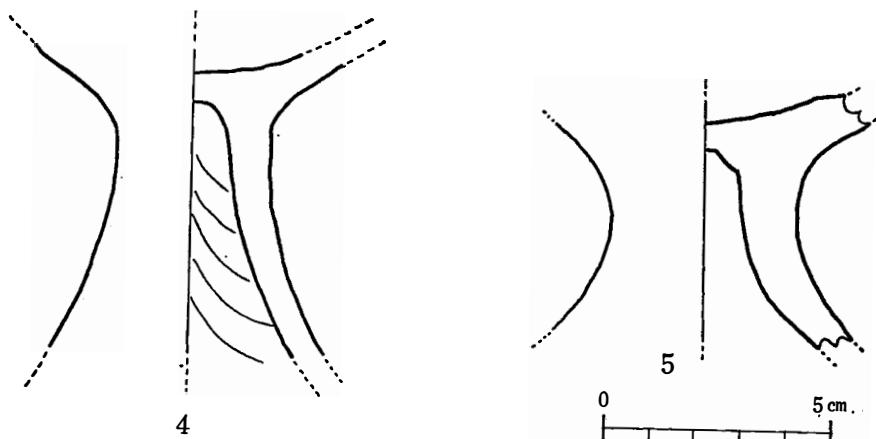
1



2

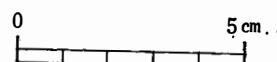


3

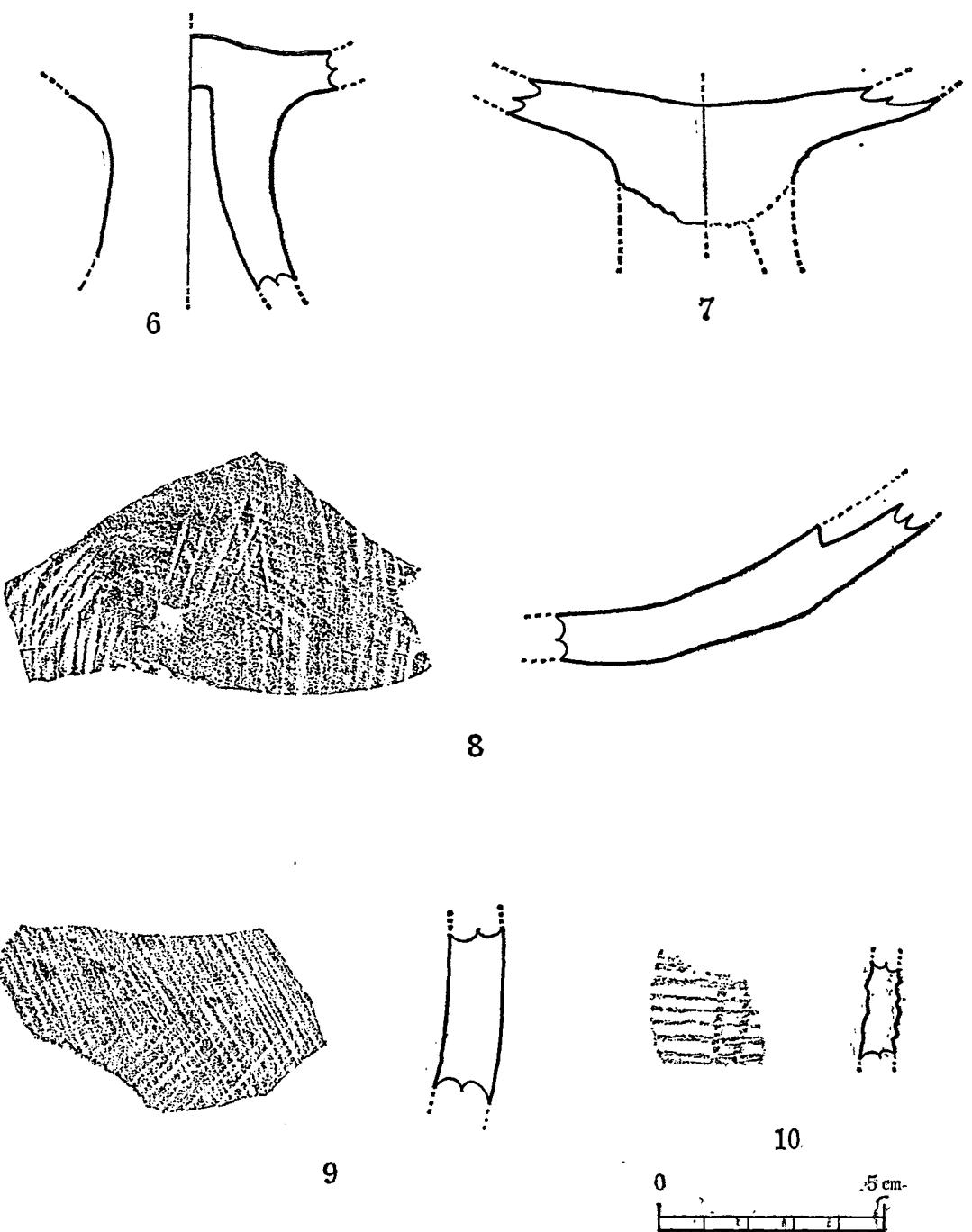


4

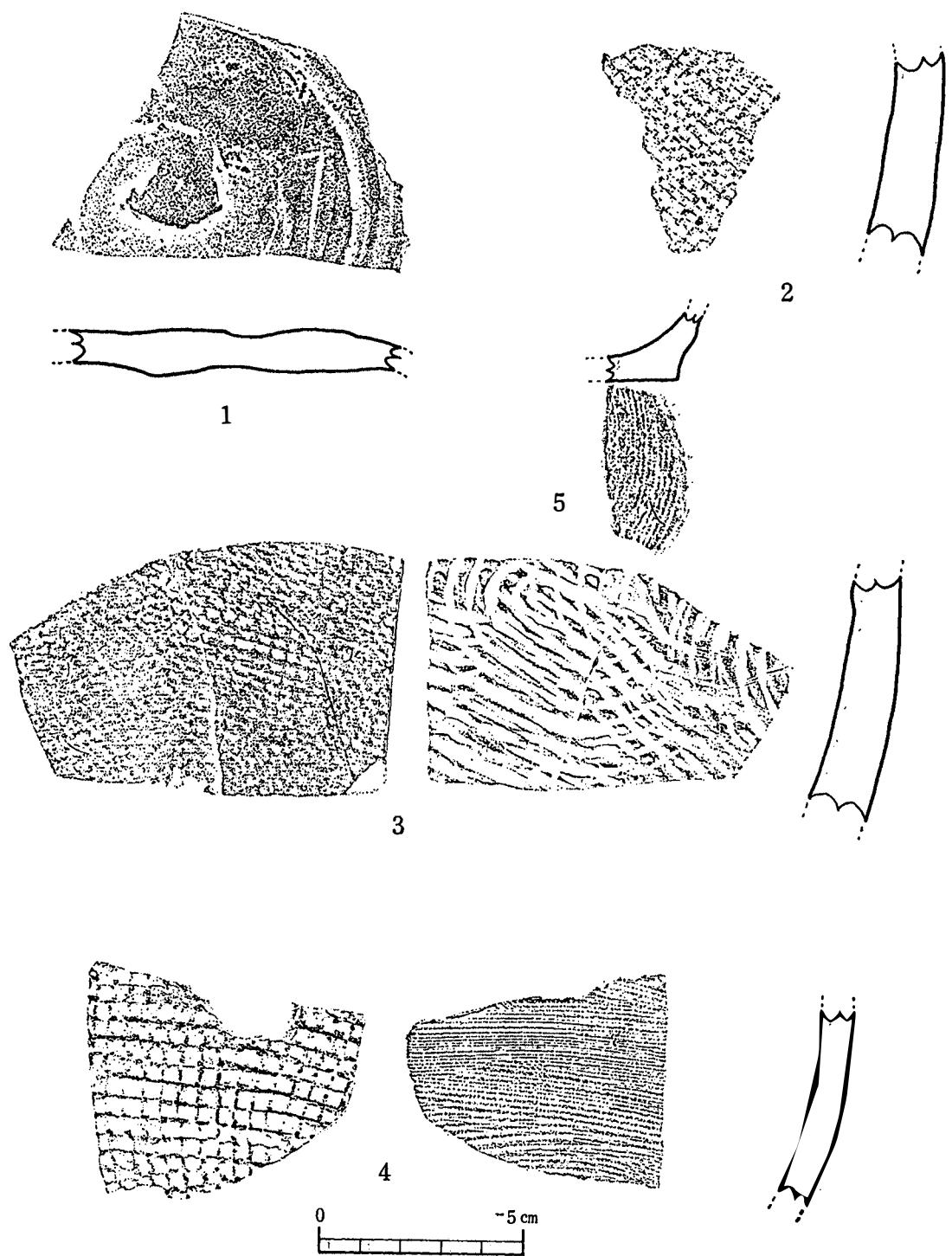
5



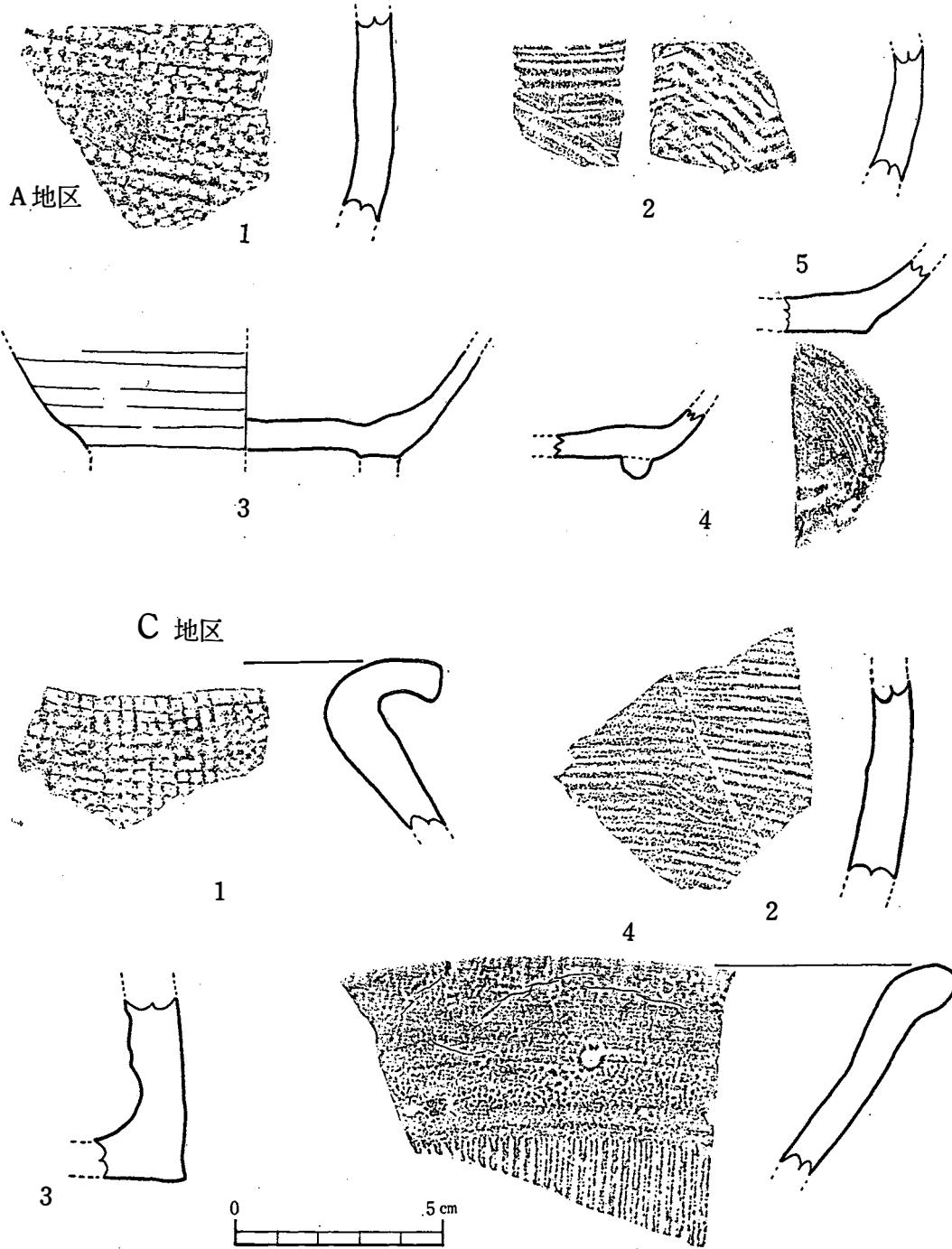
図版19 大溝出土遺物実測図



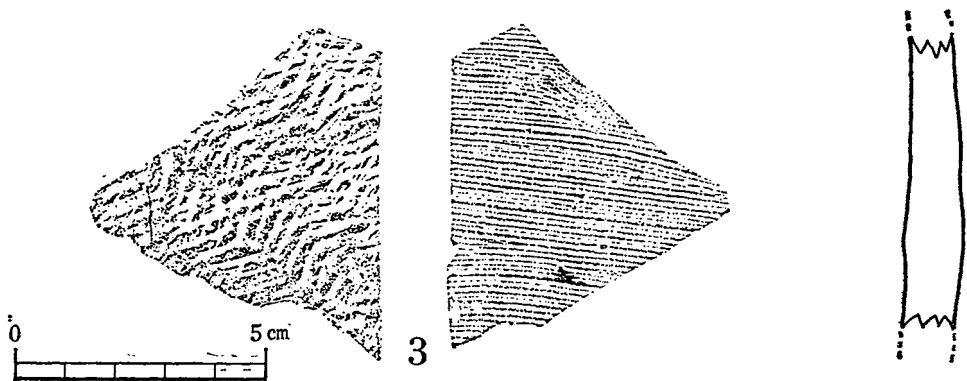
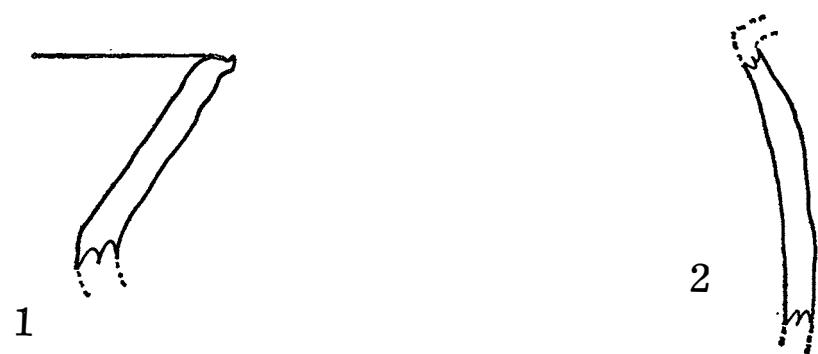
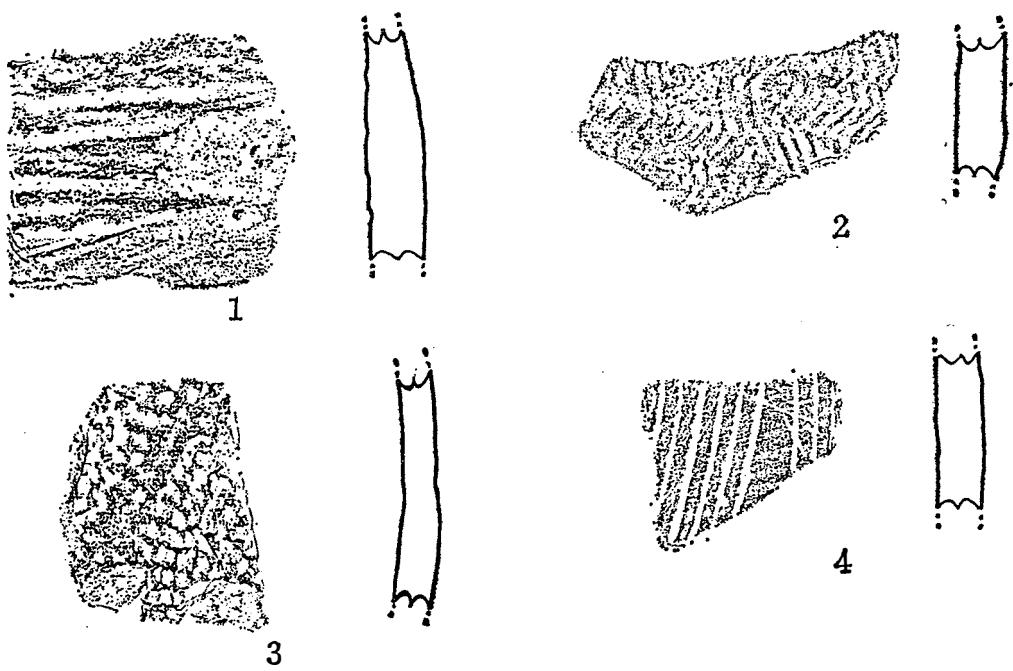
図版20 大溝出土遺物実測図



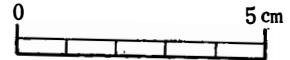
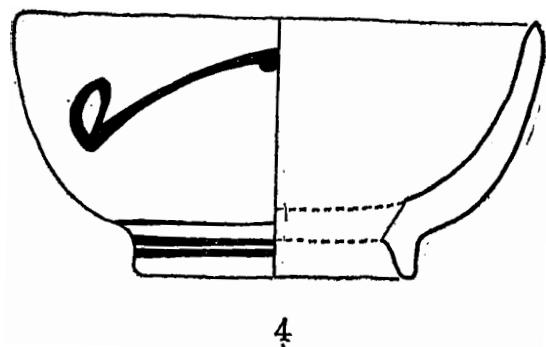
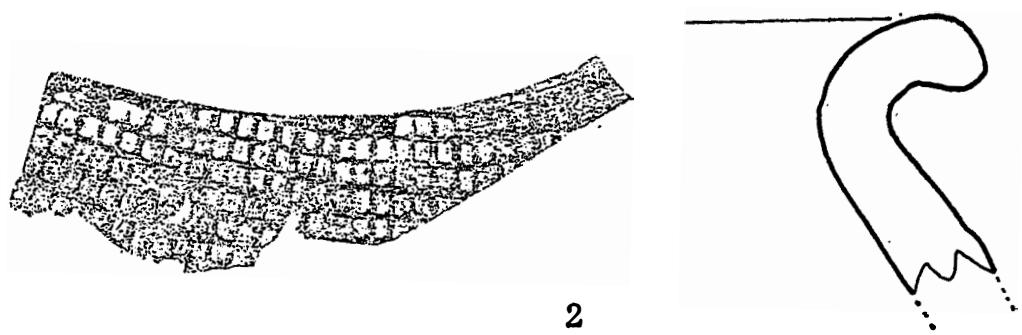
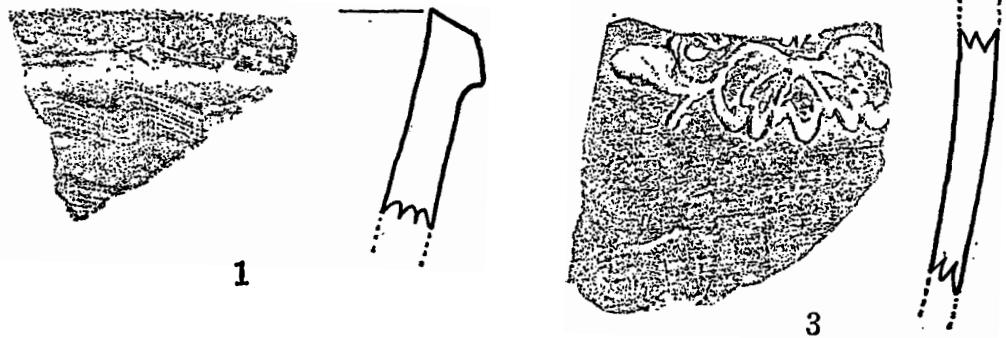
図版21 第1号溝出土遺物実測図



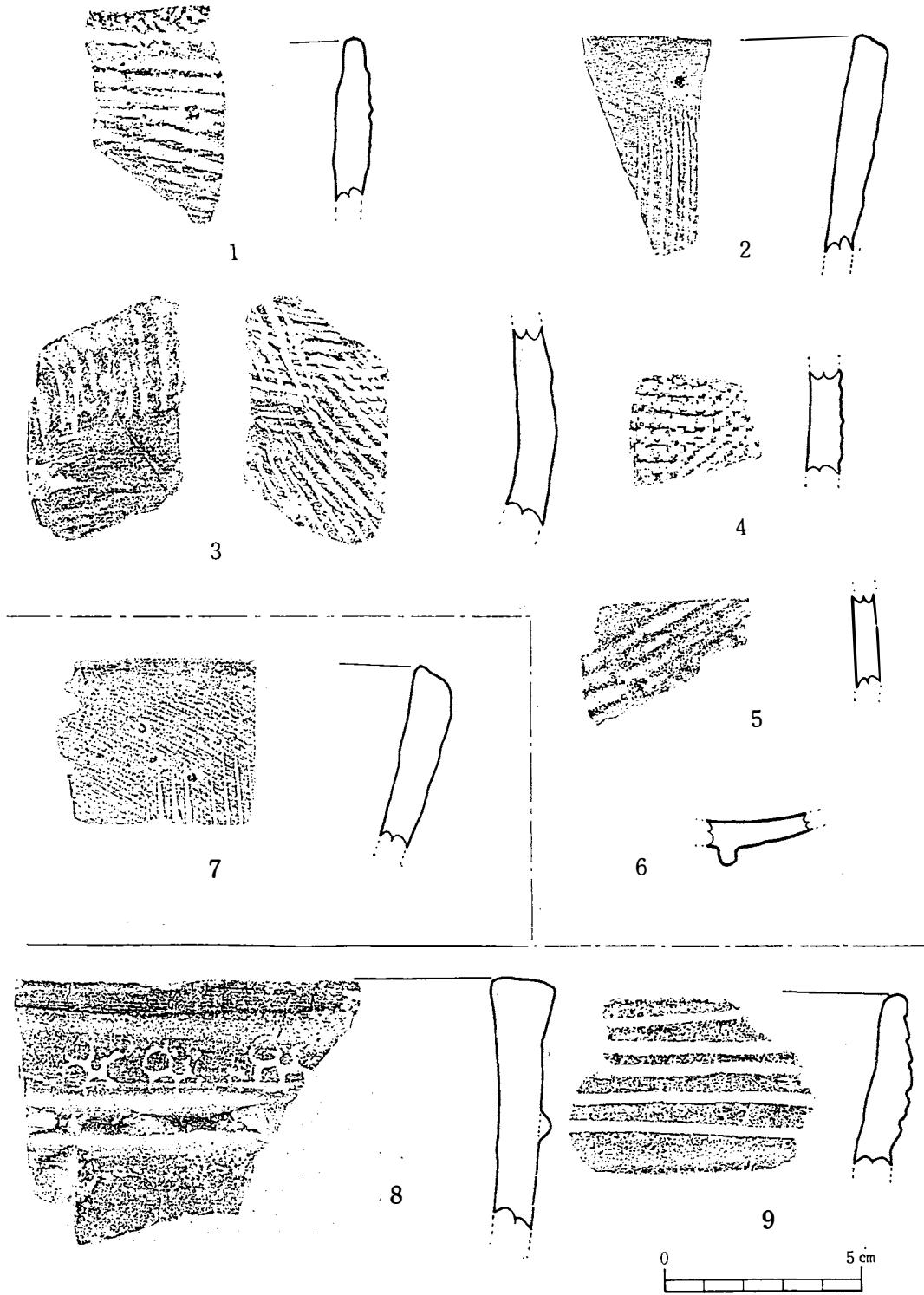
图版22 A、C地区出土遗物实测图



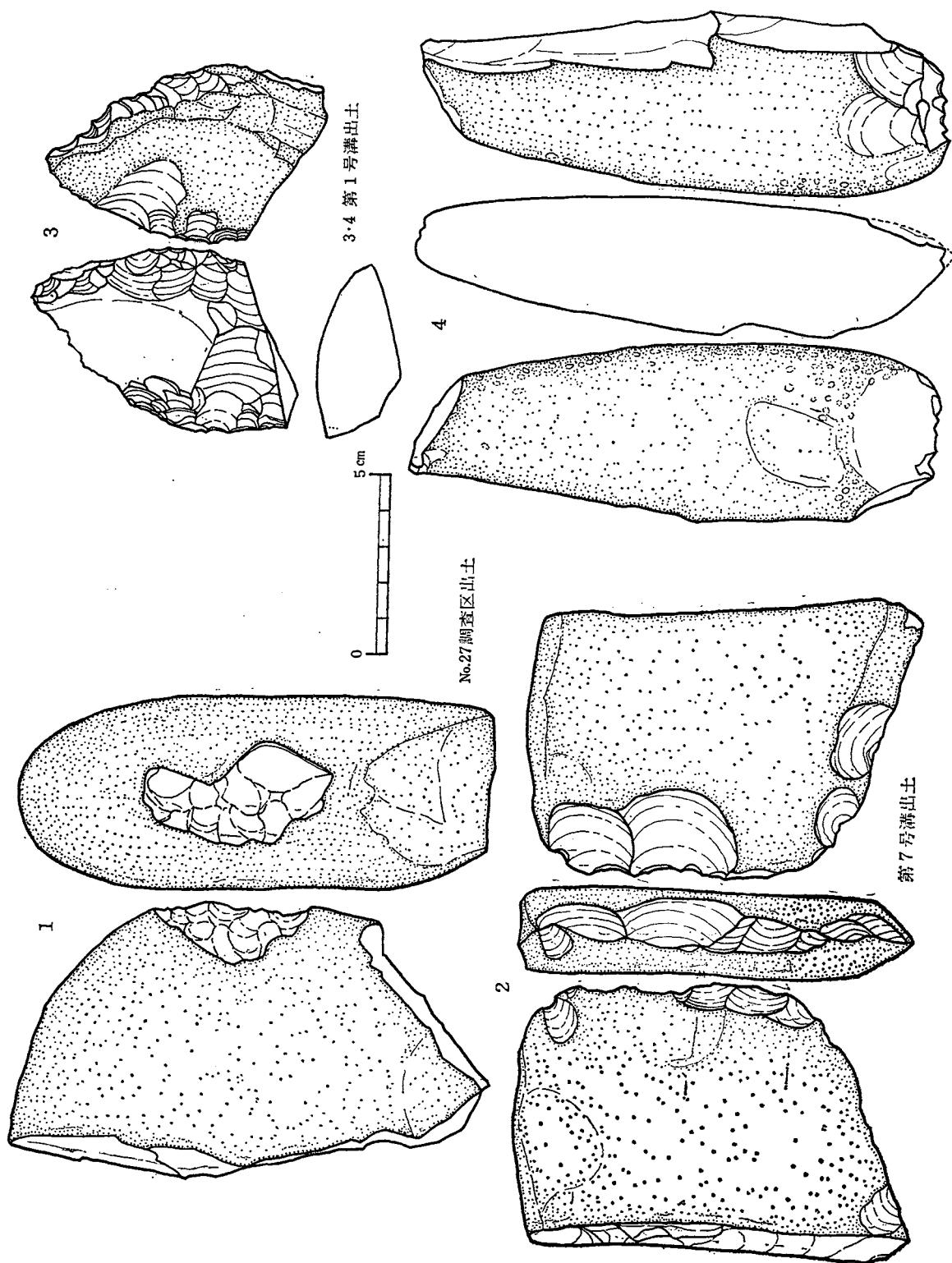
図版23 第4号溝・方形溝遺構東部地区出土遺物実測図



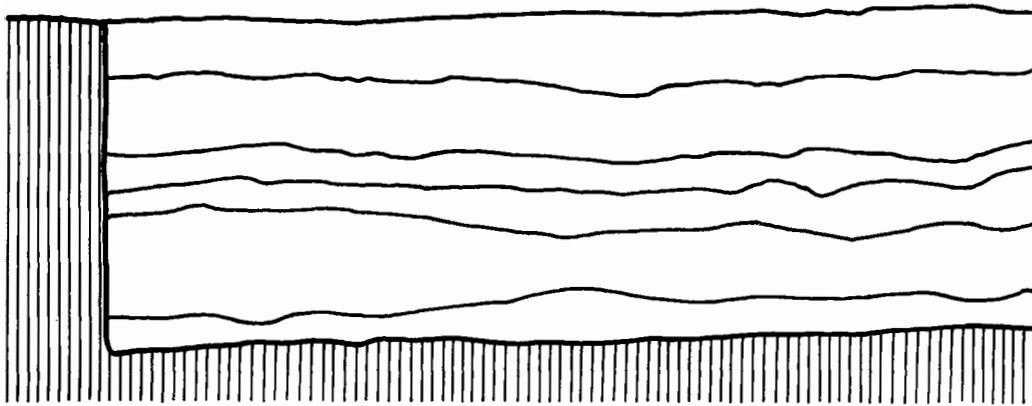
図版24 第5号溝出土遺物実測図



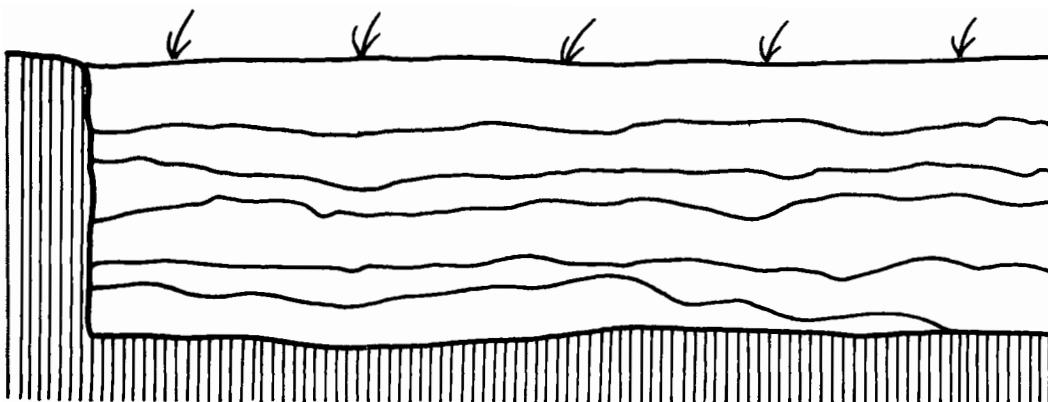
図版25 No.27調査区・第14号溝周辺・表採遺物実測図



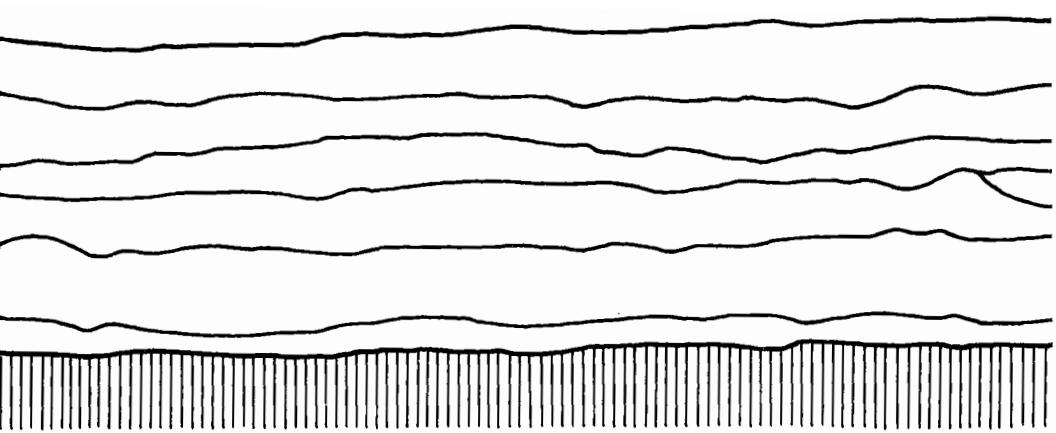
図版26 石器実測図



図版27-1 A トレンチ層位図



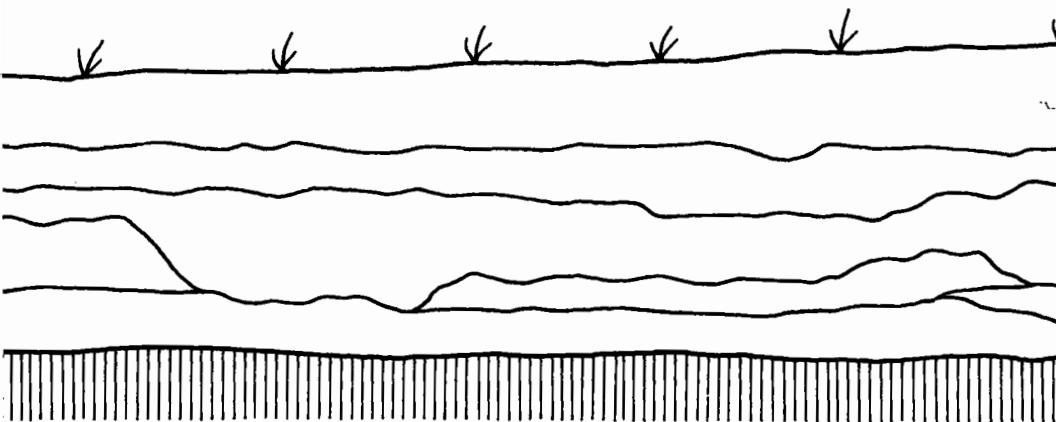
図版27-2 B トレンチ層位図

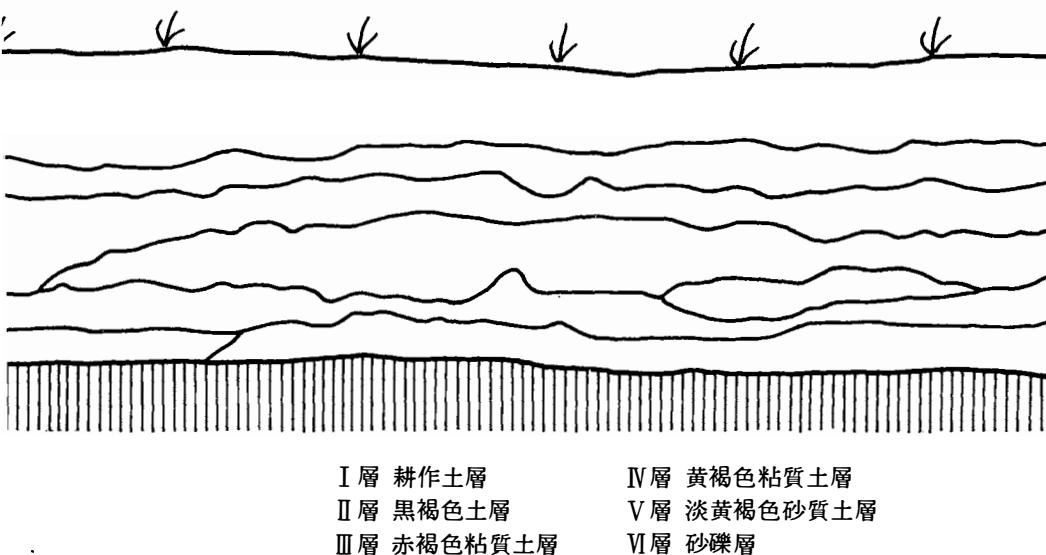
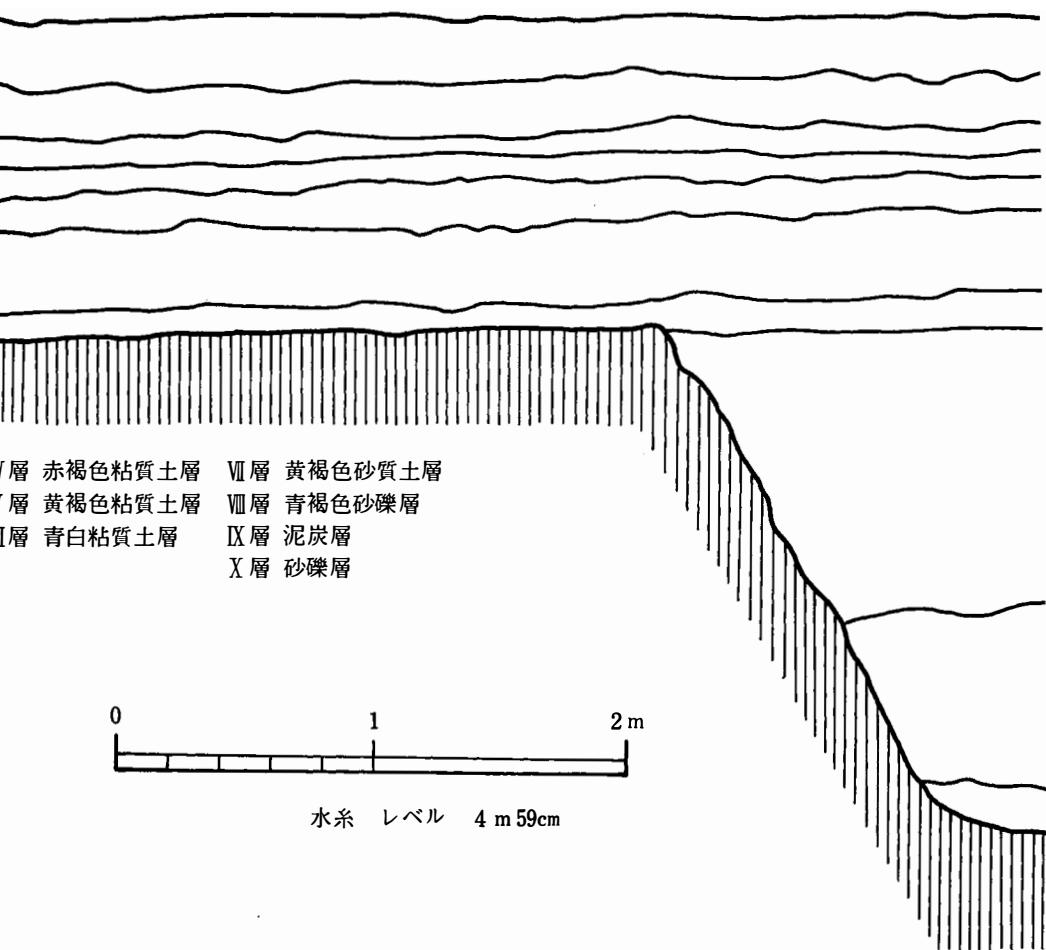


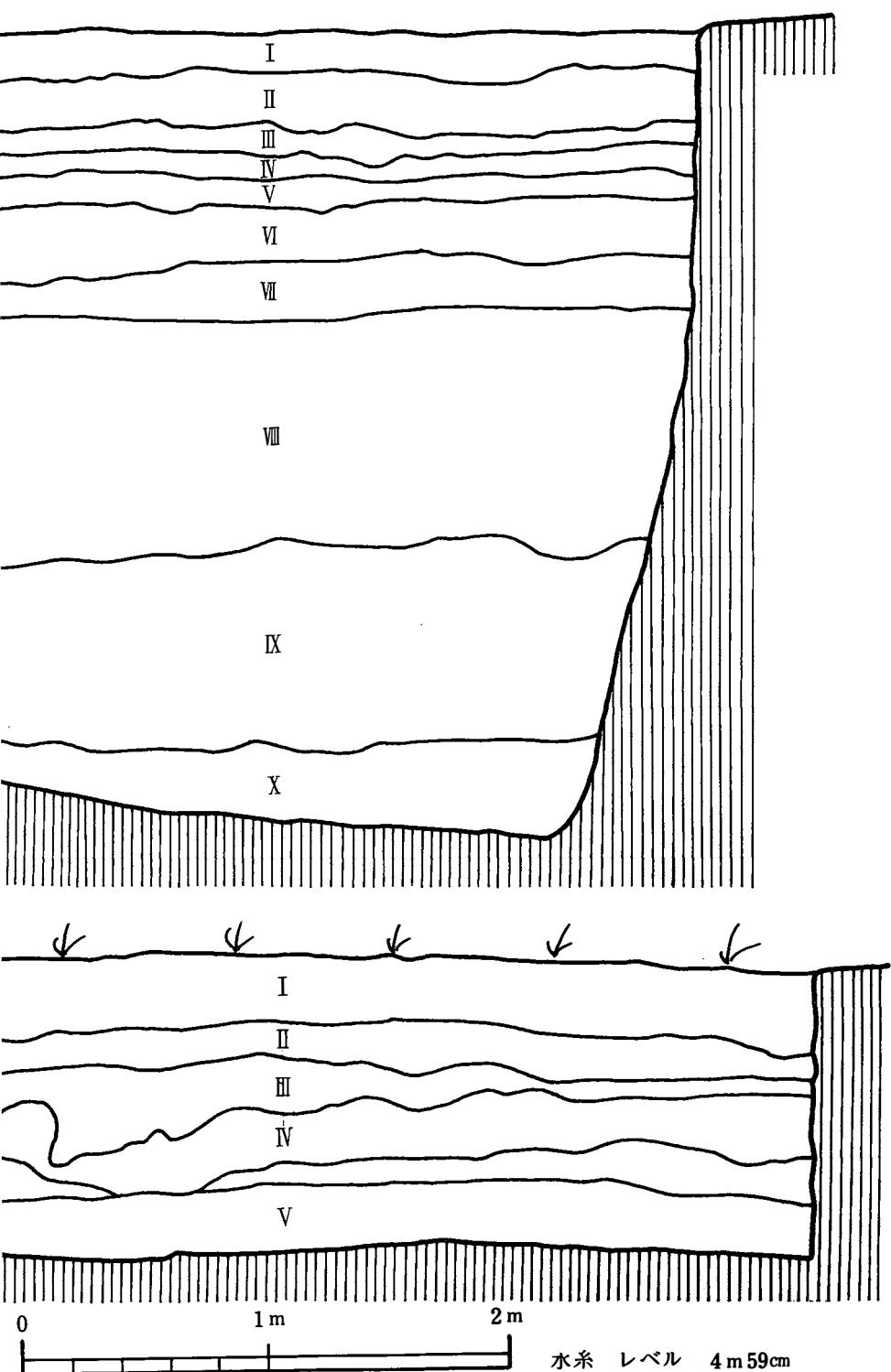
I層 耕作土層

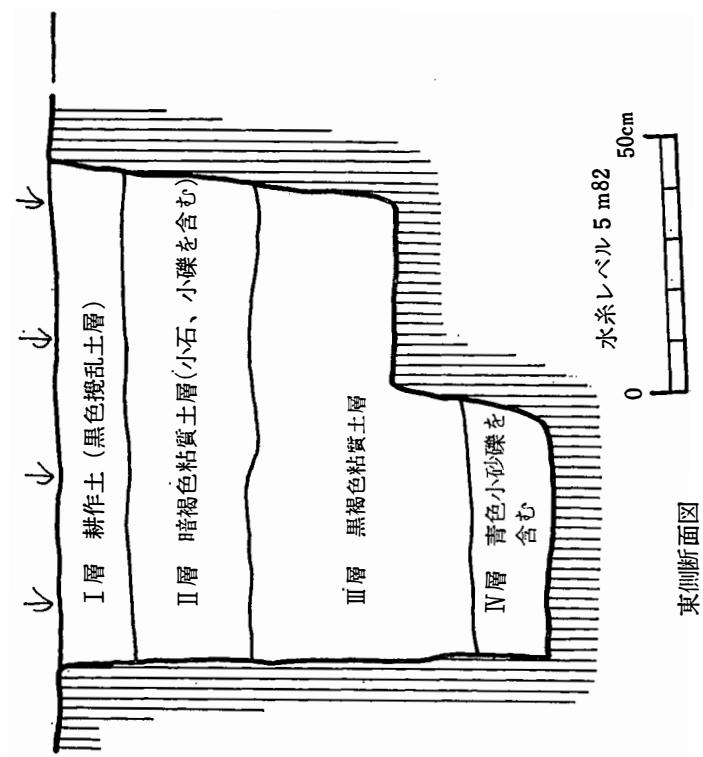
II層 赤褐色粘質土層

III層 濃茶粘質土層

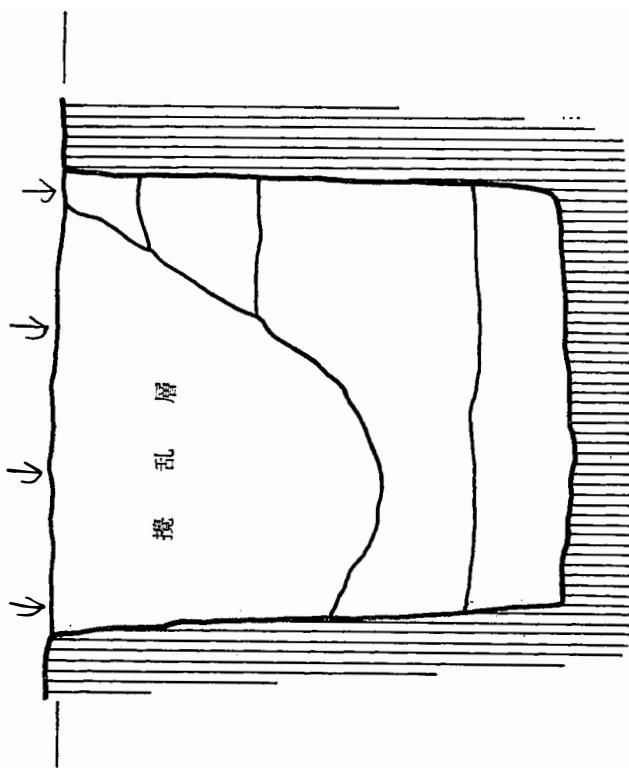






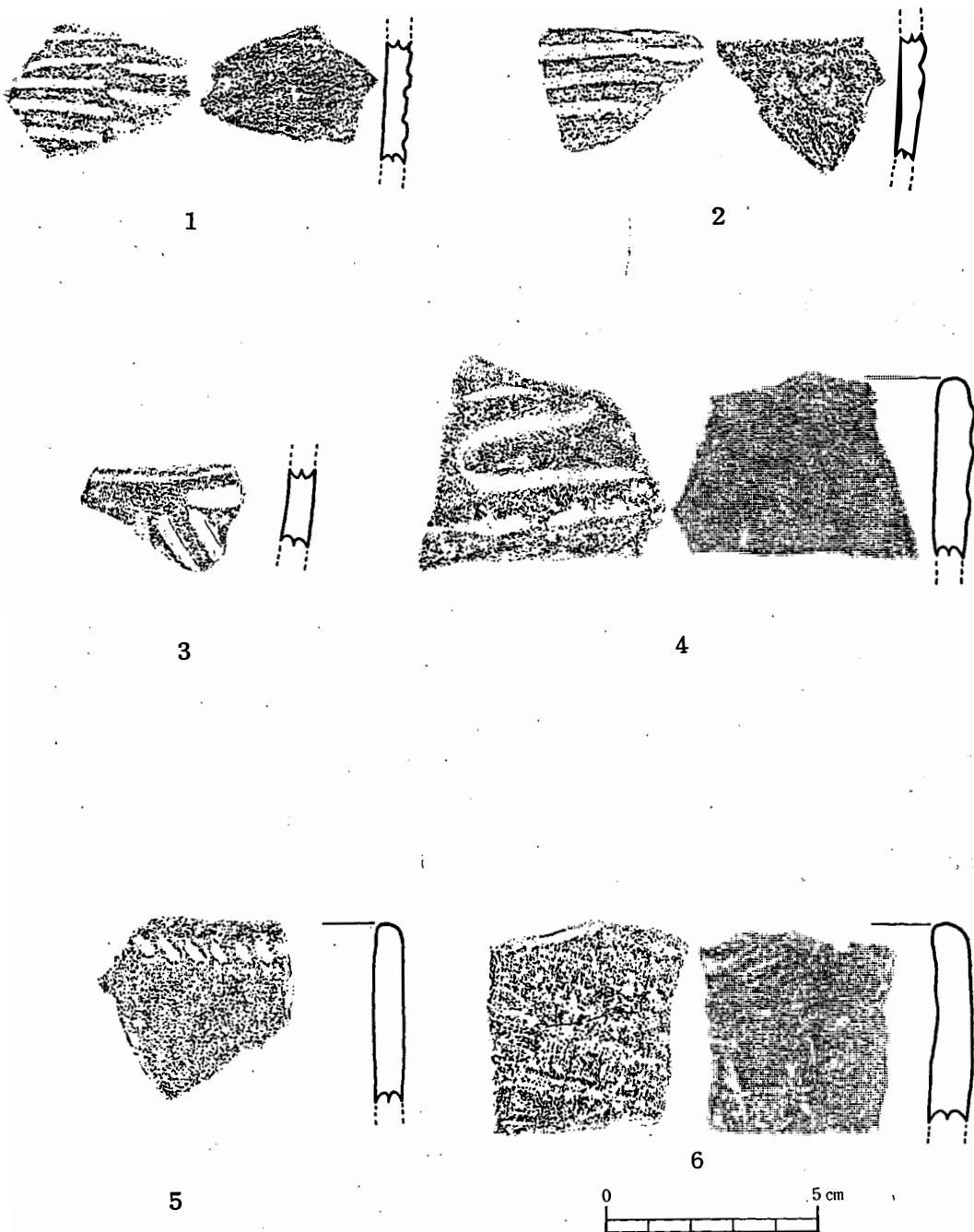


東側断面図

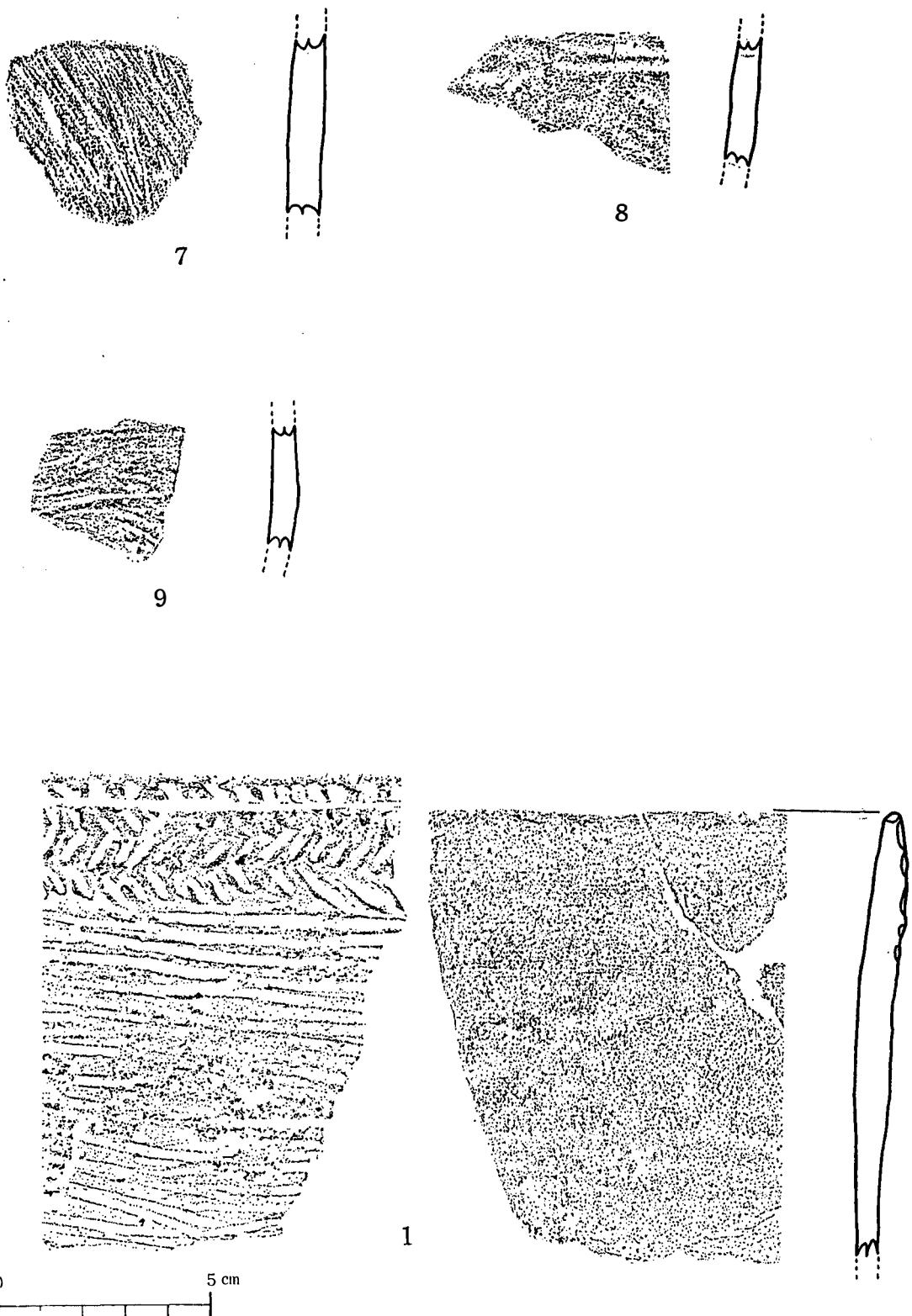


北側断面図

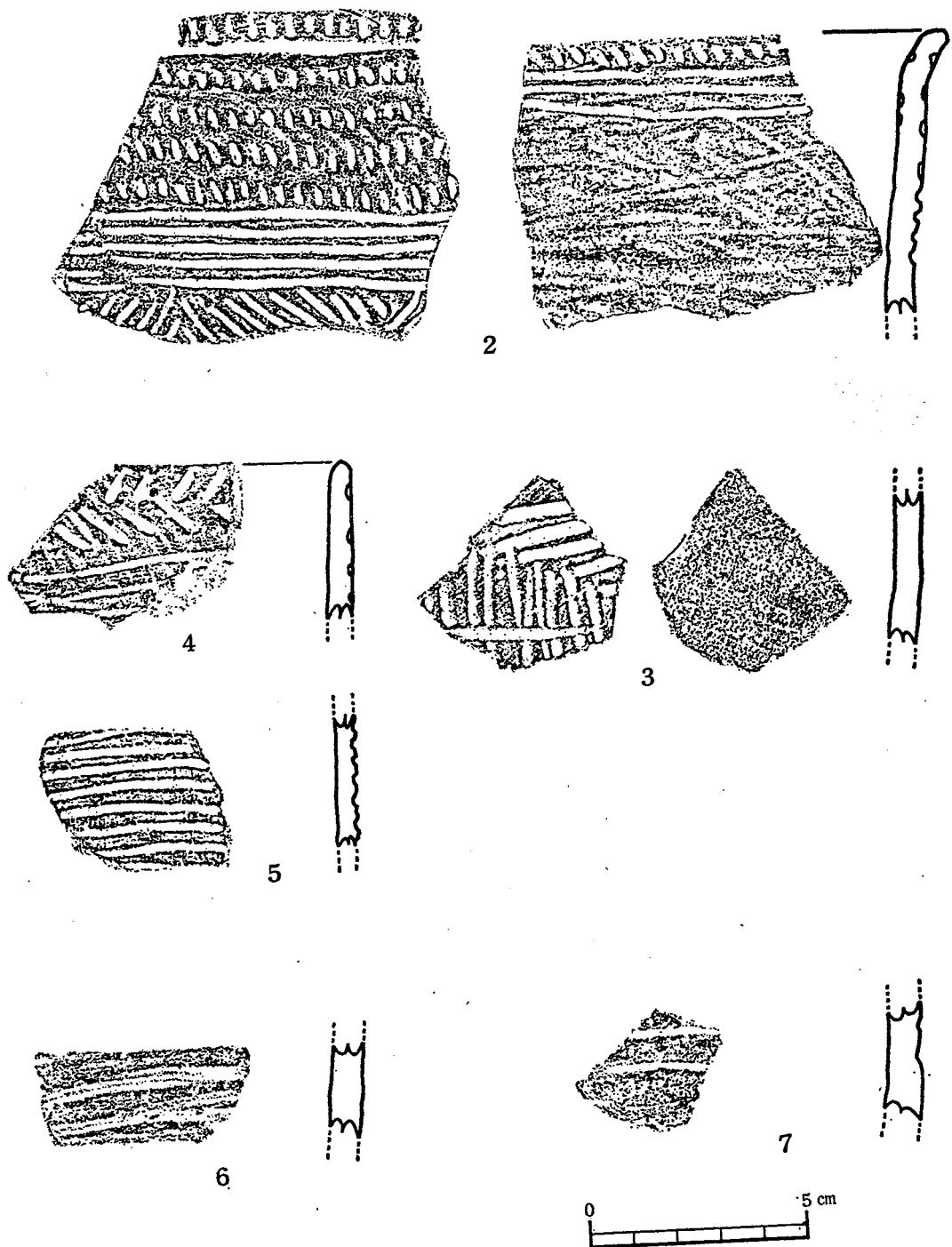
図版28 Cトレンチ層位図



図版29 Aトレンチ出土遺物実測図(1)



図版30 Aトレンチ出土遺物実測図(2)



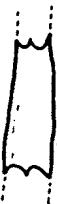
図版31 Aトレンチ出土遺物実測図(3)



8



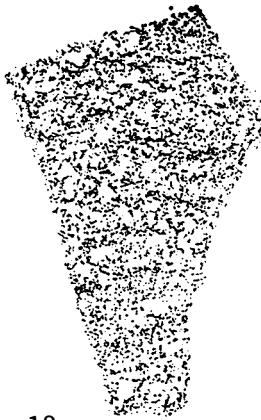
9



10



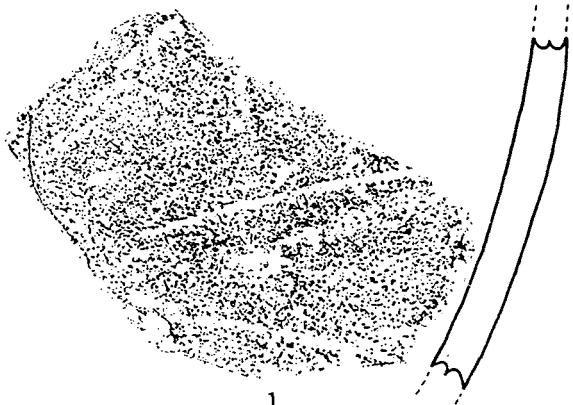
11



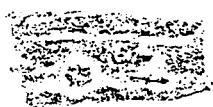
12



1



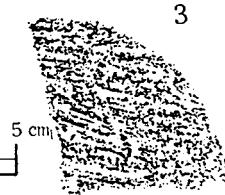
3



2



0

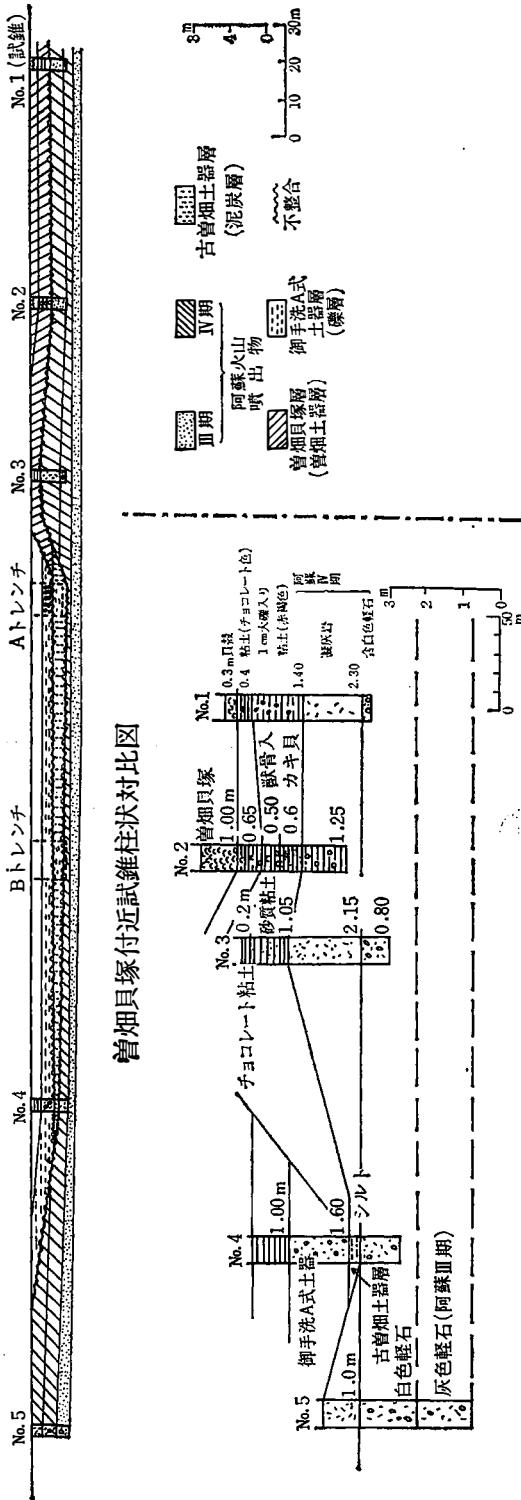


5 cm

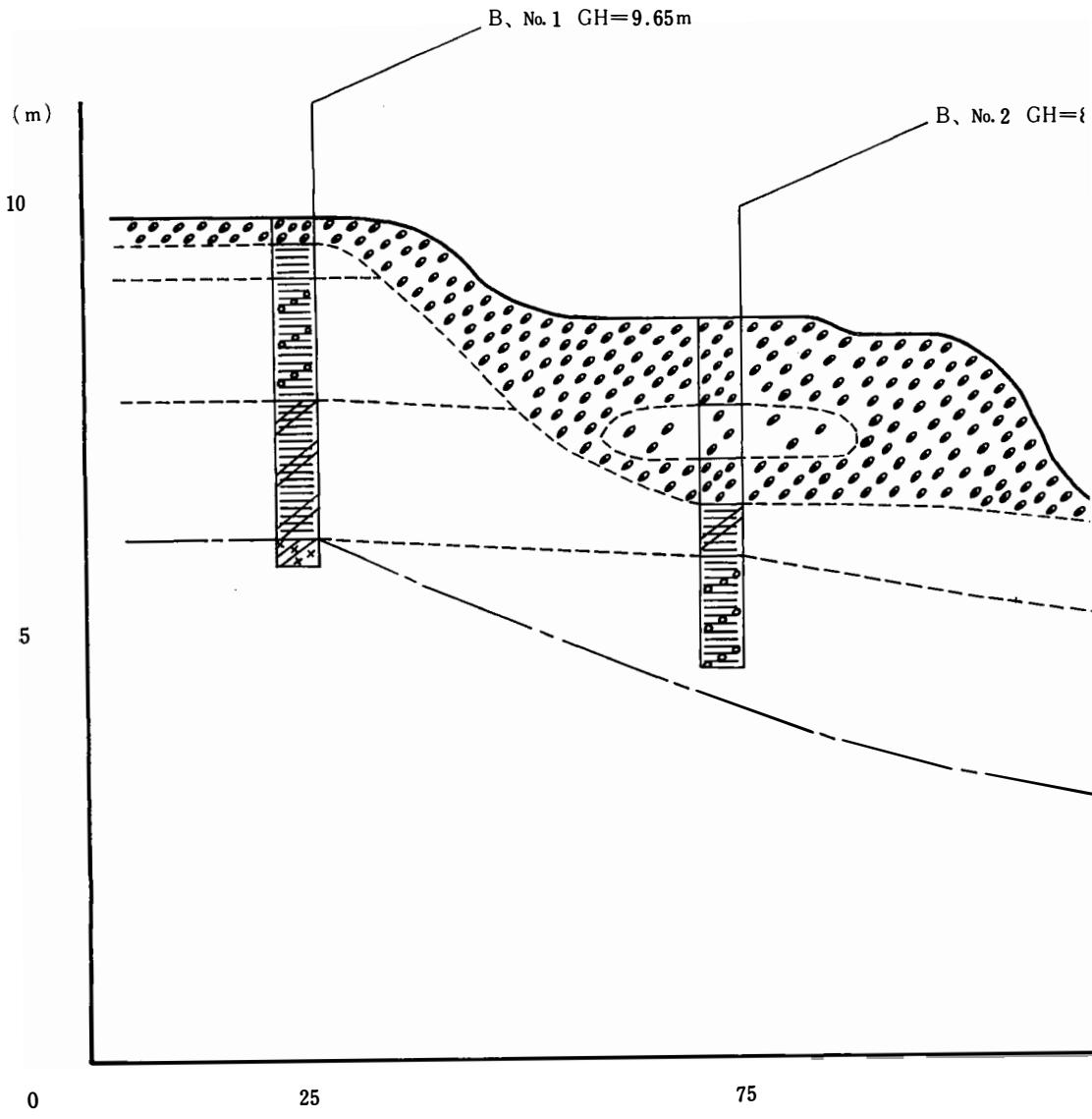


図版32 Bトレンチ出土遺物実測図

曾畠貝塚付近地質断面図



図版33 地質断面図



図版34 土質・断面図

125m

B、No. 3 GH=6.12m

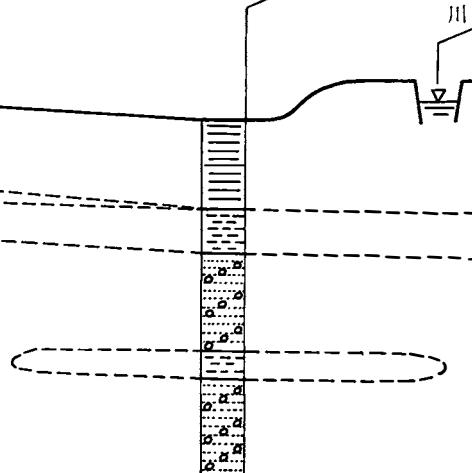


125

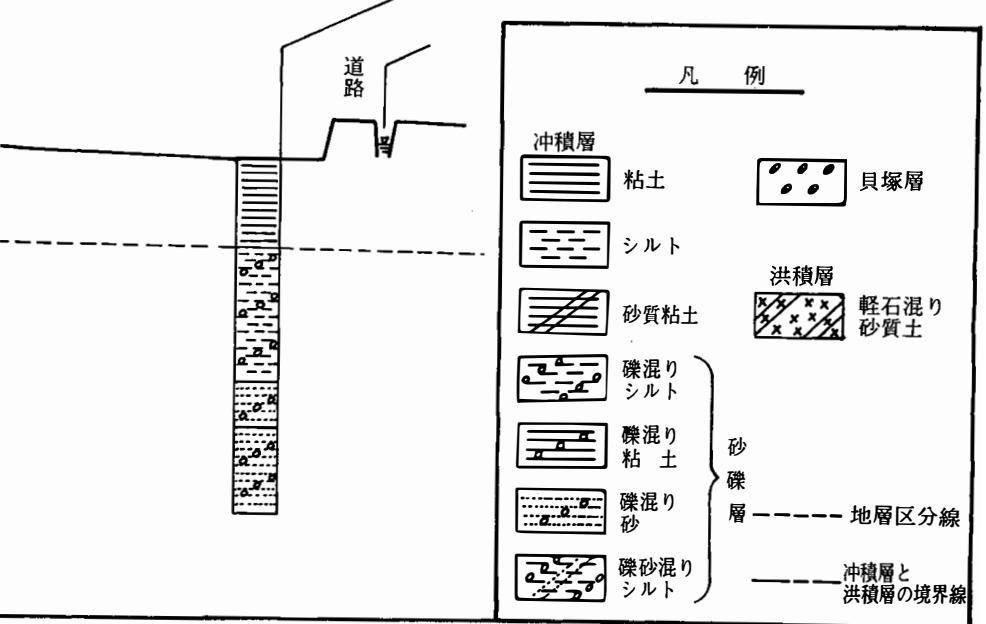
175

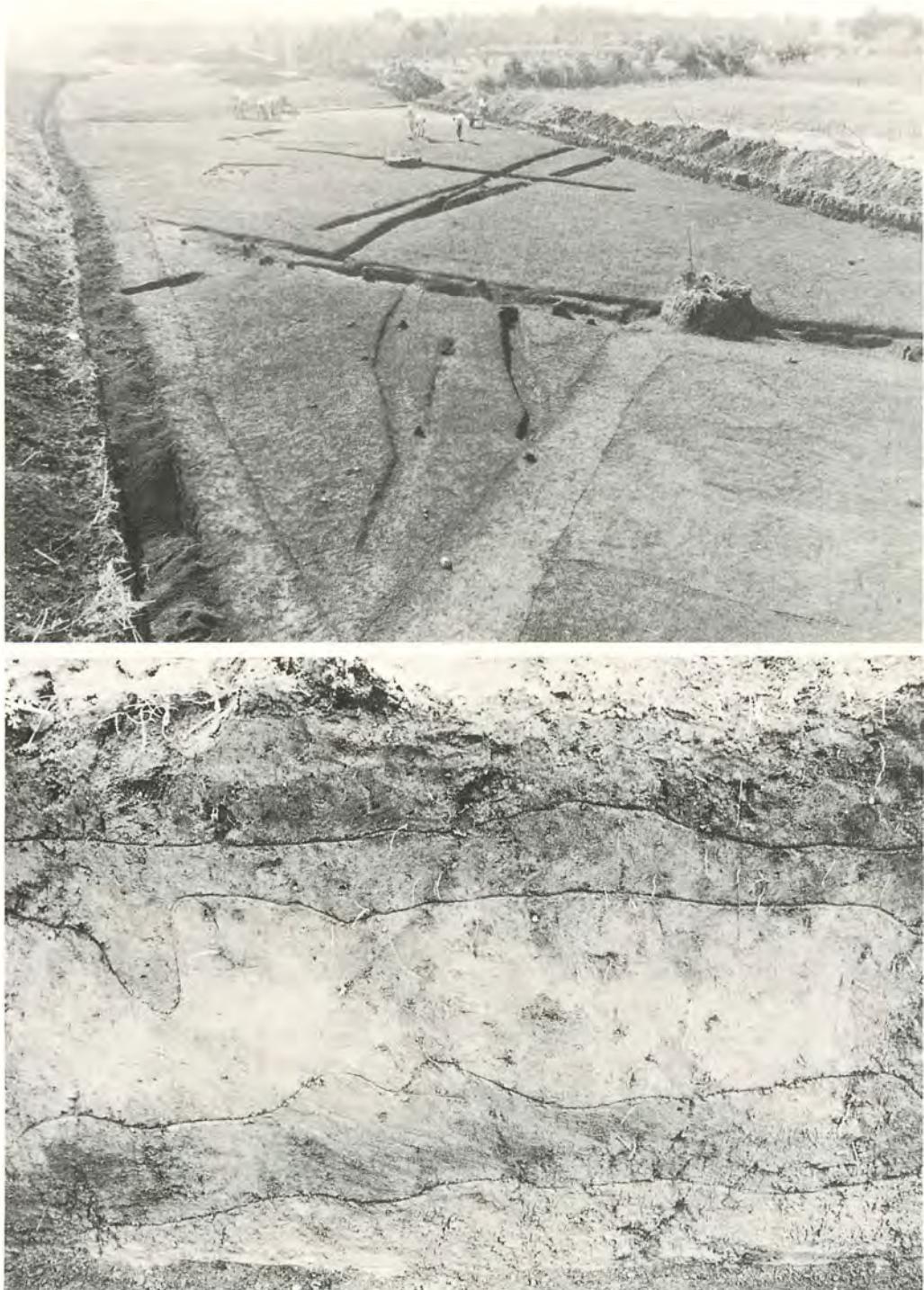
225

B、No. 4 GH=5.32m



B、No. 5 GH=5.15m





上、調査地全景

下、層位（第3トレンチ東側断面）



上、住居址(南から)

下、土塙(東から)



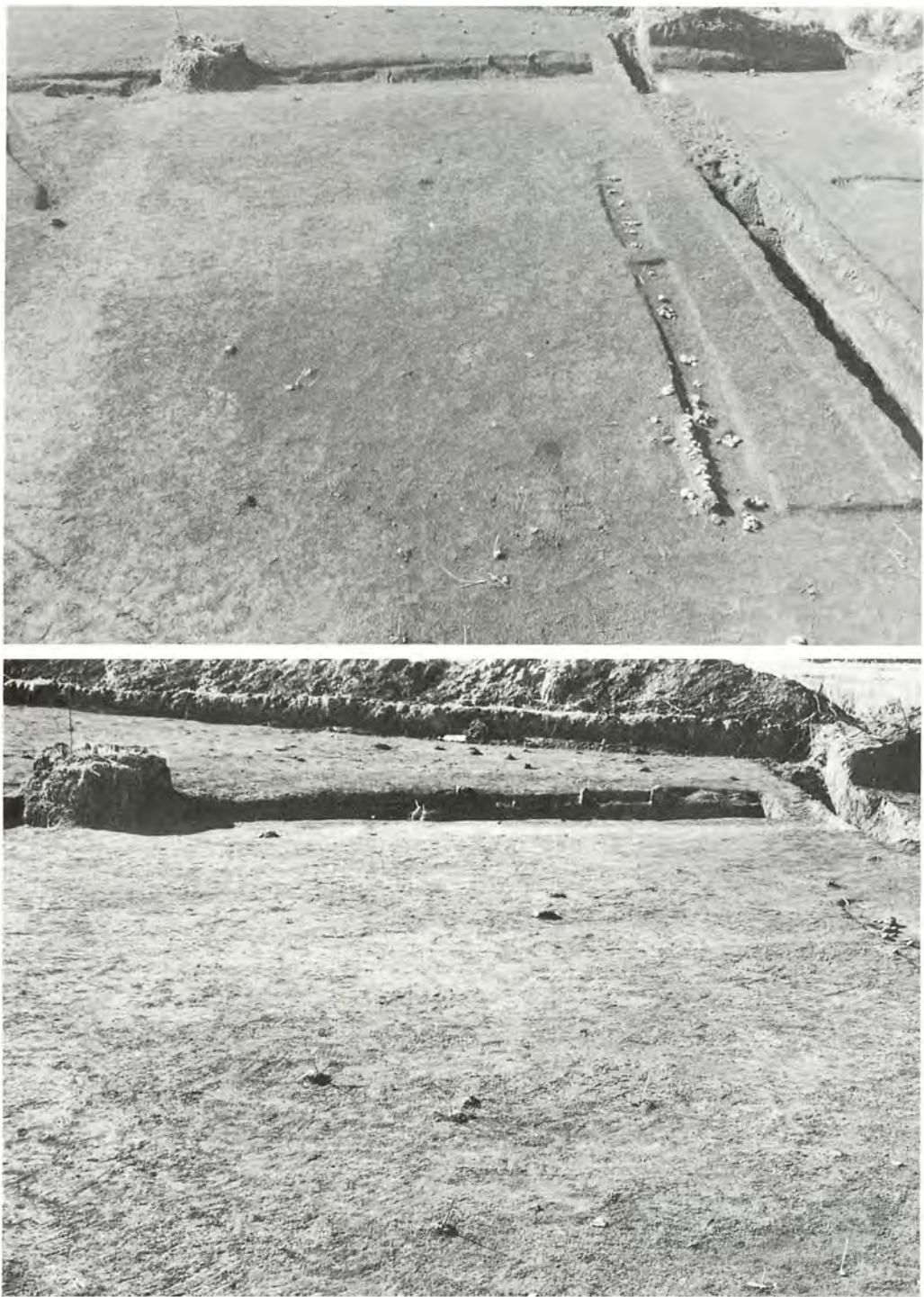
上、柱穴群掘り込み前の清掃状態

下、柱穴群検出状態



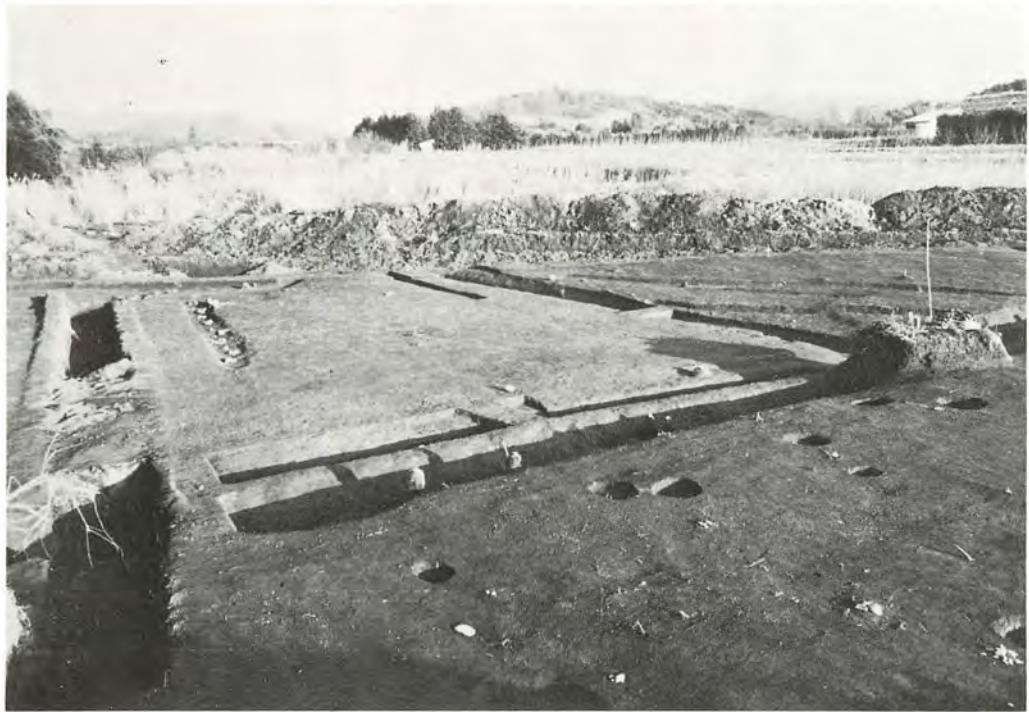
上、No.23. 24調査地

下、第2～5号溝と柱穴群



上、方形遺構検出前の清掃状態

下、方形遺構内（フラットな状態を示す）



上、方形遺構（南から）

下、方形遺構（西から）



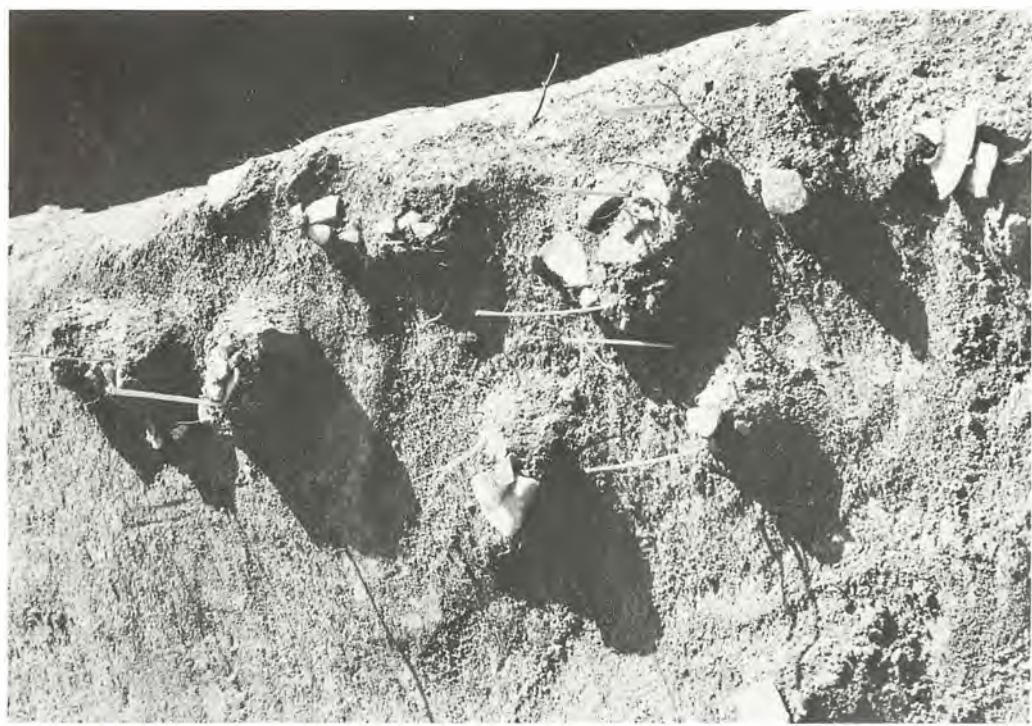
上、第1号溝

下、第1, 7. 8号溝



上、第7、8号溝

下、第7号溝東部、土器出土状況



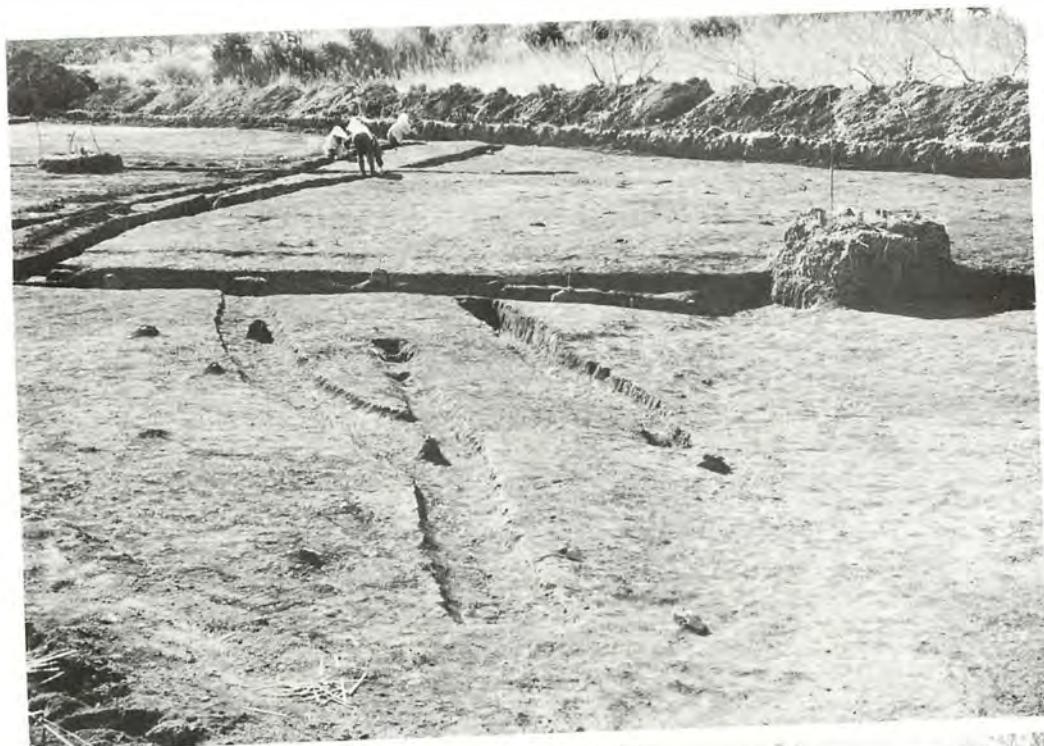
上、第7号溝東部土器出土状況

下、第3、4、5号溝と方形遺構（東）・柱穴群（西）



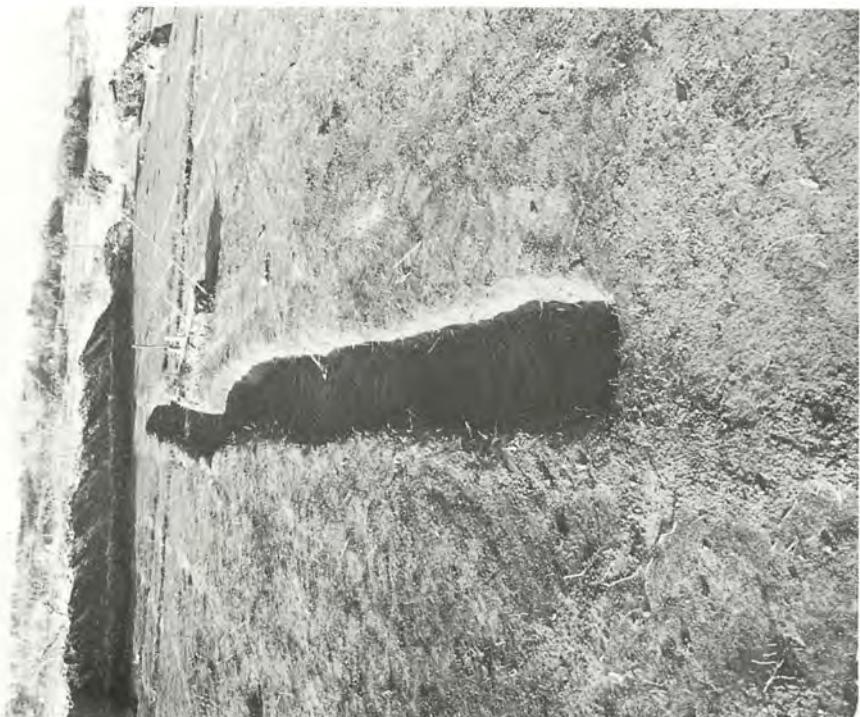
上、第5号溝（南から）

下、第3、4、5号溝（北から）



上、第10. 11号溝

下、第13~15号溝検出状況



上、第13号溝（南から）

下、第16号溝を中心



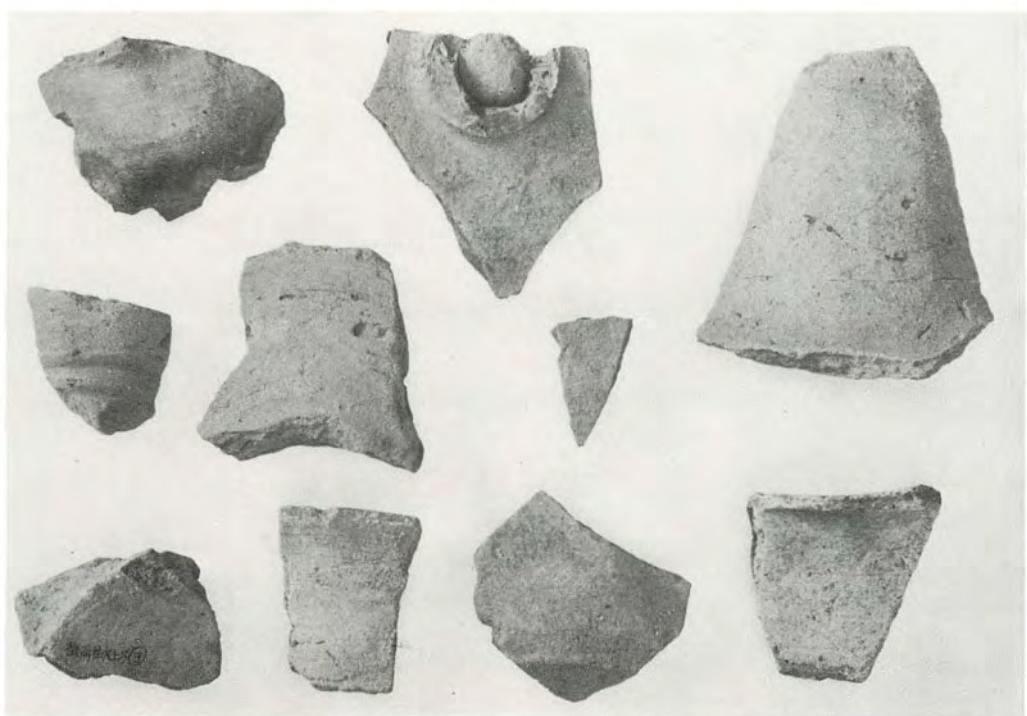
上、大溝断面状態

下、大溝清掃状況



上、大溝 (No.27調査区南から)

下、大溝 (No.27調査区北から)



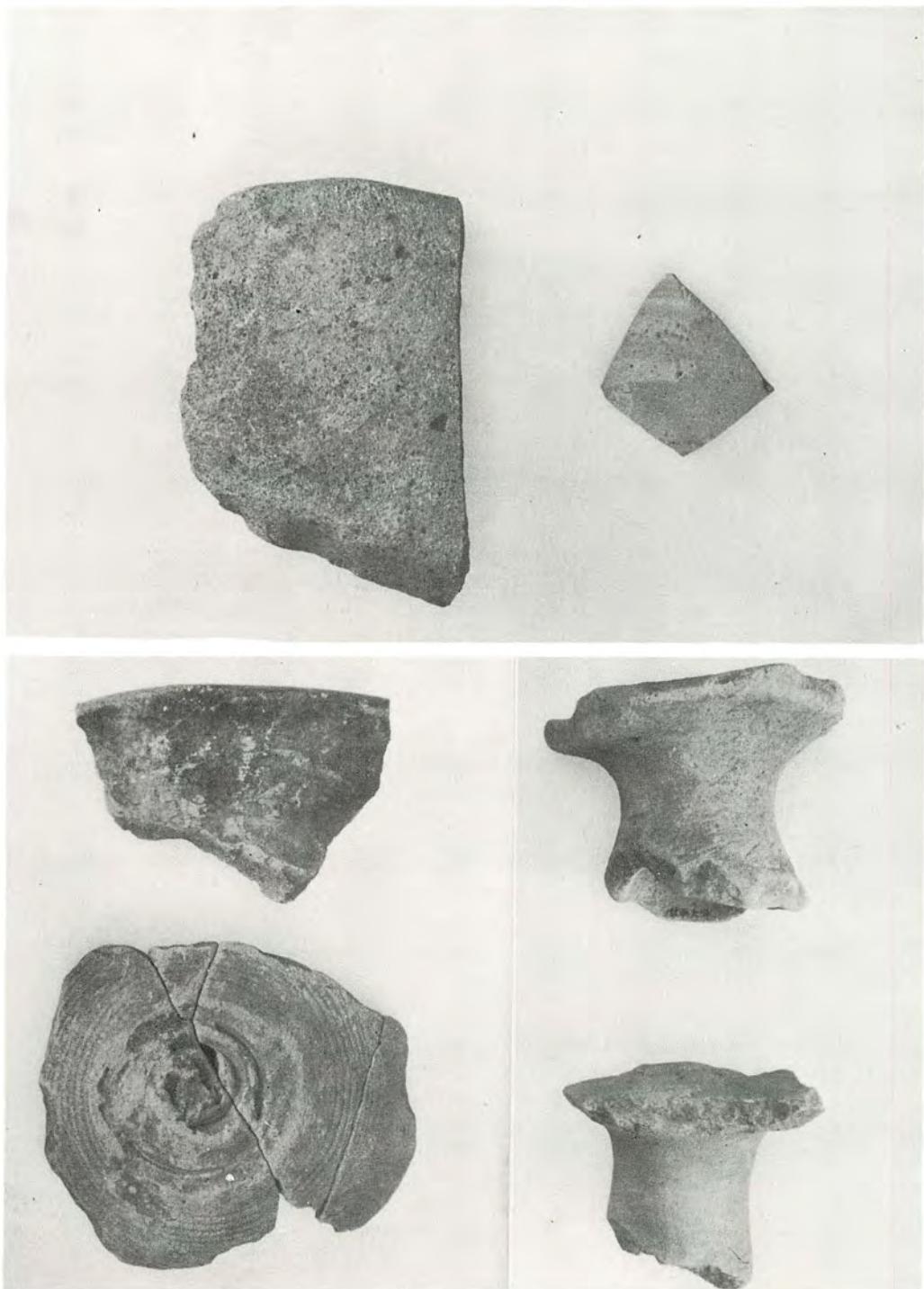
上、柱穴周辺出土遺物

下、柱穴周辺出土遺物



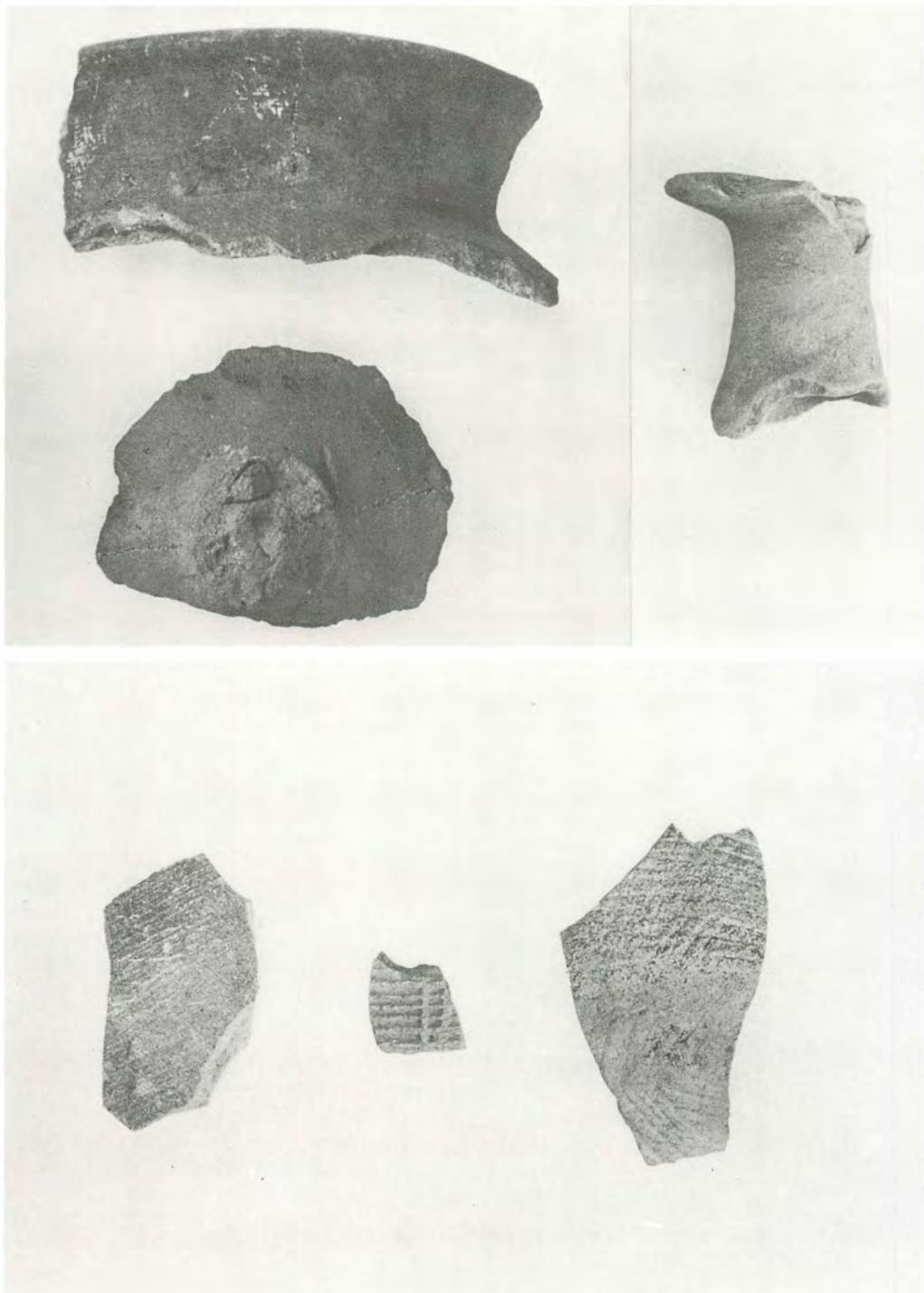
上、柱穴周辺出土遺物

下、第7号溝東部出土遺物



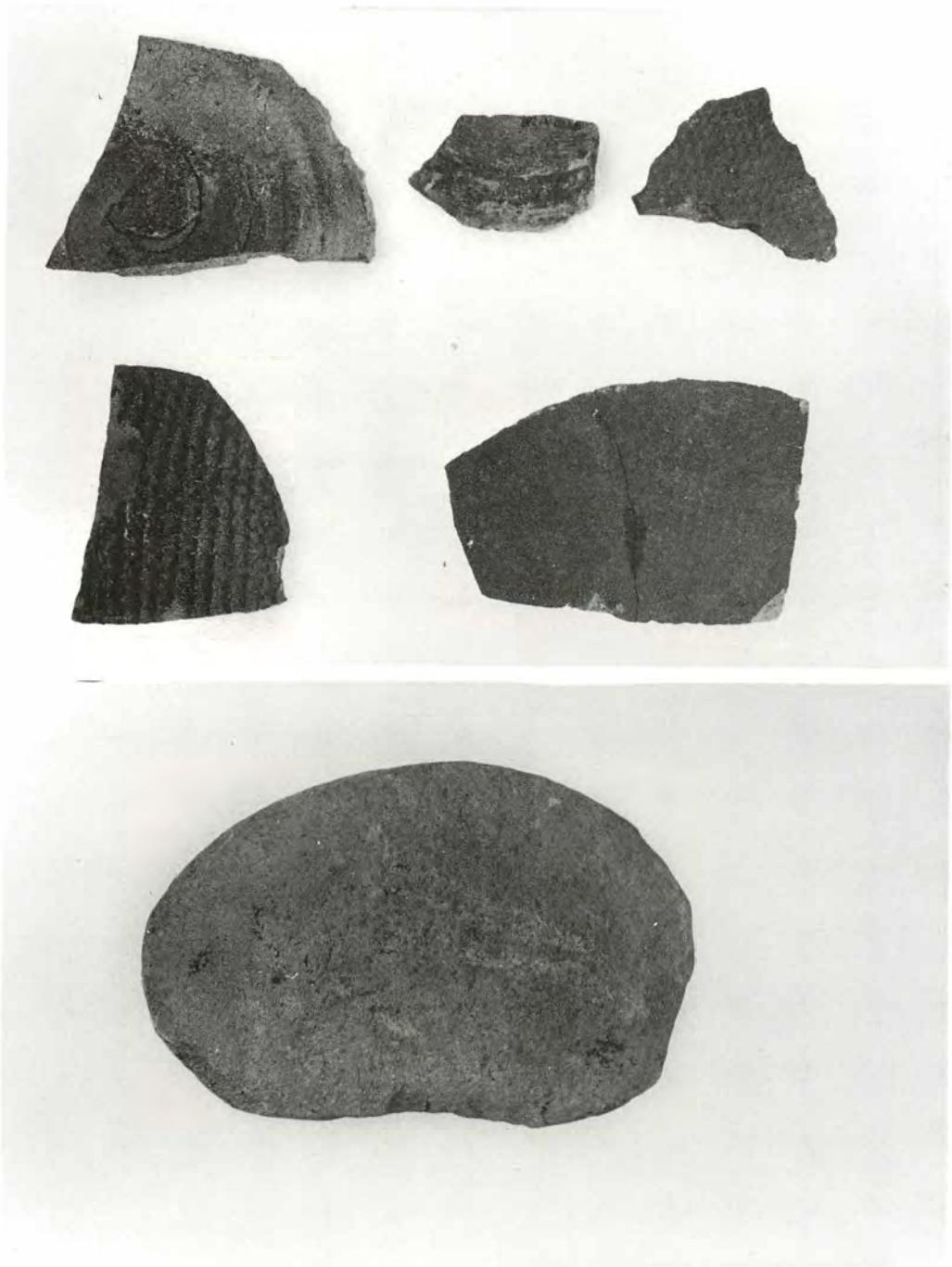
上、第7号溝東部出土遺物

下、大溝出土遺物



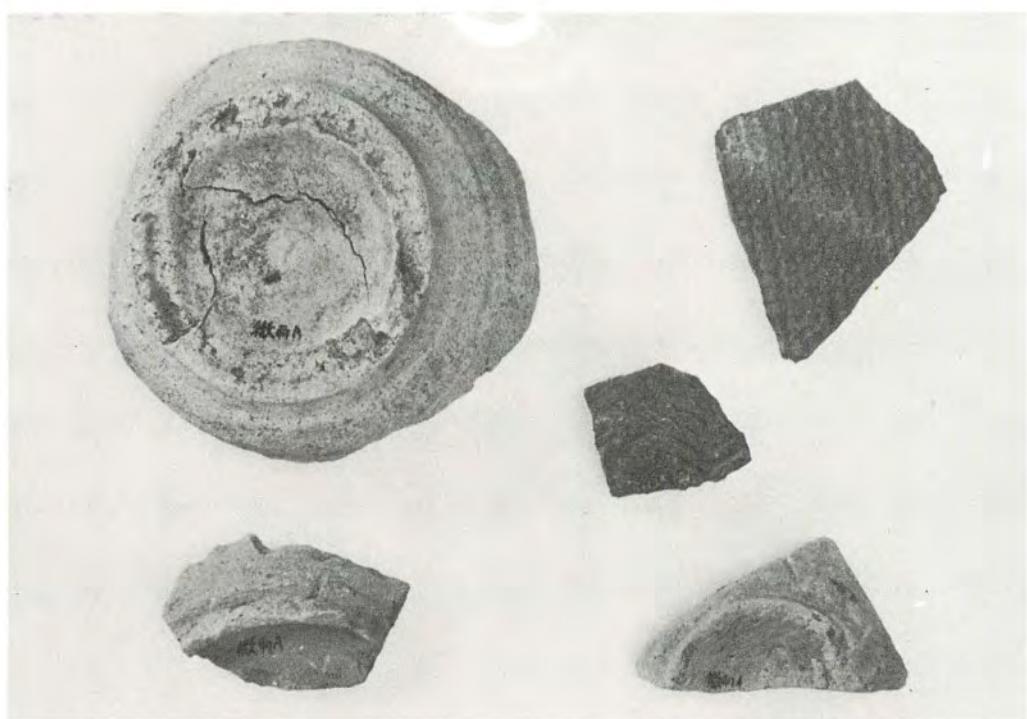
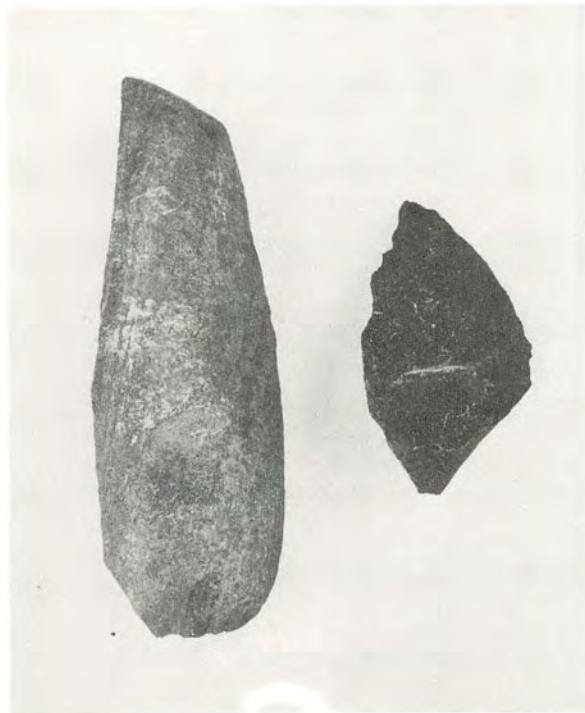
上、大溝出土遺物

下、大溝出土遺物



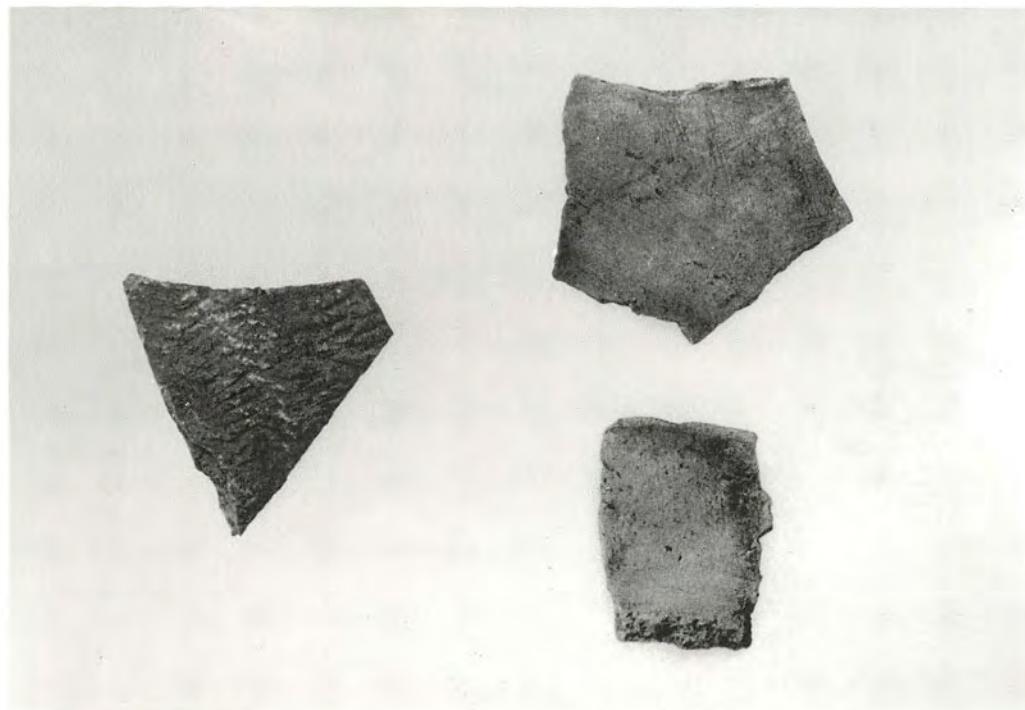
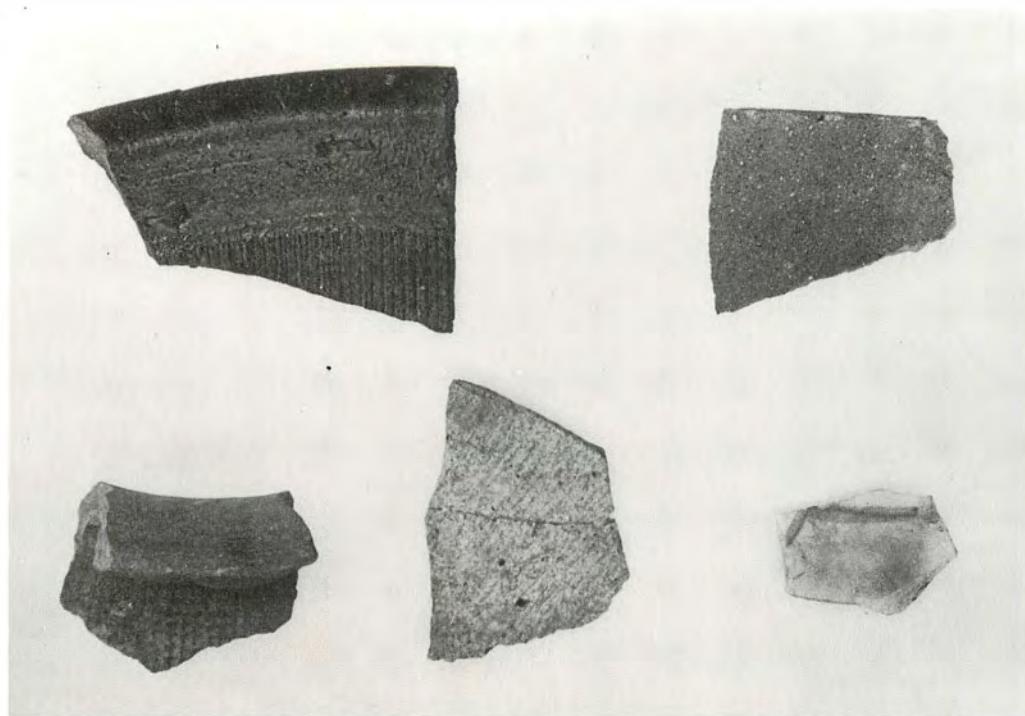
上、第1号溝出土遺物

下、第1号溝出土遺物



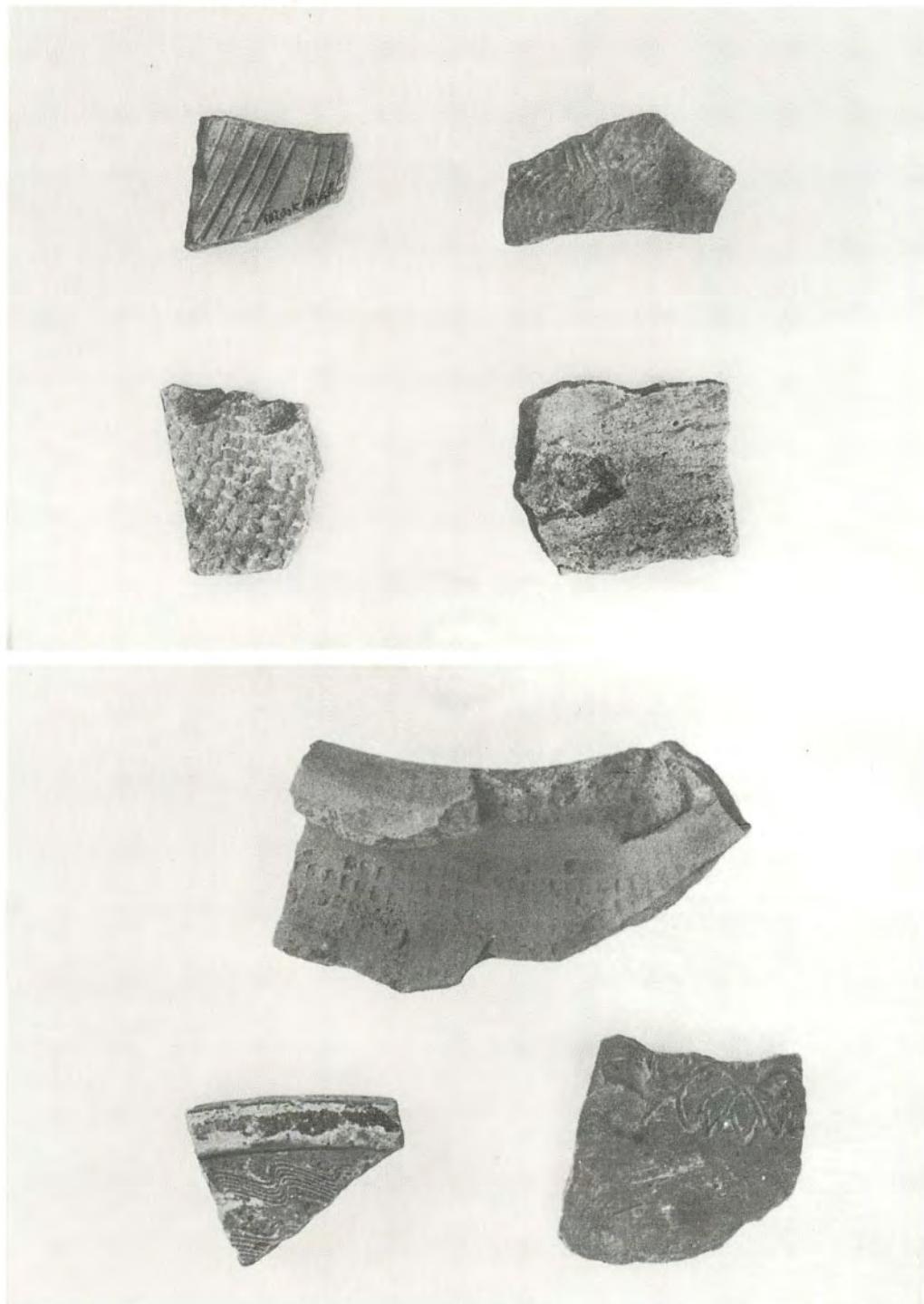
上、第1号溝出土遺物

下、A. B 地區出土遺物



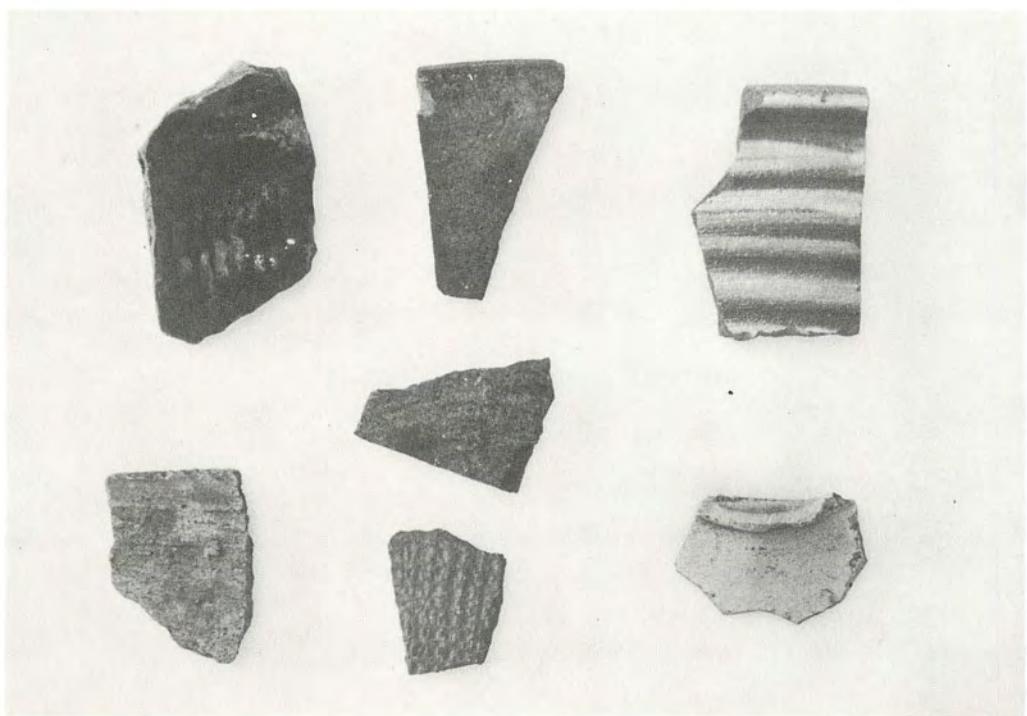
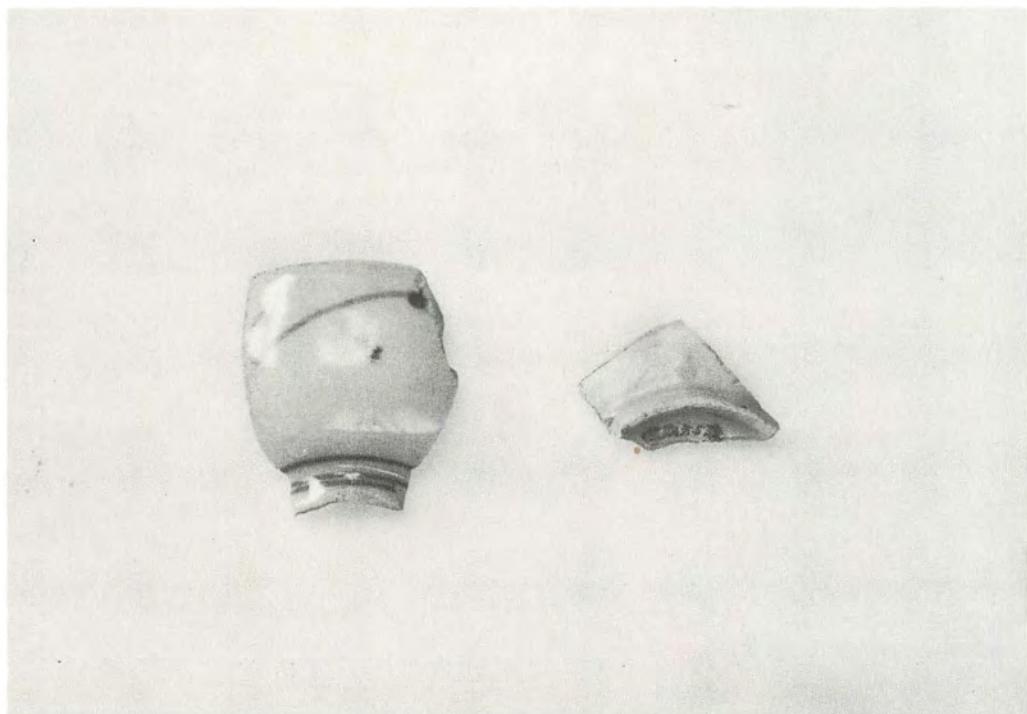
上、A. B 地区出土遗物

下、第4号沟出土遗物

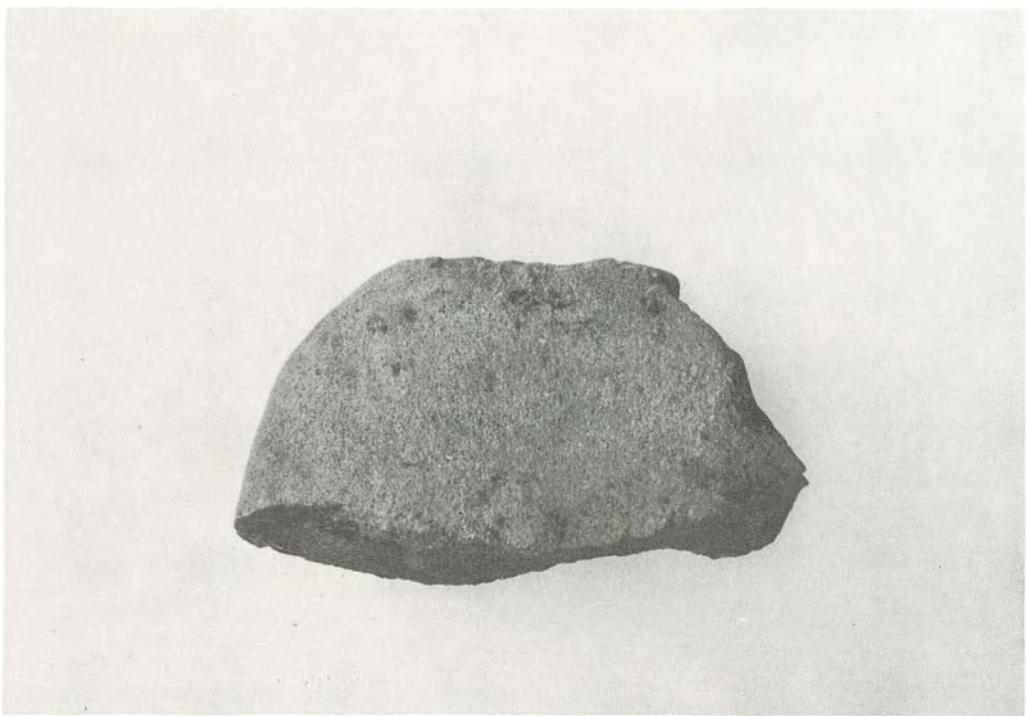


上、第4号溝出土

下、第5号溝出土遺物



上、第5号溝出土遺物  
下、No.27調査区出土遺物



上、第14号溝周辺出土遺物

下、表採資料



上、Aトレンチ調査状況

下、Aトレンチ（後方は曾畠貝塚）



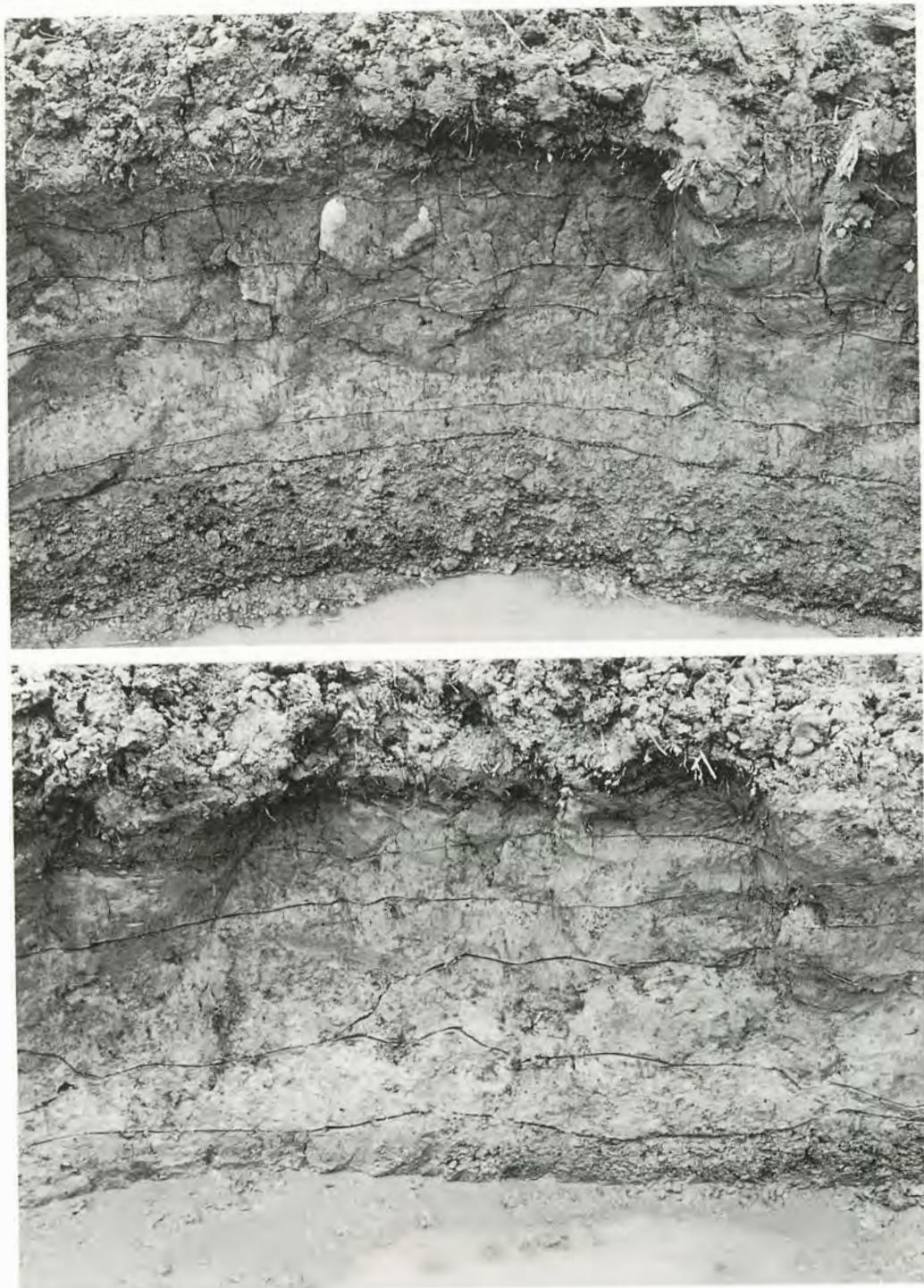
上、Aトレンチ（東から）

下、Aトレンチ（西から）



上、Aトレンチ東側断面

下、Aトレンチ東側断面弥生式土器片 出土状況 (V層)



上、A トレンチ北側断面

下、A トレンチ北側断面（拡大）



上、Bトレンチ北側断面

下、Bトレンチ東側断面



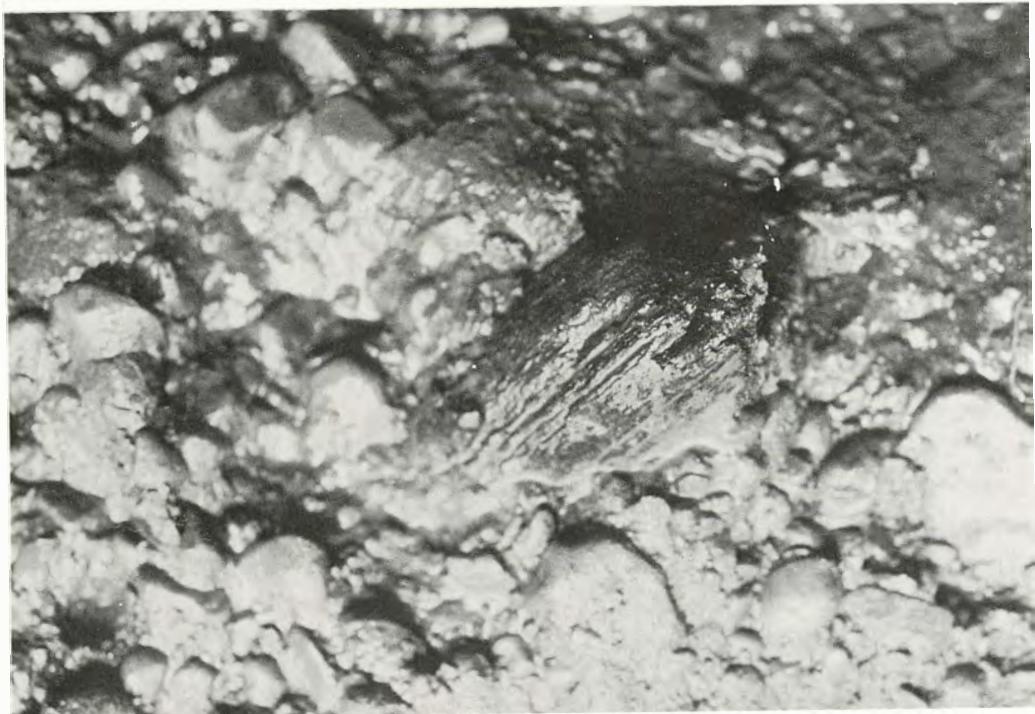
上、Cトレンチ東側断面

下、Cトレンチ北側断面



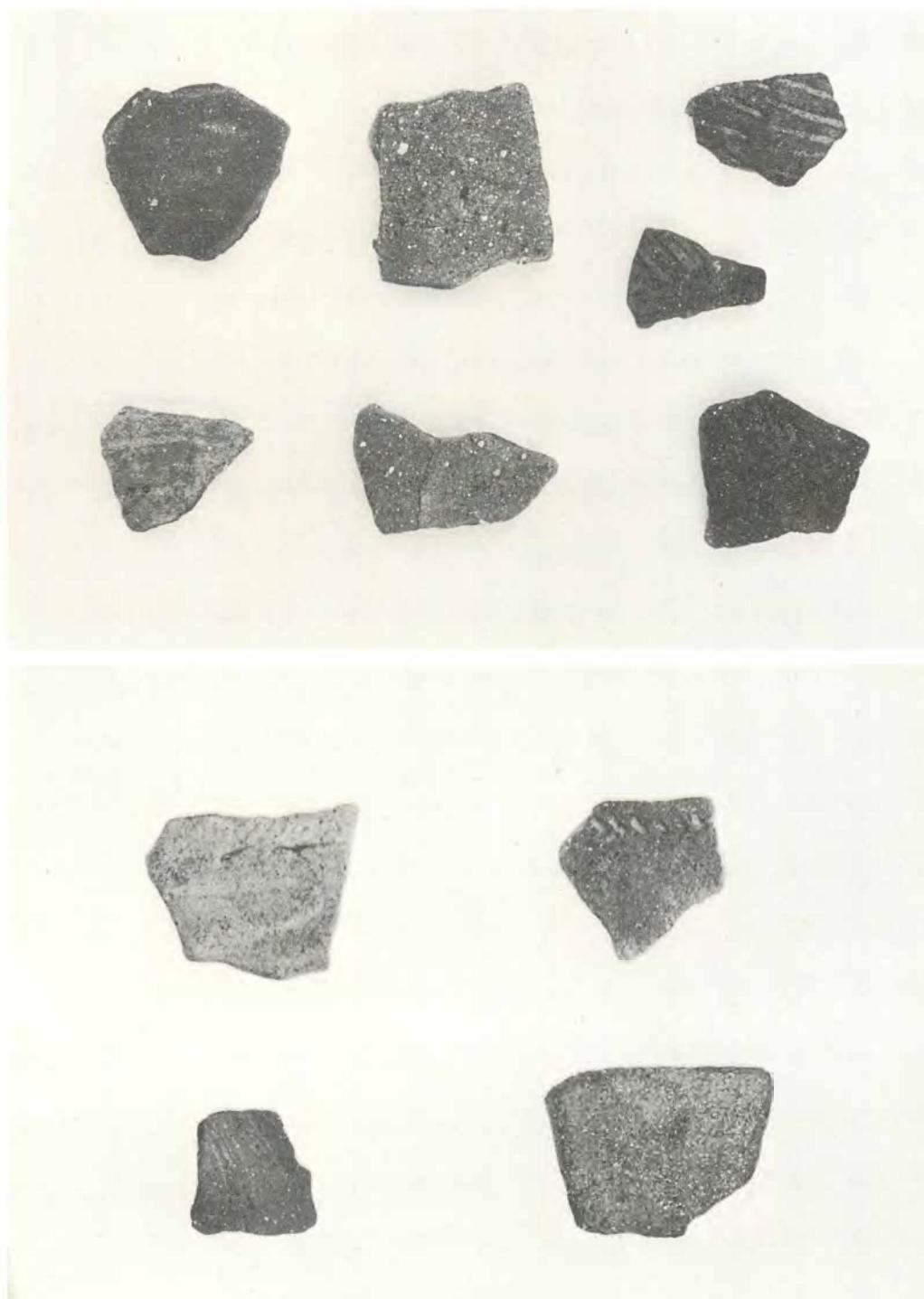
上、Aトレンチ東側断面

下、Aトレンチ第Ⅳ層貝類出土状況



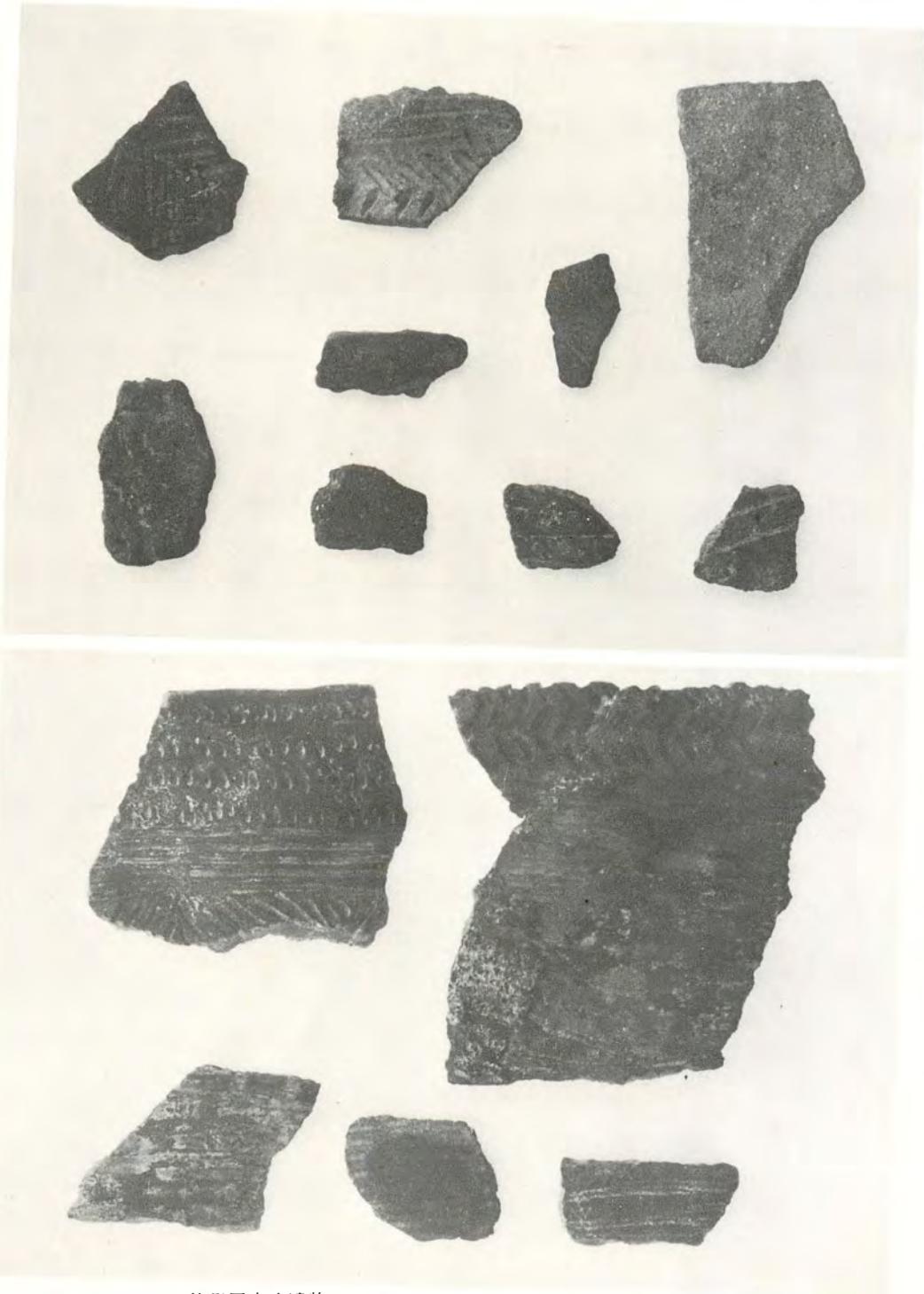
上、A トレンチ第Ⅸ層土器出土状況

下、A トレンチ第Ⅸ層木片出土状況



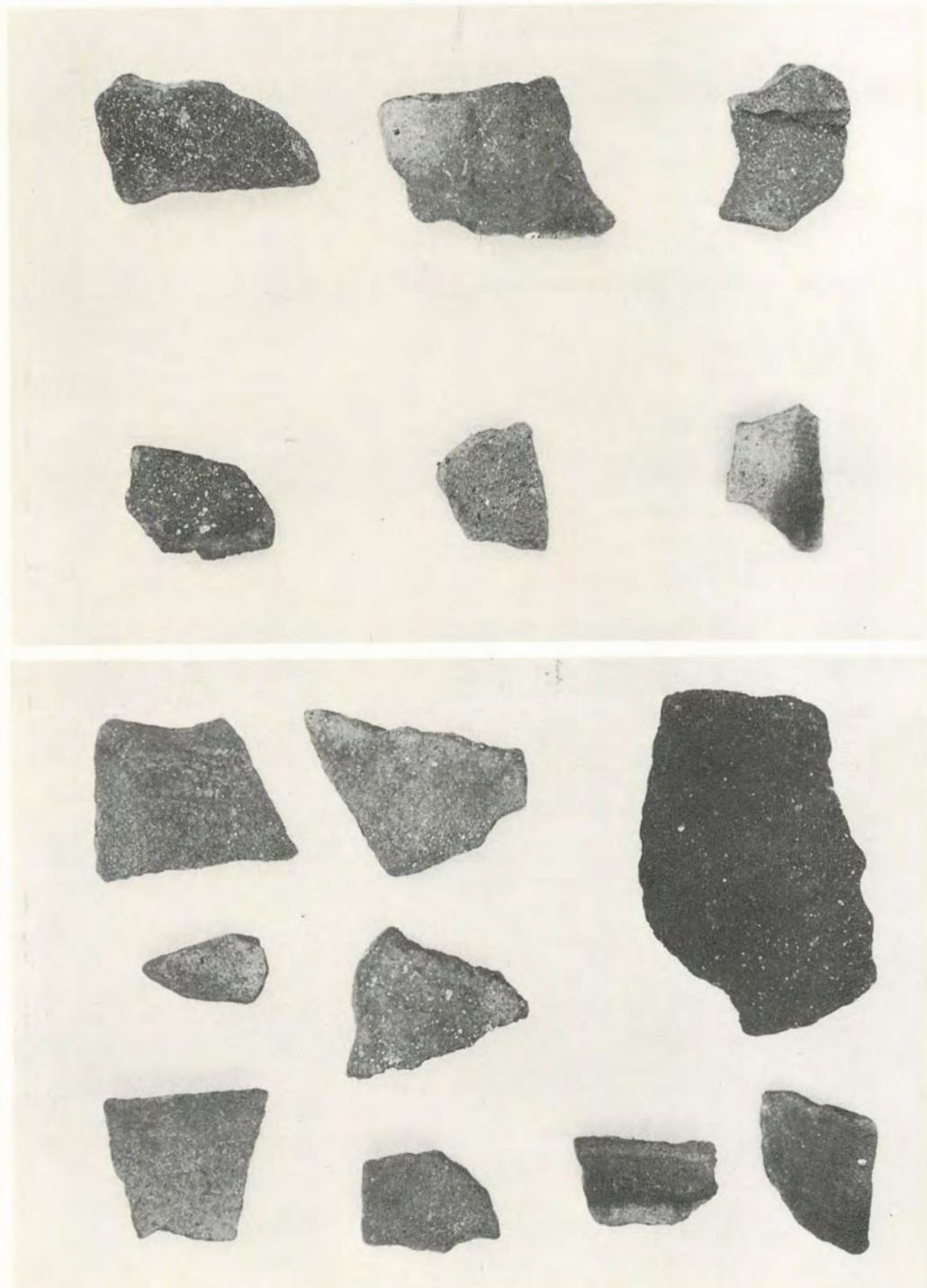
上、Aトレンチ第VII層出土遺物

下、Aトレンチ第VII層出土遺物



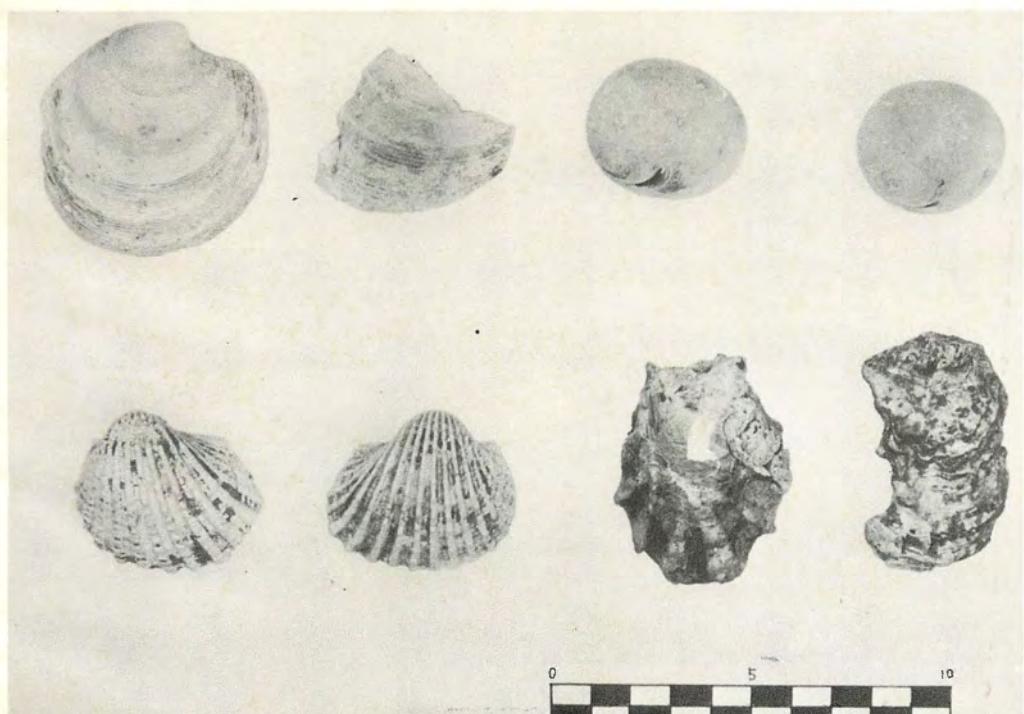
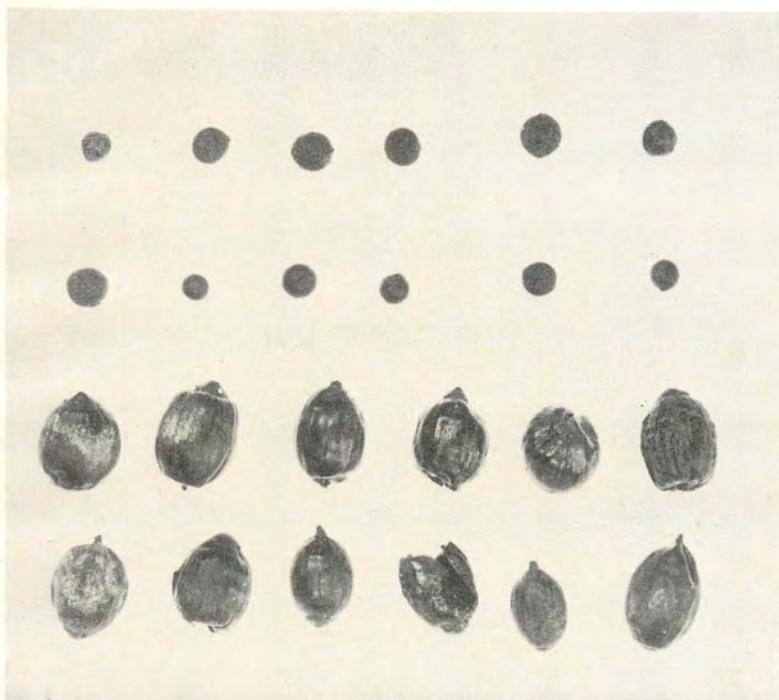
上、Aトレンチ第Ⅷ層出土遺物

下、Aトレンチ第Ⅸ層出土遺物



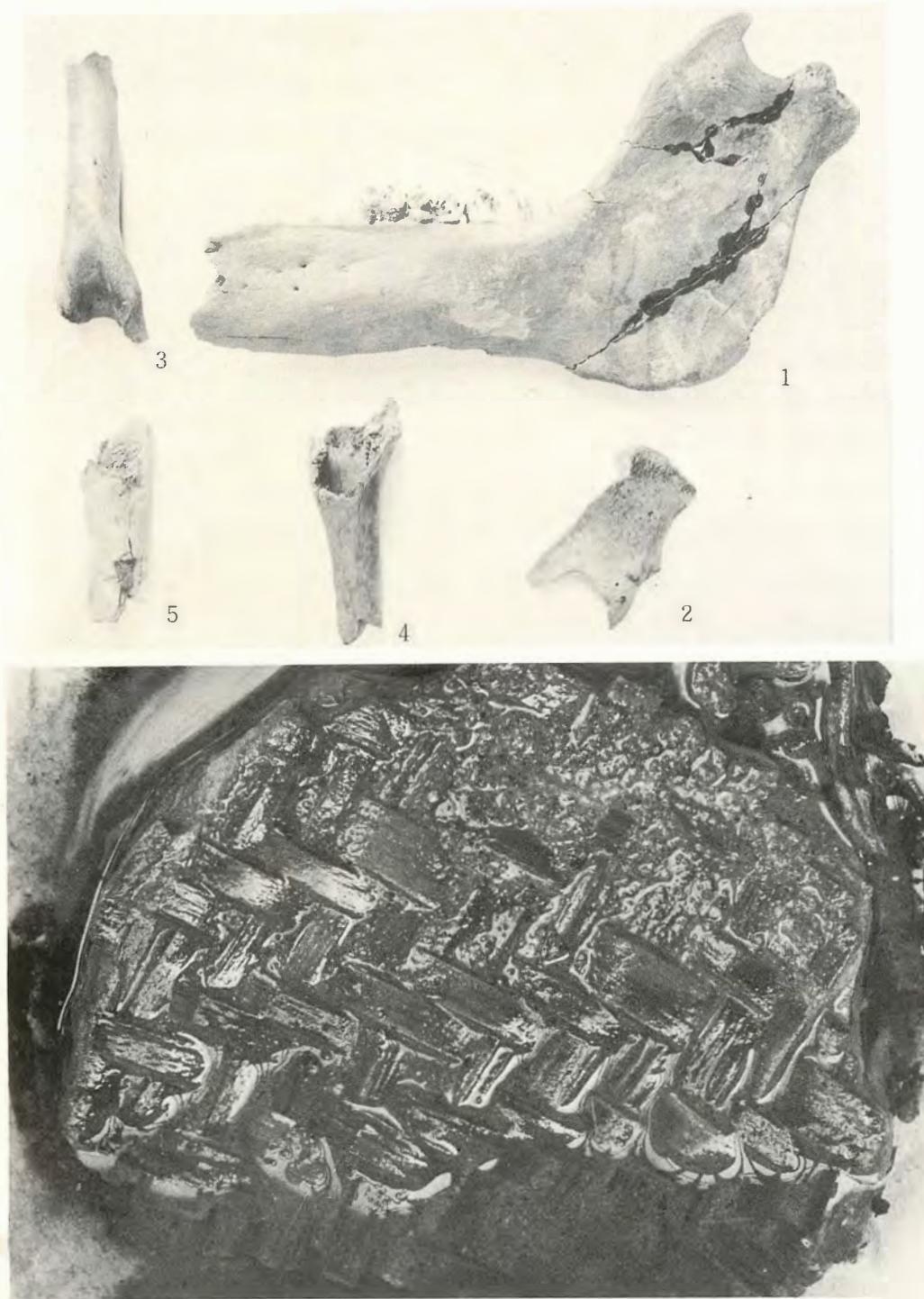
上、A トレンチ第IV層出土遺物

下、A トレンチ第IX層出土遺物（石器）



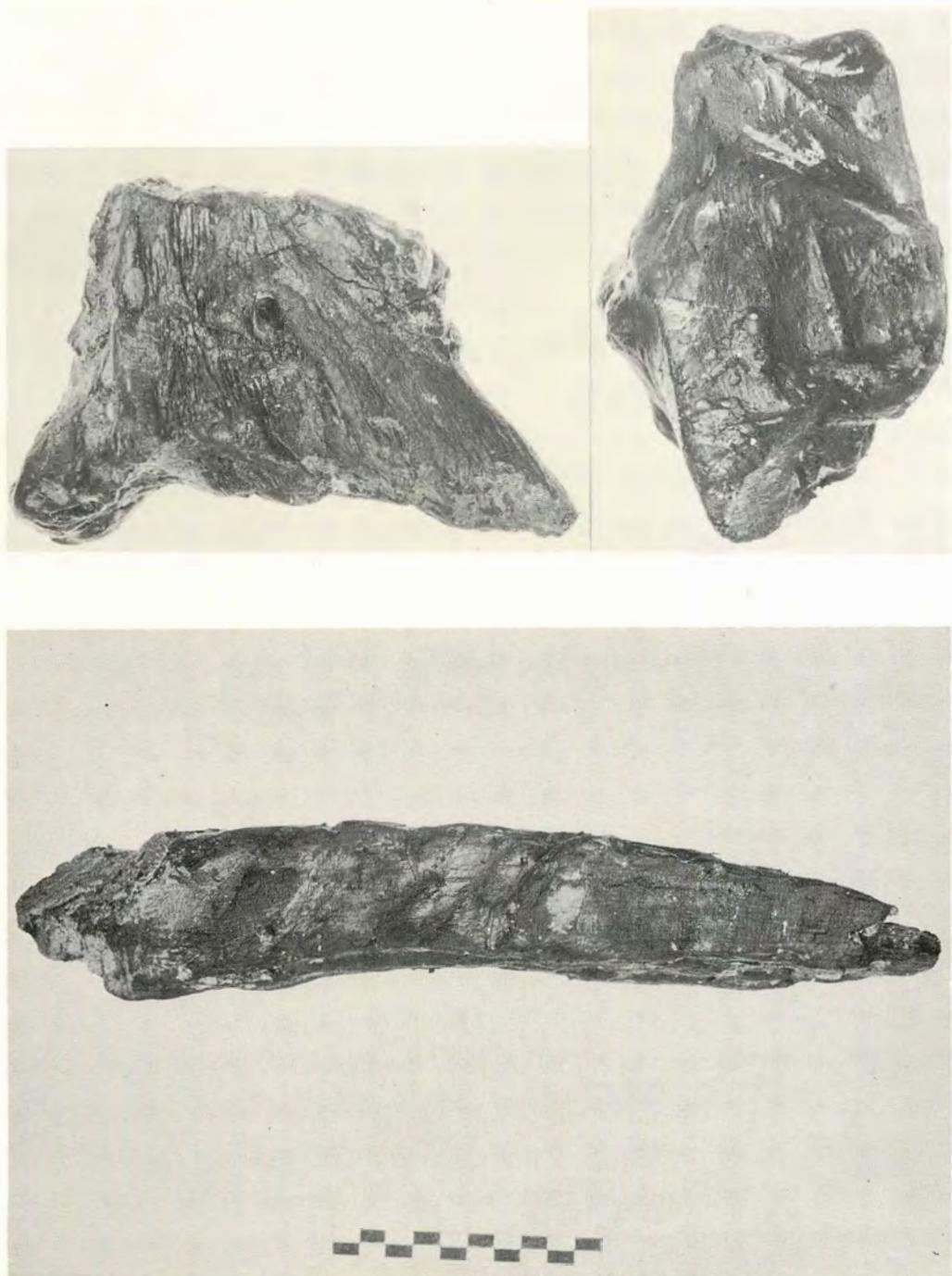
上、第Ⅸ層出土木の実

下、第Ⅸ層出土貝類

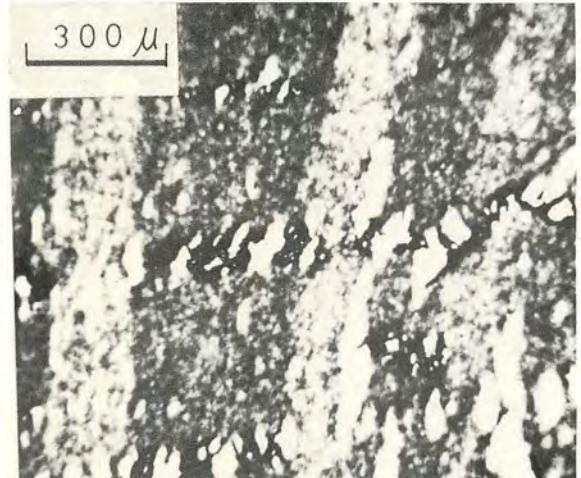


上、第IX層出土獸骨

下、第IX層出土網代



A トレンチ第IX層出土木片



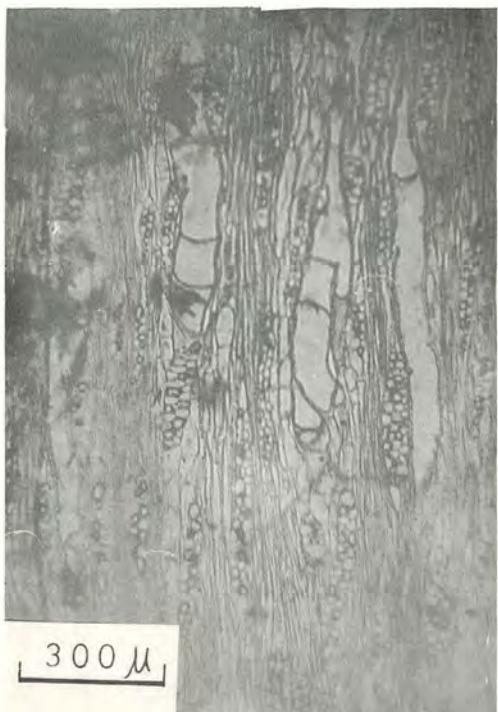
試料No. 1 (2) 板目面

300 μ

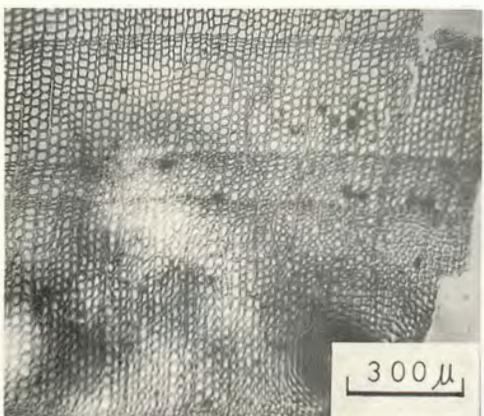
試料No. 1-(1) 橫断面 (木口面)



試料No. 2-(1) 橫断面 (木口面)



試料No. 2-(2) 杆目面



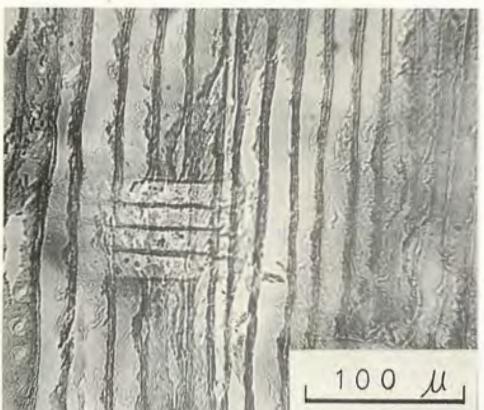
左（上）試料No.3-(1) 橫斷面（木口面）

左（中）試料No.3-(2) 柱目面

右（上）試料No.3-(3) 板目面

左（下）試料No.4-(1) 橫斷面（木口面）

右（下）試料No.4-(2) 板目面



熊本県文化財調査報告第19集

**微雨・曾畠**

昭和51年3月31日

編集 熊本県教育委員会

発行 熊本市水前寺6丁目18番1号 〒862

印刷 株式会社 秀巧社

熊本市国府4丁目10番18号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第19集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：微雨 曽畠

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日